



20 Years

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター 20 周年記念誌

ボランティアで未来を拓く

目次

巻頭言

ごあいさつ	入澤 崇	1
-------	------	---

設立 20 周年によせて ～関係団体からのメッセージ～

やる気を土台に世直しと学びの広場、これからも!	早瀬 昇	2
社会の課題に向き合い、活躍の機会づくりを	山口 浩次	3
これからも共に	掃部 郁子	4

第 1 章 ボランティア・NPO 活動センターの 20 年をふりかえって

人権意識と自治意識を持つ市民を育てる ～大学ボランティアセンターの基本的視点とは～	筒井のり子	7
----------------------------------------------	-------	---

第 2 章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

ボランティア・NPO 活動センターの遷移と社会の動き (年表)	14
始動期 (2001 年度～2005 年度)	16
成長期 (2006 年度～2010 年度)	17
転換期 (2011 年度～2015 年度)	19
近年 (2016 年度～2019 年度)	21
2020 年度	23

第 3 章 主なセンター事業のあゆみ

ボランティア相談対応や情報提供・発信	28
ボランティアに関する講義・研修など	30
海外体験学習プログラム	32
国内体験学習プログラム	36
災害支援に関する活動	38
学内でのボランティア啓発	40
近隣地域での活動	44
学生スタッフの育成	50
現役学生スタッフの声「私にとってのボラセン」	51

第 4 章 元学生スタッフ/学生スタッフ[ボランティア] および、「大学ボランティアセンター」に関する意識調査報告書

はじめに	55
1. 調査の概要と回答者の属性	56
2. 調査結果概要	56
3. 在籍期間を 3 つのグループに分けたことからの考察	59
4. 学生スタッフ活動における役職経験の有無からの考察	64
5. まとめ	68
資料 (質問紙・集計結果)	70

付録 ボランティア・NPO 活動センター 関係者名簿	97
----------------------------	----

龍谷大学ボランティア・NPO活動センターは2001年4月に設立され、2021年度で20周年を迎えることとなりました。この間、当センターの活動に対しまして、ご支援とご協力をいただきましたすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

本学は、御存知のとおり「浄土真宗の精神」を建学の精神とする大学でございます。

本年度は、第5次長期計画のあとを受け、2039年の創立400周年を見据えた「龍谷大学基本構想400」がスタートいたしました。その新たな船出を迎えたところへコロナ禍に見舞われてしまいました。私は、2019年の創立380周年において、基本コンセプトとして行動哲学「自省利他」を掲げました。「自省利他」とは、自分は果たしてこのままでよいのかと自らを省み、他者の安寧に資する行動を心がけることであり、コロナ禍にある今、まさに「自省利他」が持続可能な社会の実現に必要と考えています。今回のコロナは、今後どうあるべきか問い直す機会を与えてくれたのではないかと受けとめています。本学学生と教職員が一丸となって、この困難を乗り越えていかねばなりません。



龍谷大学 学長 入澤 崇

この20年間をみますと、日本各地で幾多の地震や台風、豪雨などの自然災害が発生し、その都度、大きな被害が繰り返されています。そして、そうした自然災害で被災した地では、復旧や復興にあたる支援組織の活動や個人・団体のボランティア活動が報じられ、ボランティアへの関心が高まるとともに、その重要性が増しております。

本学においてもボランティア・NPO活動センターが事務局となり、東日本大震災復興支援活動をはじめとする災害ボランティア活動に多くの本学学生が参加いたしました。学生は現地でのボランティア活動を通して、被災地の状況や抱える課題と現実を目の当たりにし、多くのことに気づき、そして深く考え、模索する機縁を得ることとなりました。この経験こそが人間としての成長を促すものであり「自省利他」につながるものと考えています。

この度の新型コロナは、現在もお先行きが不透明で混迷を深めていますが、今こそ人と人とがつながりあって励まし合い、助け合い、支え合い、共に力を合わせて乗り越えてまいりましょう。

最後となりましたが、ボランティア・NPO活動センターに対し一層のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

やる気を土台に世直しと学びの広場、これからも！

センター開設20周年、おめでとうございます。「実践で現場をリードする！」龍谷大学（そう私は評価しています）ですが、これはセンターでも同様ですね。

その取り組みは教員などとの連携と他大学に比べて質量ともに充実するボランティアコーディネーターの皆さんの努力に支えられてきましたが、加えて学生スタッフが主体的、創造的に活動してきたことも大きな特色でしょう。

学生スタッフ数を公表している他大学の一部と比較した限りですが、全在校生に占める学生スタッフの比率がかなり多いことも龍谷大学の特徴です。これは、学生スタッフの皆さんがセンターの活動に手応えを感じ、ボランティア活動の楽しさを広く周囲に伝えてきたからでしょう。

そして、その背景にはスタッフに“内発的”な、自身の内側から意欲・やる気が高まる体制をセンターが整えてきたことがあると思います。活動の意欲を高める方法として、一般的に活用されるのは「アメとムチ」を使った“外発的”な動機付けです。望ましい行動をすれば報酬や表彰、大学の場合なら単位を与えるなどの対応を取り、成果をあげられなかったら、そうした報酬は与えない。実際には「ムチ」はまず使いませんが、生徒会活動やボランティア活動の経歴を高校進学時の内申書に反映させるなどの形で、「アメ」を用意する対応はよく取られています。

しかし龍谷大学ボランティア・NPO活動センターは、そうした対応は一切なし。それに代わるのがコーディネーターの皆さんの働きかけです。学生スタッフに企画を任せつつ、不安を感じるスタッフを励まし、より深く活動の意味を考えられるために問いかけ、さらに時には突き放して自律的な活動を促す。実際、コーディネーターの皆さんと話をすると、学生スタッフへの関わりがよく話題に上り、熱い思いで学生スタッフに向き合っていることが伝わってきます。

内側からやる気が高まる鍵は、自律性を高め、熟達できる機会を作り、明確な意味づけを得ることだと言われますが、まさにこのことを実践しているのが、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターなのだと思います。

主体的に活動に取り組む姿勢は、自身を取り囲む社会課題を自分事として受け止め、課題解決に向けた行動で“元気”が生まれ、さらに自らの生き方の問いかけにもつながるなど、多くの学びを得るための重要な条件でもあります。

世直しも学びもできる広場として、今後のさらなる活躍を期待しています。



社会福祉法人 大阪ボランティア協会
理事長 早瀬 昇



龍谷大学が会場の日本ボランティアコーディネーター
研究集会 2011 での早瀬氏（中央）

社会の課題に向き合い、活躍の機会づくりを

私は、卒業生として、また地元大津の社会福祉協議会（以下「大津市社協」と略す）の職員として、設立当初から関わりを持たせていただいています。

センター設立前の2000年は、社会保障の大きな節目の年でした。介護保険制度がスタートし、成年後見制度や地域福祉権利擁護事業が創設されました。私は、大津市社協の地域福祉活動計画の打ち合わせで、龍谷大学社会学部の筒井研究室に通っていましたので、先生からセンター設立をうかがいました。関西の大学では、同様のセンターの存在を聞いたことが無かったので、とても新鮮に感じました。センターの入り口は、資料やチラシが整理されていて、とても入りやすかったことを思い出します。

夏の暑い日、瀬田キャンパスを会場に、学生リーダーを対象としたボランティア研修会の講師を担当しました。約50名の参加者は、相手を褒め合うという私のルールでワークショップが熱く進みました。最後のプログラムは、新入生歓迎会の持ち方を話し合い、グループごとにプレゼンテーションをしました。ユニークなアイデアがたくさん飛び出し、参加者どうしが褒め合うという幸せな空間に、龍大生のパフォーマンス力の高さを強く感じ、感動しました。

また、2011年の東日本大震災以降、センターは宮城県に復興支援バスを毎年出しています。私は、活動に参加した学生たちの報告を聞く機会を得ました。学生が、現場のボランティア活動を通して、感じたこと、多くの学びがあったという力強い報告に感動しました。テレビや新聞で聞いて、居ても立っても居られない思いの学生たちが、センターの調整があり活動できたことは本当に良かったと思います。

この経験があり、2013年の大津市の台風災害時には、センターを通して学生が災害ボランティアセンターに参加し、とても助かりました。その後、本会と大学とは災害時の協定を結ぶこととなり、毎年一緒に訓練をしています。

最後に、2020年は、コロナの影響で減収した世帯を対象にした「特例貸付」が、全国の社協窓口で実施されました。大津市社協の貸付相談は11月末で約5000件となり、昨年度比で約100倍、リーマンショック3年間の合計を大きく超えました。コロナ禍の困窮者層の増加は、今後のセンターの活動にも関係するだろうと感じています。

これからも、龍谷大学ボランティア・NPO活動センターが、社会の課題に向き合い、学生たちの各方面での活躍の調整機能を発揮することを期待しています。



社会福祉法人 大津市社会福祉協議会
事務局次長 山口 浩次



2019年度ボランティアリーダー養成講座

これからも共に

龍谷大学ボランティア・NPO活動センターとNPO法人うつくしまブランチのご縁は、2015年度から始まった「福島スタディツアー」です。以来、毎年ツアー初日にお会いするのを楽しみにしております。

今回、設立20周年の冊子に何を書かせていただくか考え、まず活動報告書を再度開いてみることにしました。丁寧に編まれた報告書から、その年その年の福島ツアーが立ち上がってきました。ちなみにRecord（記録）の語源は、ラテン語で「心に帰る」「心を取り戻す」を意味するそうです。まさに、心の記憶を呼び覚ます活動報告書です。



NPO 法人 うつくしまブランチ
理事 掃部 郁子

復興について「目に見える復興と目に見えない復興を合わせて対策を行っていかねば、本当の意味での復興には届かないと思いました」と、記した学生。2017年度から3年連続で参加した学生の一人は、今年度の報告書に「町の風景に慣れてしまったことが怖いと感じました」と、記していました。ツアーの後も福島関連の本を読むなどしたけれど、問題が複雑に絡み合う鎖のような福島の今を知るほどにわからなくなり、モヤモヤを抱えて1年を過ごし、翌年再びツアーに参加した学生は、避難指示により一度人口がゼロになった南相馬市小高区で次々にビジネスを起こしている男性の話に圧倒され、今ある状況の中で何かできるのか考えて行動していくことが大切だと思ったと書いていました。

私がいつも心を打たれるのは、学生の皆さんの真摯なまなざしと、現地に寄り添い出合いを大事にしながらツアーを育ててこられた教職員の皆さんの努力、そして、学生の微細な心の動きを支え、学生が感じたことを大事にする教職員の皆さんの姿勢です。福島で何を学び、どう行動していけばいいのか。問題が複雑過ぎて私もすぐに返答できません。そうした時に答えを急がず、モヤモヤを抱え続けることも一つの行動だと助言し、支える大人の存在は、大きな心の拠り所になるように思います。

福島で起きたことは、日本のどこにも起こりうることです。自然災害が増えています。新型コロナウイルスの感染拡大も止まりません。コロナ禍の不安と緊張感は、原発事故の際の不安と緊張感と似ています。繰り返したくないことがまた繰り返されています。どうしたらより良い社会にできるのか。これからも皆さんと一緒に粘り強く考え続けていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



2015年度福島スタディツアーでの掃部氏（左端）と参加学生たち



第1章

ボランティア・NPO 活動センターの 20 年をふりかえって

人権意識と自治意識を持つ市民を育てる

～大学ボランティアセンターの基本的視点とは～

龍谷大学 ボランティア・NPO 活動センター長

筒井のり子 (社会学部教授)



1 大学ボランティアセンターとは

日本において、大学生のボランティア活動への関心が高まったのは、1995年の阪神・淡路大震災がきっかけとされる。各地から多くの若者が被災地に集まりボランティア活動を行ったことから、マスメディアでは「ボランティア元年」と称されたりした。もちろん、学生によるボランティア活動の歴史は古い。戦前の関東大震災やそれを契機に展開されたセツルメント運動における学生の活躍、そして戦後の「BBS (Big Brothers & Sisters) 運動」なども大学生が中心となって推進してきた。

しかし、1970年代後半からは、高齢社会への危機感とともに中高年女性を中心とした地域でのボランティア活動が主流となり、学生をはじめとする若い世代のボランティア活動への参加は低迷していた。

そのような中で、当時、未曾有の被害をもたらした阪神淡路大震災が起き、多くの若者が主体的にボランティア活動に参加したことは驚きをもって受け止められた。同時に、“ボランティア活動が持つ教育力”が注目され、学生のボランティア活動等への支援について関心が寄せられるようになった。1998年10月の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について～競争的環境の中で個性が輝く大学～」では、初めて大学による学生ボランティア等への支援について言及された。さらに、1999年3月の文部省(当時) 高等教育局・学生のボランティア活動の推進に関する調査研究協力者会議による「大学教育におけるボランティア活動の推進について」において、大学ボランティアセンターの設置が公に提案された。

現在、日本の大学(短大含む)において、専門部署として設置されている「大学ボランティアセンター」は、169カ所である(2019年7月現在、NPO法人ユースビジョン調べ)。日本に大学・短大は1118校あり(文科省「令和2年度学校基本調査」)、そのほとんどにボランティア・NPOについての情報提供や相談を担当する部署(学生部や学生課)はあるが、独立した「ボランティアセンター」を設置している大学は1割強に過ぎない。

その一つが龍谷大学ボランティア・NPO活動センター(以下、本学センター)である。2001年に創設され、このたび20周年を迎えることとなった。そこで、改めて大学という教育機関にボランティアセンターを置く意味はどこにあるのかについて考えてみたい。

大学としての社会貢献/地域貢献という側面も重要であるが、当然のことながら「教育」とのつながりが大きな意味を持つ。しかし、教育とボランティアの関係はかなりややこしい。とくに小中高校の教育現場において、「ボランティア」をめぐってはかなりの混乱が見られる。今や日本社会において、「ボランティア」という言葉は、知らない人はいないほどポピュラーなものになったが、実はその理解には相当のばらつきがある。

そのような状況の中、大学という教育機関において、学生のボランティア活動をどのように支援すべきなのか。そして、大学における「ボランティアセンター」はどのような立ち位置で事業を行うべきなのか、本学センターの20年を振り返る中でその一端を探ってみたい。



2020年度ボランティア入門講座ボランティア体験

2 龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターの概要

まず、本学センターの概要を簡単に紹介しておきたい。龍谷大学の歴史は、1639年に西本願寺に設けられた「学寮」から始まっており、2019年に創立380周年を迎えた。仏教(浄土真宗)の精神を建学の精神とし、現在は、9学部1短大、10大学院を持つ総合大学である。京都市内に2キャンパス(大宮キャンパス、深草キャンパス)と滋賀県に1キャンパス(瀬田キャンパス)の計3キャンパスがある。このうち、深草キャンパスと瀬田キャンパスにそれぞれセンターが設置されている。

龍谷大学において「ボランティアセンター」を設置しようとする動きは早く、1997年10月に教員有志による最初の提案がなされた。その後、学内での長期計画などの議論を経て、2001年4月に正式に発足した。

センターの学内における位置付けは学長のもとにある独立横断的組織となっており、意思決定機関としてセンター長が召集するセンター委員会にかなりの権限が付与されている。センター委員会は、ボランティア・NPO活動に何らかの関わりや関心のある教職員で構成されている。

日常のセンター運営は、現在、正副センター長(教員)、事務部長(兼務)、課長と課員(事務職員)、ボランティアコーディネーター4名、アルバイトで担われている。加えて、2センター合わせると約100名の学生スタッフが学生からの相談対応や事業の企画・実施に携わっている。

本学センターの事業としては、①ボランティアコーディネート事業(在学生や学内外の団体からのボランティア希望/依頼に関する相談・調整)、②ボランティア情報の提供、③学内におけるボランティア活動の実践と参加のきっかけ提供、④活動を通じた地域との連携、⑤体験学習プログラム(海外、国内)、⑥ボランティアリーダー育成(入門講座やリーダー養成講座)、⑦教養教育科目「ボランティア・NPO入門」の運営協力、などがある(詳細は第3章で紹介)。

また、2011年度より現在に至るまで継続して東日本大震災復興支援活動を企画・実施するとともに、熊本地震や西日本における豪雨水害などの災害復旧・復興支援活動も行なっている。



2020年度深草でのセンター紹介

3 本学センターの特徴

大学ボランティアセンターは、それぞれの大学によってその設置形態や運営方法は多様である。本学センターの特徴をあげるとすると、大きく次の3点であろう。

1点目は、センターでの活動、あるいはセンターで紹介するボランティア活動は、全て課外活動として位置付けられている点である。すなわち、学生スタッフとしてどれだけ活動しても、授業の単位等には一切関係しないということである。サービスラーニング、最近ではPBL(問題解決型学習/課題解決型学習)との絡みでボランティアセンターの事業が正課科目との連動で展開されることも多い。本学でもそうした学習形態の重要性を認識し各学部で正課教育として様々に展開されているが、センター事業とは切り離している。

かつて、内閣府関係者が本学センターを視察された際に、授業単位に関係しないにもかかわらず、多数の学生スタッフが活発に活動していることに驚いていたが、むしろ、単位などに関係しないからこそ、継続して主体的な活動が展開できているのではないかとと思われる。



2020年度瀬田でのボランティア相談対応

2点目は、その学生スタッフの数と位置付け（運営への参画）についてである。例年、100名近い学生スタッフ（2センター合わせて）が活動している大学ボランティアセンターは、全国的にみてもそう多くはない。自分たちの関心・問題意識に沿って、あるいは地域からのニーズに応じて活動を企画したり、一般学生からのボランティア活動希望の相談に対応するコーディネート活動や広報活動に工夫を凝らし、かつ責任をもって対応している。学生スタッフの所属学部や専門領域、関心は多岐にわたるため、センターで議論し作業を行う中での相互理解や視野の広がりが期待できる。

学生スタッフに対しては、センターの事業を担うだけでなく、運営にも参画する仕組みが作られている。教員（センター長）、職員（事務、コーディネーター）、学生の三者によるセンター会議をほぼ毎月開催している。そこでは学生企画に対する意見交換、同時に教職員側からの提案に対する学生との意見交換も行われる。さらに、教職員で構成される正式な学内組織であるセンター委員会に両センターの学生スタッフ代表がオブザーバー参加しているのは、他大学ではあまり例がなく、公益財団法人大学基準協会による「大学認証評価」においても高い評価を得ているところである。

3点目は、そうした学生スタッフに寄り添い、エンパワメントを行う専門スタッフの存在である。本学センターでは、事務職員とは別に常勤のボランティアコーディネーター（専門職採用）が2キャンパス各2名配置されている。近年、コーディネーターを配置する大学は増えつつあるが、その多くは期限つきであり、学生はもちろんのこと学内の諸組織との連携や地域の諸団体との関係構築の積み重ねに課題を抱えているところが多い。

本学の場合、専門性の高いコーディネーターが継続して勤務していることにより、4年間通して学生のエンパワメントを行うことができる¹。最近では発達障害のある学生や大学になじめない学生などがセンターを拠り所にする例も多く、障がい学生支援室などとも連携しつつ丁寧に関わることで、着実な良い変化を引き出している。

加えて、コーディネーターの存在は学外の地域団体・機関や行政などにより効果的な協働関係を構築する上で欠かせないものとなっている。



2020年度ボラセン会議の様子

4 学生が抱く偏ったボランティアイメージ

センターでは年に数回、学生スタッフ自身の企画による「合宿」が実施されている。10数年前のある合宿で、「学生スタッフとして、センターで何をやっていきたいか?」というテーマでグループワークが行われていた。おそらく楽しそうなイベント案などが上がるのだろうと思われたが、実際の発表を聞いて少々驚いた。複数のグループから「“みんなが思っているボランティアは、本当のボランティアではない”ということを、より多くの学生に伝えたい!」という切実な声が上がったからだ。

詳しく尋ねると、センターに出入りするようになって、自分自身も持っていたボランティア観が大きく変わったという。もっと自由で多様な活動がたくさんあり、ワクワクするものだということを他の学生にも知ってほしいというのだ。

では、多くの学生が抱いているボランティアのイメージとはどのようなものなのだろうか。

先に紹介したように、本学センターでは、深草キャンパスの教養教育科目「ボランティア・NPO入門」（2013年度開始、複数教員によるチェーンレクチャー、受講者約200人）を協働運営している。初回に「ボランティアとは」という講義を行うが、それに対する受講者からのコメントの中には、「ボランティアに自発的という意味があることを知って驚いた」「小中学時代、強制参加の清掃のイベントがあったが、それは“ボランティア清掃”と呼ばれていた」



2007年度龍谷祭でのボランティア啓発展示

「嫌々ゴミ拾いをして、ボランティアだと勘違いしていた」「ボランティアは決められたことをやらされるもので、自分で活動を選べるとは思わなかった」と言った記載が、驚くべきことに毎年3割程度見られる。多くの学生が、ある意味で本来のボランティアとは真逆と言っていいイメージをもっていることがわかる。

小中学校の学習指導要領で初めて「ボランティア活動」という語が登場したのは、平成10年12月告示のものからである。以後、義務教育のなかでボランティア活動が様々な場面で取り上げられるようになったが、その中で、「社会奉仕活動」との混同があり、上記のような学生の感想につながったものと推察できる。

5 大学ボランティアセンターが意識すべきこと

ある権威に対して奉り仕えるという意味を持つ「奉仕」と、ラテン語の“volo (ウオロ)”を語源とし自発性を基本概念とする「ボランティア」とでは、一部重なる部分もあるものの、その持つ意味は大きく異なっている。

身近な地域で、あるいは地球規模で起きている様々な問題(環境破壊、貧困、格差問題、災害、人権侵害など)に気づき、その解決のために自ら行動を起こそうというボランティアな姿勢を持つ市民を育てる、という大学の使命からすれば、一人ひとりがボランティアの意味を正しく認識し、かつ行動変容につながるようなアプローチをすることが、ボランティアセンターとしてまず行わねばならないことだろう。大学によってボランティアセンターの位置付けや事業内容は様々であるが、共通して大切なことは、小中高校でなんとなく植え付けられた“やらされボランティア観”から“人権意識や自治意識に基づく主体的な活動”への方向転換である。

そうした観点から、授業単位と連動した取り組みと、自由なボランティア活動との整理をどのように行うのか、また、センター運営自体への学生の主体的参画のあり方などを検討することが重要ではないかと思われる。本学センターも現在の形になるまで、多くの議論や試行錯誤があった。



2013年度深草児童館での防災劇

6 学生スタッフ経験がもたらすもの

本学センターは20周年を迎えるにあたり、これまで学生スタッフとしてセンターに関わった卒業生にアンケートを実施した。その分析結果については本冊子の第4章で詳細を紹介している。ここでは、そのごく一部を紹介したい。

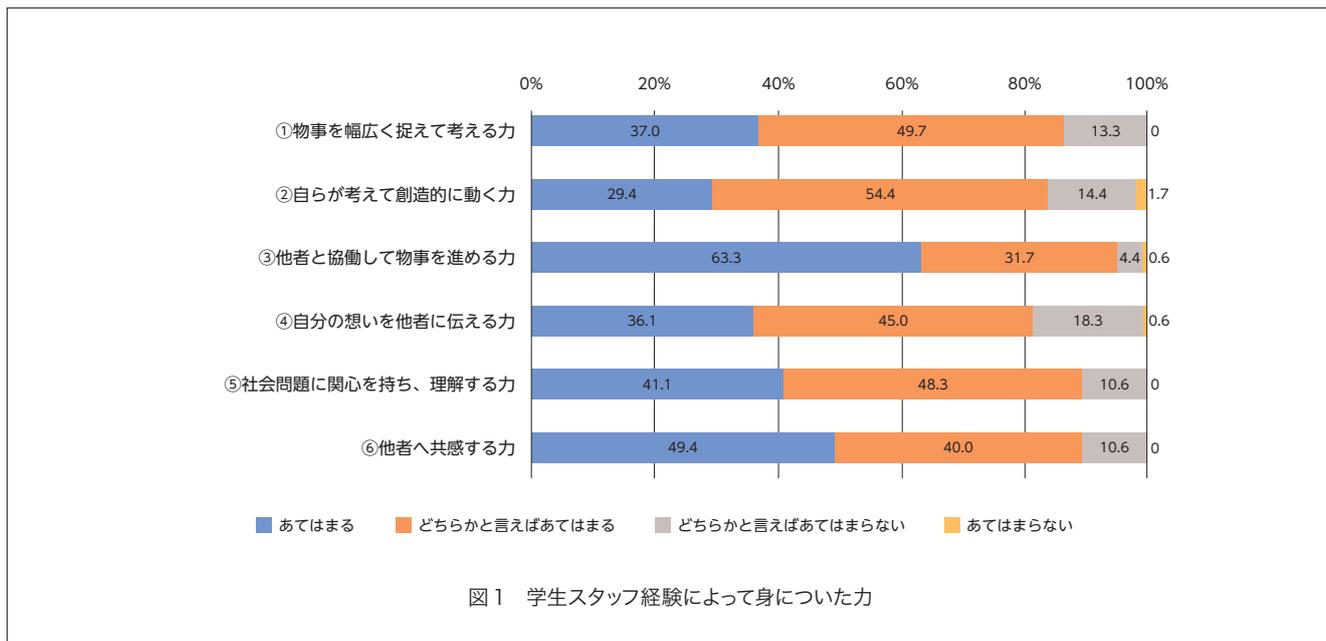
図1は、学生スタッフ経験によって何が身についたかを聞いたものである(複数回答)。最も回答が多かったのは「他者と協働して物事を進める力」で6割以上が回答。次いで多かったのは「他者へ共感する力」であり、さらに「物事を幅広く捉えて考える力」と続く。

もちろん6項目いずれも重要なことであるが、「他者と協働して物事を進める力」をあげた卒業生が多かったことは、センターでの彼らの姿を思い起こさせる。多様な学部(専門領域)、多彩な個性を持つ学生が集まり、かつ多様な年齢・職業の人々とともに一つの企画を実行に移すまでのプロセスで壁にぶつかり悩んだ学生も多かっただろう。しかし、そのプロセスを踏んでこそ、誰も取り残さない共生社会の実現がある。

さらに、アンケートでは、「卒業後のボランティア活動」についても聞いた。その結果、センターの運営に関わった卒業生22~39歳)は、27.4%(31人/113人中)が卒業後もボランティア活動を行っていると回答した。一見低い数字のように見え



2015年度瀬田キャンパスの学生スタッフ



るが、実は、内閣府の調査結果(2019年度)²では、年代別のボランティア経験の有無は、20～29歳10.1%、30歳～39歳11.8%となっている。一般的に、20歳～30歳にかけては仕事や子育てに最も時間が取られる時期と重なることから、環境的にボランティア参加が難しい年代である。そうした状況を考えると、学生スタッフ経験者のボランティア参加率はかなり高い。

まだまだ課題は多いが、本センターの取り組みによって、社会課題に関心を持ち、その解決のためになんらかの行動を行う人材育成につながったとすれば、大変嬉しいことである。今後もさらに、学生の主体的な活動を応援し、人権意識や自治意識を備えた市民の輩出に貢献していきたい。

この20年間、センター運営にご協力ご支援いただいた関係機関・団体の皆さまに深く感謝申し上げます。また学内において支えてくださった教職員の皆さま、そしてともにセンターを創り上げてくれた学生スタッフの皆さまに心からお礼申し上げます。

今後ますます本学センターが建学の精神を具現化する存在として価値ある事業活動を展開していくことができますように、ご支援をお願いいたします。



2019年度学生スタッフオリエンテーション合宿

注

- 1 4人とも、認定NPO法人日本ボランティアコーディネーター協会主催の「ボランティアコーディネーション力検定1級または2級を取得している。※1級は全国で90人のみ。
- 2 内閣府『令和元年度 市民の社会貢献に関する実態調査』令和2年6月

第2章

ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

(注) 所属・役職等は当時のものを示す。

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

●ボランティア・NPO 活動センターの遷移と主な社会情勢

センターの遷移		社会情勢
1995		阪神淡路大震災。
1996		大学就職率過去最低。
1997	1995年の阪神淡路大震災後、学生のボランティア活動を支援する動きが活発化。 教員有志が「龍谷ボランティア・ネットワーク」設立企画書を大学に提出。	ナホトカ号事件(約27万人がボランティアで重油回収)。 COP3(京都市で開催)。
1998		長野オリンピック。 特定非営利活動法人促進法交付。
1999	第4次長期計画で、ボランティアセンター設置の検討を開始。	市民活動と行政の協働が全国の自治体で叫ばれるようになる。
2000		介護保険制度スタート。
▼始動期		
2001	ボランティア・NPO 活動センター設立、 深草キャンパス紫光館1階に事務室を構える。	ボランティア国際年。 9.11 アメリカ同時多発テロ事件の発生。
2002	瀬田キャンパスで 『ボランティア・市民活動相談会』を開催。	イラク情勢の緊迫化。
2003	ボランティアリーダー育成事業開始。 深草キャンパス1号館1階にセンター移転。 瀬田キャンパス青志館2階談話室にセンター開設。	イラク戦争が始まり、自衛隊イラク派遣。 世界各地で爆弾テロ多発。新型肺炎(SARS)が中国などで流行。
2004	災害ボランティアや募金活動に初めて取り組む。	台風23号広い範囲で大雨被害(台風上陸最多の10個)。新潟県中越地震。 インドネシア・スマトラ沖地震などの災害多発。
2005		JR福知山線脱線事故。京都議定書発効。 避難準備情報を新設。世界各地でテロ。パキスタン大地震。
▼成長期		
2006	運営体制を見直し、 教員・職員・学生の3者協働へ。 瀬田のセンターが現在の場所へ移転。	日本人口が減少に転ずる。「格差社会」が課題に。いじめ自殺が各地で続発。 インドネシア・ジャワ島地震。
2007		新潟県中越沖地震。緊急地震速報運用開始。 地球温暖化に国際的関心高まる。



	センターの遷移	社会情勢
2008	ボランティアコーディネーターが両キャンパスとも2名体制に。 ボランティア入門講座がスタート。 ミャンマーと中国の災害募金活動に取り組む。	リーマンショックにより世界的な不況に。日本では年越し派遣村の取り組みがクローズアップ。「ゲリラ豪雨」が流行語に。ミャンマーサイクロン。中国四川省大地震。
2009		民主党政権成立。新型インフルエンザの世界的な感染広がる。
2010	10周年記念事業実施。	普天間基地移設の日米合意。尖閣事件めぐり、中国各地で反日デモ。ハイチ大地震。
▼転換期		
2011	龍谷大学東日本大震災復興支援プロジェクトの事務局となり、以降の復興支援ボランティアやフォーラム運営などを担っていく。	3.11 東日本大震災・原発事故で甚大被害。タイで大洪水。欧州危機深刻化。「アラブの春」で独裁体制崩壊。
2012	深草のセンターが学友会館に移転。	尖閣・竹島で中韓との関係悪化。
2013		アベノミクス始動。「ブラック企業」が流行語になり、働き方改革が進む。フィリピン台風で甚大な被害。
2014	深草和顔館に震災を語り継ぐモニュメントの設置。	御嶽山噴火。広島で土砂災害。「イスラム国」が勢力拡大。ウクライナ危機。エボラ出血熱感染拡大。
2015	ネパール地震募金活動。 福島スタディツアー開始。	安全保障関連法成立。マイナンバー制度のスタート。外国人観光客急増。COP21でパリ協定採択。ネパール地震。
▼近年		
2016	熊本県地震復興支援活動。	熊本地震災害。米大統領広島訪問。障がい者施設で19人殺害。英国がEU離脱決定。
2017	滋賀県スタディツアー開始。	九州北部豪雨。国連が核禁止条約採択。
2018	深草のセンターが7号館に移転。 平成30年7月豪雨災害復興支援活動。	大阪府北部地震。平成30年7月豪雨災害。台風21号。北海道胆振東部地震。
2019		令和に改元。九州南部豪雨や台風5・8・10・15号により、日本列島各地で被害が相次ぐ。
2020	深草のセンターが成就館に移転。	新型コロナウイルスの世界的な感染拡大。令和2年台風10号。令和2年7月豪雨。

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

ボランティア・NPO 活動センターは、ボランティア活動を共生教育のひとつとして位置づけ、思いやりと責任感のある行動的な人間を育成するとともに、営利を目的としないボランティア活動を通じて相互に学び合うサービラーニング（社会参加型教育）を実践し、本学の教育研究の新たな発展に貢献すること、また、国内外の高等教育機関、各種のNPO・NGO、浄土真宗本願寺派、地方公共団体等々との交流を深め、学内外における様々なボランティア活動の振興を図ることを目的としています。

この章では、センターの設立から20年間のあゆみをダイジェストにまとめました。各事業のあゆみは第3章に掲載していますので、そちらもぜひご覧ください。

始動期 (2001年度～2005年度)

【2001年度】 センター長 中村 尚司 (経済学部教授)

4月、ボランティア・NPO 活動センターは関係者の様々な協力により設立されました。最初のセンター事務室は深草キャンパスの紫光館1階に設置され、初代センター長のもと、センター開設事業『ボランティアとは何か』や2002年度からのボランティア人材育成に向けた各種事業（ボランティアコーディネート、学外の中間支援組織との連携、他大学ボランティアセンターの調査、ホームページ（以下、HP）の作成など）を進めることが、センター委員会で決定しました。

また、センター委員の教員による呼びかけで、少人数が学生スタッフとして各自の関心に基づき、地域のNPO・NGOで活動を開始しました。



開設記念パネルディスカッション

【2002年度】 センター長 大林 稔 (経済学部教授)

事務体制も専任事務職員と専門職のボランティアコーディネーター（以下、CD）が嘱託職員として配置され、体制の確立に力を入れました。

瀬田キャンパスでは、筒井のり子（社会学部助教授）副センター長の呼びかけで開催した『ボランティア・市民活動相談会』をきっかけに学生スタッフが集まり始め、滋賀県の市民活動団体へ活動内容や学生ボランティアの受け入れについてヒアリングをおこないました。そして後期からは、青志館（生協）1階の入り口横で週1回ボランティアの紹介活動を開始しています。

同様に深草でも近畿各地のNGO・NPOを訪問し、学生ボランティアの受け入れに関する情報提供などを依頼した他、学友会館（生協）の相談室で週3回ボランティア紹介活動を実施しました。また、ボランティアコーディネートに関する研修や国内合宿など、学生スタッフ向けのプログラムも2002年度から少しずつスタートしています。



『ボランティア・市民活動相談会』

【2003年度】 センター長 石川 両一 (経済学部教授)

両キャンパスとも利便性の高い活動拠点を確保し、徐々に事業内容の拡大・充実を図り始めます。深草キャンパスは1号館1階へ移転、そして瀬田キャンパスでは青志館2階の談話室の一角にセンターが設置されました。これを機に学生スタッフが日常的に寄り集まり、その他の学生も気軽に訪れてボランティアコーディネートをはじめとする各種活動は少しずつ軌道に乗り始めました。活動場所ができたことによって、それぞれのセンターにおいて学生スタッフがシフトを組み毎日実施する体制が可能となったのです。ボランティア企画『みんなでボランティア体験ツアー』や市民活動団体の訪問、写真展、メールマガジンにHPなど、学生スタッフの活動は次第に多彩になりました。また、学生スタッフの研修も『ボランティアリーダー育成事業』と位置付けて、海外スタディツアーを含めた本格的なプログラムの下に実施されるようになりました。

その他にも、学内外の機関と各種セミナーやワークショップを共催したり、瀬田センター設立記念シンポジウムとして、『小さなネパール NGOの大きな挑戦～SOPUの試み～』『地域福祉におけるボランティア・NPOの役割』も開催しています。



深草キャンパスのセンター（1号館1階）

【2004年度】センター長 石川 両一（経済学部教授）

専任事務職員として課長が、深草・瀬田キャンパスに専門職の嘱託職員 CD 各1名が新たに採用され、年を重ねるごとに事務体制も徐々に充実していきました。

一方で、災害が多発した年でもあり、「現地に行って支援活動をしたい」という学生たちが多くセンターへ来室。その熱い想いを受け止めつつ、彼らの情熱と行動力を被災者への意味のある支援として活かすため物資を被災地へ送付したり、現地の動向を見極めながら募金活動や被災地でのボランティア活動を行いました。特に被災地へ赴いた学生らは、緊急支援・生活支援・自立支援など災害ボランティア特有の難しさを感じ、復興支援活動が大きな広がりを持ち始める中で、改めてその在り方が問われた年となりました。

また、瀬田キャンパスの取り組みで長く続いている『大津祭ボランティア』に関わった最初の年であり、本学学生が地域の方とともに祭りを盛り上げました。



台風 23 号ボランティア活動

【2005年度】センター長 石川 両一（経済学部教授）

両キャンパスに事務系嘱託職員各1名が新たに配置されるとともに、数年継続したいくつかの学生スタッフ企画が始まるなど、事業内容の充実が伺える年となりました。

深草キャンパスでは過年度から続く『みんなでボランティア体験ツアー』において、地域イベントや自主企画で本学学生にボランティア活動の機会を提供しました。中でも2005年度に始まった学生スタッフによるボランティア企画『南宇治中学校部活支援ボランティア』は、以降2008年度まで毎年2回ずつ継続して実施しています。野宿者支援に取り組む『ビッグイシュー講演会』もこの年に始まり、同じく2008年度まで毎年継続しました。

また、瀬田キャンパスでは地域イベントでの活動として、大津市にある丸屋町商店街の『丸屋町夜市』への協力が始まった年でもあり、2014年度まで継続しました。



雑誌『Big Issue』路上販売協力の様子

成長期（2006年度～2010年度）

【2006年度】センター長 鍋島 直樹（法学部教授）

4月にセンター長、専任事務職員、CDが大幅に入れ替わり、運営体制の見直しを行いました。全学生スタッフ、正副センター長、CDを含めた事務局が構成員となるボランティア・NPO活動センター会議（通称ボラセン会議）がセンター委員会のもとに設置され、学生・教員・職員の3者が意見を出し合いながら事業を作り上げていくことになりました。

具体的な事業内容については、講座・国内研修・海外研修といった『ボランティアリーダー育成事業』をそれまで学生スタッフの育成目的で実施していましたが、その中の海外研修を独立させて『海外体験学習プログラム』と位置付け、全学的に開放しました。対象とするプログラムも学外団体のスタディツアーの中からセンターが推奨するものを取り入れ、2007年度以降の同プログラムの基盤となる年であったと言えるでしょう。その他にも、他大学との共催事業の開催、学生スタッフが各種イベントのボランティアとして協力するなど、単発事業にとどまらない進展が見られた年になりました。

また、学生スタッフの班活動が進み、深草は各自の興味・関心に沿って環境、国際、福祉などのボランティアの分野ごとに編成、一方で瀬田はセンター運営のために広報・掲示板、団体訪問、チラシ整理などの編成にするなど、各キャンパス独自で工夫して取り組んでいきました。

瀬田キャンパスにおいては現在の建物に移転した年あたり、独立した建物という両キャンパス初めての環境と、内部も職員スペースと学生スタッフの活動スペースが一つの空間になった新たな活動拠点で再スタートしています。



ボラセン会議の様子



瀬田キャンパスのセンター

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

【2007年度】 センター長 鍋島 直樹 (法学部教授)

7月に新潟県中越沖地震が発生。被災地域に実家のある学生が在籍していることや、実家が全壊した卒業生などもいたことから、3年ぶりに緊急災害支援に取り組みました。センターの学生スタッフを中心となって学内の募金活動で集めた義捐金を柏崎市に寄付した他にも、浄土真宗本願寺派の呼びかけにより、学生スタッフを含む本学学生が復旧活動に関わりました。

一方、学生スタッフ企画では、さまざまな国際協力団体の活動紹介と参加者がワークショップで学ぶ『国際協力コンソーシアム』、2006年度の海外体験学習プログラムで訪れた地域の関係者による講演会、NGO相談員によるスタディツアーやワークキャンプの比較検討ポイントについて学ぶ『海外ボランティアセミナー』、『世界がもし100人の村だったらワークショップ』など、国際協力に関わるテーマの企画が数多く実施されました。



新潟中越沖地震募金活動



国際協力コンソーシアム

【2008年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

各キャンパスの職員体制が、それまでの嘱託職員 CD1 名+事務系嘱託職員 1 名から嘱託職員 CD2 名ずつとなり、キャンパス間で連携を密に図りながら共通して実施する事業も 2008 年度から進んでいったことが改めて確認できます。

その一つとして、学生スタッフの育成中心だったボランティアリーダー育成事業の講座を、全学向けの入門コース『ボランティア入門講座』と学生スタッフのスキルアップを目指した応用コース『ボランティアリーダー養成講座』に分けて、両キャンパスで実施しました。とりわけ前者では新学生スタッフを含めた本学学生全体を対象にした結果、初の試みでありながら参加者は 60 名にものびりました。この背景には、より全学的に開かれたセンターを目指して事業計画や運営体制を 2007 年度末から見直してきたことが、大きく作用していると考えられます。

さらに、2008 年度はミャンマーサイクロンや中国四川省大地震などが発生した年でもあり、被災地出身の留学生の声を受けて学内募金活動を両キャンパスで行うなど、国際的な災害支援に対しても取り組んでいます。

一方で「本学学生へのボランティア促進」という点において、具体的な活動の入り口にも位置付けられる学生スタッフのボランティア企画については、彼ら自身で参加人数の殆どを埋めているものが多く、この改善が次年度へ向けての課題となりました。



ボランティア入門講座のボランティア体験



ボランティアリーダー養成講座

【2009年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

従来から課題となっていた「学内外におけるセンターの認知度向上」に向けて、具体的な取り組みが始まったのが 2009 年度です。学内の教職員向けに『ボランティア・NPO 活動センター通信』を発行した他、学生スタッフも学生向けにボランティア情報発信を視野に入れた広報誌『ボラゴン』(深草)・『Volunteer News』(瀬田)を発行するなど、学内での認知度向上に努めました。それに伴い、学生スタッフのボランティア企画も積極的に学内募集が行われるようになっていきます。

また、学生スタッフの育成で重要な位置づけとなる『オリエンテーション合宿』を学生スタッフだけで企画していましたが、CD も関わる実行委員形式で始まっ



学生スタッフ制作の広報誌

た最初の年であり、以降 2019 年度までこの形で毎年続いています。一方で『ボランティアリーダー養成講座』については、ボランティア系サークル所属の学生にも参考となる内容であることから、全学対象で実施するようになりました。

そして地域団体との連携では、深草キャンパスにおいて NPO 法人 JIPPO との協働で 2008 年度末に始めた『伏見区野宿者支援プロジェクト』を本格的に継続実施。全学的に参加者募集を行い、東高瀬川、西高瀬川、山科川の 3 河川で暮らす野宿者への物資支援や聞き取りなどを行いました。瀬田キャンパスでは学内でのボランティア促進企画『Let's ボランティア』が始まった年で、学生スタッフ主体で 2019 年度まで毎年実施しています。



オリエンテーション合宿

【2010 年度】 センター長 古川 秀夫 (国際文化学部教授)

センターにとって大きな節目になる 10 年目を迎え、通常の活動に加えて 3 つの 10 周年記念事業を実施しました。まず 12 月に『10 周年記念講演会・祝賀会』、2 月に日本ボランティアコーディネーター協会との共催で『全国ボランティアコーディネーター研究集会』を実施、そして 10 周年記念誌の刊行です。特に 2 行事の実施・運営にあたっては、学生スタッフが会場周辺で活動展示を行ったり、司会進行をしたり、交流プログラムを運営したりと彼らの活躍が光りました。

また、毎年実施している各種自主事業においても新たな展開として、学生の長期休暇に実施している『海外体験学習プログラム』に加えて『国内ボランティア体験プログラム』(後に『国内体験学習プログラム』と改名)を本学教員の引率下で実施しました。そして 10 周年事業が全て終了した年度末、3 月 11 日に東日本大震災が発生し、卒業式での募金活動を皮切りに一連の復興支援活動へ取り組んでいくことになります。



10 周年事業の展示準備



東日本大震災募金活動 (卒業式)

転換期 (2011 年度～ 2015 年度)

【2011 年度】 センター長 松島 泰勝 (経済学部教授)

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の復興支援活動に対して大学として取り組むために「学生ボランティア等の被災者・被災地支援検討プロジェクトチーム (以下、PJ)」が組織され、その事務局をセンターが担うことになりました。

2010 年度末の卒業式などから引き続いて 2011 年度入学式での募金活動を皮切りに、復興支援活動のガイダンスや現地で活動した教員による報告会の実施、被災地を支援するために福島や雄勝の物産品を学内で販売、学生を募集して京都からバスで現地に赴く復興支援ボランティアを 5 回、そして復興支援フォーラムや一周忌法要のパネル展なども開催しました。これらは全て PJ で協議をして実施されています。(『東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書』参照)

これら一連のプロジェクトは、職員が『ボランティア入門講座』『海外体験学習プログラム』などの通常事業も行いながら取り組み、学生スタッフも例年の活動や企画を継続しつつ前述の各種復興支援活動に協力しました。そして龍谷祭でも震災に関する啓発展示を実施するなど、東日本大震災の被災地・被災者に対して「何かしたい」という想いで取り組んだことが伺える年となりました。

※ PJ は、2012 年度、2016 年度に名称変更を行ったが活動は継続。



福島物産展



東日本大震災復興支援ボランティア活動

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

【2012年度】 センター長 松島 泰勝 (経済学部教授)

2011年度から引き続いてPJのもと、『被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金』として学内教職員から支援金を募集したり、ボランティアバスでの復興支援ボランティアを2回実施した他、瀬田キャンパスでの夕照コンサートにおいて雄勝の物産品販売や、深草キャンパスで復興支援フォーラムなどを行いました。そして8月には京都府南部周辺地域の豪雨災害が発生したため、京都府災害ボランティアセンターの災害ボランティア募集を行い、本学学生が宇治市内で活動しました。

さらに、2010年度に始めたものの2011年度は復興支援のため実施できなかった『国内体験学習プログラム』も再開し、夏季と春季の2回実施しています。

学生スタッフのボランティア企画については、瀬田キャンパスでは「福祉」を広くとらえたボランティア企画で活動者を学内募集し、一緒に体験する取り組みを実施しています。深草キャンパスでは地域の各種イベントに学生スタッフがボランティアとして積極的に参加した他、秋には深草のセンターが学友会館に移転し、新しい場所で再スタートを切ることになりました。



宇治豪雨災害ボランティア



福祉企画 ProjectW

【2013年度】 センター長 筒井 のり子 (社会学部教授)

深草では2012年度の移転に伴ってその後の来室者数が激減したことから、学生スタッフが丸となって広報強化に努めたことにより、4月の来室者が例年の2倍というスタートを切ることができました。2012年度末から2013年度前半にかけて2名のCDが5年の任期満了に伴い交代するなどの体制変化に加え、新たにセンター長の担当科目として、多彩な分野の教員からチェーンレクチャー形式で学べる教養教育科目特別講義『ボランティア・NPO入門』が、深草キャンパスの前期授業で始まっています。

また、夏期休暇中に発生した台風18号によって大学の地元でも災害が起こったことから、センターでは被害状況やボランティアニーズの情報収集、地域の災害ボランティアセンターと連携したボランティア募集などに取り組んでいます。

一方で東日本大震災復興支援については、ボランティアバスでの活動内容が地域行事や住民の交流企画の支援へと変化していった年でもあります。本年から『雄勝灯籠流し』への協力が始まり、参加学生が地元の方や支援のプロから話を聴く機会を設けるプログラムを組み立てました。復興支援フォーラムも3年連続で開催しています。



台風18号ボランティア活動



雄勝灯籠流し

【2014年度】 センター長 筒井 のり子 (社会学部教授)

学生スタッフの発案により、センターの取り組みやボランティア募集のためTwitterとFacebookでの情報発信を始め、本学学生以外にも広範囲の人々にセンターの取り組みを発信することが可能となりました。そして日本ボランティアコーディネーター協会との共催で、『ボランティアコーディネーション力3級検定』がスタート。以降、学生スタッフを中心に毎年関心のある龍大生がチャレンジしています。

平成26年8月豪雨災害の際は、社会福祉協議会を中心に他団体や他大学等と連絡をとったり福知山市へ視察に向かうなど、被災地域でのボランティア受入状況の情報収集とボランティア希望学生への情報提供を行っています。

また、東日本大震災復興支援関連では例年のボランティアバスでの活動の他、



Oh!ガッツ!雄勝♪

活動学生有志による企画『Oh!ガッツ!雄勝♪』を開催したり、びわこ文化公園で開催された「防災・減災そなえパークの日」にブース出展を行いました。また、過去に参加した学生が活動中に洗浄した雄勝の硯石スレートが『震災を語り継ぐモニュメント』として深草キャンパス和顔館に設置されました。

さらには、深草の学生スタッフ企画として続く深草児童館でのボランティア『サマーフェスティバル』が始まった年であり、瀬田では継続企画の『Let's ボランティア』の実施回数を増やしたり、その他にも、国際社会への視野を広げ、貧困問題に対して学生ができることを考える貿易ゲームのワークショップを実施するなど、学内のボランティア促進に精力的に取り組んだことが伺えます。



ワークで学ぶ貧困問題
～アナ(た)と世界の状況 don't let it go!～

【2015年度】センター長 伊達 浩憲(経済学部教授)

ネパール地震が発生。ネパール出身の本学留学生や有志の学生による募金活動に対して、センターが教職員向けの募金呼びかけの事務局となり、学内他部署などの協力を得ながら取り組みました。

5年目を迎えた東日本大震災復興支援関連については、ボランティアバス2回に加え、2年ぶりにフォーラムを行いました。さらに、国内体験学習プログラムで『福島スタディツアー』(社会学部筒井教授による企画・引率)を開始し、以降、毎年学生が現地訪問やオンラインを通じて復興に向けてのさまざまな取り組みを学んでいます。また、夏期休暇中の瀬田キャンパス恒例行事『夕照コンサート』において、学生スタッフが復興支援活動の展示と模擬店に取り組み、収益はPJへ寄付しています。

その他の学生スタッフの企画においては、瀬田キャンパスで『こどものまちおおつ』や『子どもミュージアム商店街 in 石山商店街』など、子ども向けの地域イベントに参加するボランティア企画を学生スタッフが実施。学内でボランティアを募集して多くの龍大生が参加しました。また、深草キャンパスでも2014年度に始めたものを、改善点などを検証しながらより充実した内容で実施しています。



ネパール地震募金活動(大宮)



福島スタディツアー

近年(2016年度～2019年度)

【2016年度】センター長 松永 敬子(経営学部教授)

2016年度が始まって間もなく熊本地震が発生。熊本県出身の学生や学生スタッフが中心となって『熊本大地震に対する募金活動学生有志の会』を結成し、センターが学内の支援窓口として協力しました。また、学内で『熊本地震ボランティアガイド』を実施した際は、両キャンパス合わせて約100名もの参加者がありました。これらを踏まえ、例年実施していた東日本大震災復興支援ボランティアを1回にし、熊本県阿蘇市で復興支援活動を2回実施することになりました。各回30名の学生が参加し、その後の活動報告会にも多くの参加者があったことは、災害ボランティアに対する本学学生の関心の高さが伺えます。

学生スタッフのボランティア企画においては、深草で動物愛護に関する写真展『小さな命のモノガタリ知らない表情がここにある』を学内で開催。瀬田では2015年度から引き続いて大津のまちづくりイベントに参加したり、障がい者スポーツへ参加する『Enjoy! スポーツボランティア』、ボランティア体験とワークショップを組み合わせた『笑顔の向こう側～子どもの貧困×ボランティア～』などを実施しています。



熊本地震復興支援活動



Enjoy!スポーツボランティア

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

【2017年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

『国内体験学習プログラム』においては、2015年度から始まった福島スタディツアーに加えて、CDによる企画・引率のスタディツアーが始まり、2017年度と2018年度は滋賀県高島市でのプログラムを実施しました。

また、学生スタッフの活動では継続企画の他に、深草ではセンターの認知度向上や利用方法を知ってもらい、ボランティア促進につなげる『アタックボラセン』を、それまでの日常活動から企画として全員で取り組んだり、障がいの有無と共生について考えるワークショップ『生きるぼくら～ボランティアから共生を見つめる～』を実施。瀬田では学生部から譲り受けた忘れ物傘を突然の雨の際に貸出し、センターの広報に繋げる学生スタッフ企画『リユース傘貸出しプロジェクト』を開始したり、ボランティアについての意識調査をキャンパス内で実施したりしました。そして年度末には、深草のセンターが7号館に移転しています。



アタックボラセン

【2018年度】 センター長 阪口 春彦 (短期大学部教授)

6月に発生した大阪北部地震では、発災直後から被災状況やボランティアに関する情報収集に取り組み、ボランティア活動を希望する学生・教職員に対し、活動に関する情報提供と活動の際に必要なグッズの貸し出しを実施しました。また、翌月に発生した平成30年7月豪雨においては、前述の取り組みの他、東日本大震災や熊本地震と同様のボランティアバスを8月に運行。岡山県倉敷市真備町で、15名の学生と4名の教職員が復興支援活動を行いました。その後も台風21号や北海道胆振東部地震など、多くの災害が起こった年でした。

学生スタッフの活動では、継続企画の他に、東日本大震災復興支援ボランティアに参加した深草学生スタッフによるワークショップ『私たちからあなたに伝えたい3.11～あの震災を過去で終わらせない～』を実施したり、瀬田では『子ども食堂を知ろう!～大学生だからできること～』などの学内啓発企画や収集ボランティアの企画を行っています。



平成30年7月豪雨真備町復興支援活動



私たちからあなたに伝えたい3.11

【2019年度】 センター長 筒井 のり子 (社会学部教授)

この年も台風や豪雨による災害に見舞われました。センター事務局では例年の東日本大震災復興支援活動の他、京都市災害ボランティアセンターのボランティアバスの情報提供や、復興支援に赴く学生に長靴やゴーグルなどを貸し出しました。学生スタッフは龍谷祭の展示で「令和元年台風19号災害」の募金箱を設置するとともに、模擬店で出た利益の一部を合わせて中央共同募金会へ寄付しています。

一方、学生スタッフによるボランティア企画では、先輩から引き継いでいる企画は安定して実施しているものの、新たなものに取り組むことが見られない年となった点が課題でした。

年が明けてからは新型コロナウイルスが世界的に感染拡大し、センター事業にもいくつか影響が出ています。3月に実施予定だった『海外体験学習プログラム』のアメリカとインドのツアーは中止となった他、学生スタッフの活動においても、ボランティア企画の『防災・減災そなえパークへの出展』はイベント自体が中止となったり、『春合宿』も中止となりました。

そして、卒業式と新年度の入学式や新歓活動も中止が決定となった中、深草のセンターは文化系サークル活動等の新たな拠点である『成就館』1Fに移転。その直後、大学の決定により「課外活動の全面中止」および「原則学生の入構禁止」となったキャンパスで、新たなスタートを切ることになります。



令和元年台風19号災害募金を中央共同募金会へ寄付



深草キャンパスのセンター (成就館 1F)

【第1学期(前期)】

本学危機対策本部で新型コロナウイルス感染拡大防止にかかるさまざまな協議がなされ、2020年度第1学期の全授業をオンラインで実施することが決定。大学の行動指針を「レベル4」として、教職員においても感染拡大防止の観点から必要に応じて在宅勤務が導入されるなど、急速にオンライン化が進んでいくことになります。

学生スタッフとのミーティングもオンラインで進めながら、センターとして「今できること」を検討し、まずは広報ツールを使った情報発信、そしてオンラインでできることを模索していきました。リモートツールの操作や進行、意見交換の手法など、対面活動では考える必要のなかったことも学生スタッフと共に手探りで進めていく中で、参加学生の「誰かと話したかった」「大学生らしいことをしたい」などの声を拾うことができ、具体的な事業に繋がっていきました。

大学の指針が「レベル3」「レベル2」と移行してからも殆どの学生は入構禁止で、課外活動についても一定の制限がかかった状態が続きます。そんな中、7月には課員として専任職員1名が配属され、他部署との調整や連携がよりスムーズに行える体制になりました。

【夏期休暇中】

深草では第1学期定期試験の終了に伴い学生スタッフが少しずつ入構し始め、20周年事業での現役学生スタッフ企画のパートや後期の対面ガイダンスなど、学生スタッフ活動全般について考え始めます。瀬田でもオンラインで定期的に話し合われていくようになり、第2学期に向けてのウォーミングアップが進んでいきました。センター事業としては、オンラインの講座を3本実施。第1学期から引き続いてYoutubeを活用したオンデマンド視聴のための動画化がさらに進みます。

一方で、第2学期から対面授業が一部再開するという大学の決定を受け、学生入構に向けてセンターでも入退室記録や検温の徹底を制度化したり、対面対応のために大学から支給されたアクリル板を設置したりしました。学生スタッフも徐々に出入りして利用者を迎え入れる準備の他、ミーティングもオンラインあるいはハイブリッドで実施するなど、感染防止対策を講じて活動しました。

【第2学期(後期)】

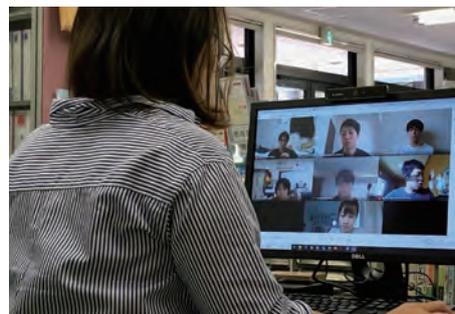
一部の授業が対面で始まったことで、両キャンパスとも少しずつキャンパスに賑わいが戻ってきました。センターも来室者対応が始まり、新歓ガイダンスやボランティア体験のため学生が出入りし始めます。新スタッフも一定数集まり、11月初旬に全てのボランティア体験が無事終了しました。

その後は、瀬田の学生スタッフを中心に、3.11をゴールにTwitterで情報発信していく『みんなの防災意識高め隊』や、2020年度の実施が見送られた大津祭について2021年度参加してもらうための『大津祭展示』など、学生スタッフ企画も形を変えながら徐々に動き出します。さらに、オンライン開催する2月の周年事業に向けて、職員も学生スタッフもその準備に取り掛かり、ようやく例年のような雰囲気を感じられるようになりました。

2019年度に新たな取り組みが見られなかった学生スタッフによるボランティア企画についても、深草の学生スタッフの個人的なボランティア活動で、今までにない形にチャレンジしています。



Twitterでの情報発信企画



オンライン新歓ガイダンス



入門講座Iでのボランティア体験動画



開室準備の様子



防護服作りの様子

第2章 ボランティア・NPO 活動センターの設立から現在に至るまで

【春期休暇中】

2021年2月6日に『東日本大震災復興支援フォーラム 発災から10年 あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする』を、続いて2月11日には『ボランティア・NPO 活動センター 20周年記念事業 ボランティアで未来を拓く』をオンライン（Zoom）で開催し、両イベントともたくさんの方に視聴いただきました。学生スタッフと教職員が一丸となって準備した数か月間の取り組みに対し、アンケートで多くの方から満足度の高い感想が寄せられました。

併せて、『龍谷大学東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（2011年～2020年）』と本誌『龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター 20周年記念誌 ボランティアで未来を拓く』の2種類の冊子も発行しました。



復興支援フォーラムに登壇した学生と入澤学長、筒井センター長



20周年記念事業交流プログラム運営の学生と参加者



20周年記念事業 現役学生スタッフ企画メンバーと司会進行役の学生たち

東日本大震災復興支援フォーラム 発災から10年
あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする

日時：2021年2月6日（土）13:00～15:45 ※オンライン（Zoom）にて開催

第1部 「東日本大震災をふりかえり」
これまでの龍谷大学の取り組み報告
— 活動参加者からの報告 —

第2部 基調講演 佐藤 敏郎 氏
「3.11を学びに変える」

第3部 「これからの災害とどう向き合うのか」
長谷部 浩 氏（神戸市立東灘区立総合支援センター 地域支援課 課長）
筒井 のり子 氏（龍谷大学ボランティア・NPO活動センター 長）

定 員：200名 無料
申込：公式HPからお申込みください。
HP: www.ryukoku.ac.jp/npol
締め切り：2月4日（木）
その他、不明な点は、下記までお問い合わせください。
申込・問い合わせ：龍谷大学ボランティア・NPO活動センター
TEL: 077-664-7252 FAX: 077-664-7251
MAIL: ryunos@ryukoku.ac.jp

東日本大震災復興支援フォーラムチラシ

ボランティア・NPO活動センター 20周年記念事業
ボランティアで未来を拓く

日時：2021年2月11日（木・祝日）10:00～15:00 ※オンライン（Zoom）にて開催

午前の部 10:00～12:00
プログラムI 「なぜ、龍大ボラセンは20年続いたのか？」
これまでの取組の振り返り報告
プログラムII 「龍大ボラセンは時を生み出したのか？」
学生スタッフ経験者へのアンケートから読み解きます
— 交流プログラム12:00～13:00 —

午後の部 13:00～15:00
プログラムIII 「つながる未来へのトビ」 あくろ未来へのプレゼン！
現役学生スタッフによる企画
プログラムIV 対談
安田 菜津紀 氏（フォトジャーナリスト）× 入澤 兼 氏（龍谷大学学長）
※対談内容は事前を撮影していただきますので、チェックしてください。

申込：公式HPからお申込みください。
HP: www.ryukoku.ac.jp/npol/
定 員：200名 無料
締め切り：2月9日（火）
その他、不明な点は、下記までお問い合わせください。
申込・問い合わせ：龍谷大学ボランティア・NPO活動センター
TEL: 077-664-7252 FAX: 077-664-7251
MAIL: ryunos@ryukoku.ac.jp

20周年記念事業チラシ

大学によっては2020年度を通して活動に制限がかかっているところもあり、感染対策を講じながらも学生に活動の場が与えられている環境に感謝すること、そして事業についてはできない理由よりも「どうやったらできるのか」と探り工夫していくことが肝要であると、まさに実感させられた1年となりました。

今後も社会情勢によっては再度活動制限がかかる可能性もありますが、どんな状況になっても前向きに「今できること」に取り組んでいきたいと考えています。

ボランティア・NPO 活動センターは、多くの方々を支えられて設立20年を迎えることができました。これからも社会のさまざまな課題と向き合いながら、学生と共に考え、歩んでまいります。

【2020年度の取り組み 一覧】

取組名称	内 容	実施時期	参加数等
ボラセンついーと大作戦～ボラセンスタッフ's stay home life～	学生スタッフとCDが、ボランティアについてのエトセトラや学生スタッフ作のさまざまな広報動画を発信。また、学生スタッフのアイデアでTwitter質問箱も設置し、「何か始めたい」と感じている新入生などが気軽に質問できるシステムも構築。	4/1～3/17 ※以降も継続	485 ツイート 発信
オンライン新歓ガイダンス (Zoom)	学生スタッフの提案で、例年であれば対面で行っていた新歓ガイダンスをオンラインで実施。	深草・瀬田合同: 6/17～19まで計5回	14名参加
		瀬田: 7/9～14まで計4回	10名参加
ボランティア入門講座 プレ企画 (Zoom)	センター事業の紹介をしつつ、実際の講座申込に繋げることを目指して実施。学生スタッフの協力のもと、センター事業に参加した体験談を動画化してパワーポイント内容に組み込むなど、視聴者が飽きないような工夫を凝らす。	7/14～22まで計4回	61名参加
ボランティア入門講座	講座Ⅰ (Zoom) : CDがボランティアの基礎的な事柄をレクチャー。プレ企画に引き続き、学生スタッフの協力でボランティア体験談動画を入れる。	8/5・6の計2回 +オンデマンド配信	98名参加
	講座Ⅱ (Zoom) : 実際に市民活動の現場で関わっておられる方を講師に事例などをお話いただく。	8/24 +オンデマンド配信	
	ボランティア体験: 7つの活動先 (オンライン活動やセンター内の活動を含む) に分かれて実施。	10/24～11/7の間に 計8回	48名参加
サークル活動・ボランティア活動情報交換会 (Zoom)	本学サークルと当センターそれぞれの活動内容の情報交換を通じて、学内のサークル・同好会等の活動を支援したり、ボランティア活動への参加促進につなげる。	9/2 (各キャンパス) 11/19 (合同) 1/13 (合同)	のべ 7サークル 参加
オンライン雑談会 (Zoom)	深草の学生スタッフ新歓活動の一環として実施。	9/8	3名参加
ボランティアリーダー 養成講座 (Zoom)	『ピンチをチャンスに! 柔軟な発想を生み出すスキルを学ぶ』をテーマに、ワークショップ形式で実施。 講師: 九州大学大学院統合新領域学府客員准教授 加留部貴行氏	9/14	32名受講
ボランティアコーディネーションカ3級検定	例年、本学学生以外的一般枠申し込みも受け付けていたが、本学学生に限って実施。密を避けるために広めの教室でアクリル板の設置や換気など、感染防止対策を講じて開催。	12/19	28名受験
龍谷大学東日本大震災復興支援フォーラム 発災から10年 (Zoom)	『あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする』をテーマに、本学のこれまでの取り組みや活動参加者からの報告、語り部活動や災害支援に携わる方からのお話、学生が作成した動画などで構成。	2/6	申込数 269名/ 最大視聴者数 205名/ 見逃し配信 248回再生
ボランティア・NPO活動 センター20周年記念 事業 (Zoom)	『ボランティアで未来を拓く』をテーマに、ボランティア・NPO活動センターの20年の取り組み報告や学生スタッフ経験者へのアンケート分析、現役学生スタッフによる企画、ボランティアについての学長対談などで構成。	2/11	申込数 290 名/最大視聴 者数 181名/ 見逃し配信 145回再生
近江八幡の左義長祭 ～コロナ禍において伝統文 化の継承について考える～	新型コロナウイルス感染症が地域に及ぼした影響や、それを受けての取組みなどに焦点を当て、持続可能なまちづくりを考えることを目的とし、日帰りにて実施。事後学習はオンラインでおこなった。	現地訪問: 3/3 事後学習: 3/12 (Zoom)	10名参加
つながる福島・ ワークショップ	従来実施してきた福島を訪問して学ぶ代わりに、学内で過去の福島スタディツアーを振り返ったり、訪問先の1つとオンラインでつないでお話を伺ったりした後、改めて感じたことなどを意見交換。	3/5	14名参加
オンライン 海外スタディツアー (Zoom)	今まで、当センターで実施してきた海外体験学習プログラム学外企画で学生を受け入れていただいていたNGO団体の協力のもと、その活動地であるフィリピン、タイからの中継を交えてオンライン (Zoom) で2日間実施。	フィリピン: 3/9 タイ: 3/15	3/9 30名 参加 3/15 25名 参加

※その他、学生スタッフ企画においても、ボランティア啓発は情報発信を中心に、自分たちの組織運営はオンラインワークにするなど、形を変えて取り組んだ。

第3章

主なセンター事業のあゆみ

ボランティア活動を希望する学生へ情報提供等を行い、地域からはボランティア募集の相談に応じるなど、この両者をつなぐこと（ボランティアコーディネート）がセンター根幹の役割です。そのために、様々な地域団体のボランティア情報やイベント・講座などのチラシを見やすく配架したり、センターの広報ツールを活用して情報発信を行うことにも取り組んでいます。これら日常的な活動も、さまざまな関係者の努力や試行錯誤があって現在の形になりました。そのあゆみと関わった卒業生スタッフの声をご紹介します。

2002

両キャンパスとも学生スタッフが地域団体を訪問し、活動内容やボランティア募集状況などをヒヤリング。それらの情報をもとに、学生が集まる学内スペースでボランティア紹介を開始。

2003

学生スタッフがシフトを組み、センター内でボランティア相談対応を受ける環境が整う。
センターのホームページ（以下、HP）開設とボランティア情報などを掲載したメールマガジンの配信を開始。メルマガ・HP担当の学生スタッフが内容作成、更新、配信などを行う。

2004
2005

2006

HPリニューアルに伴い『学生スタッフのページ』を新たに設け、ホームページ班が更新を担う。その他、ボランティアコーディネート班や、チラシ班など学生スタッフが運営のための班に分かれての活動が本格化する。

2007

2008

学生スタッフの提案により、ボランティア募集团体の活動内容を把握し協力・連携の体制を整備する目的で、団体登録制度を開始。

2009

学内の認知度向上を目指し、深草学生スタッフ広報誌『ボラゴン』、瀬田学生スタッフ広報誌『Volunteer News』、センター事務局が『ボランティア・NPO 活動センター通信』をそれぞれ発行開始。

2010

HPリニューアルに伴い、事務局がページ全体の運用・更新を担う。

2011
2012
2013

2014

学生スタッフの提案により、SNS(Twitter、facebook)を開始。運用・更新は事務局、発信内容は学生スタッフとCDが協働して作成。

2015

2016

2017

2018



フェイスブック400いいね達成の時

2019

大学のブランディングに合わせてHPをリニューアル。年度末をもってメールマガジンを終了し、SNSとHPを連携させた情報発信に力点を置く。



ボランティア相談対応の様子（瀬田）



チラシスタンドを見やすく整理（深草）



広報誌配布の様子（瀬田）



情報提供について打ち合わせ（深草）



現行のホームページ

● 地域団体訪問とボランティア情報の収集

■ 2004 年度社会学部卒業 小川 友香里 (旧姓: 小林)

設立当初に集まった学生スタッフは、それまでに各自がボランティアを経験しており、自分で「ボランティアをする」から、学生に「ボランティア情報を広める・企画する」という思いを持っていました。そこで、大学でのボランティア・NPO活動センターとして何をすればよいか、それぞれが考えを出し合いました。

まず地域で活動されている団体へ訪問し、活動内容や学生ボランティア受け入れ等について調査したり、学内においてはアンケートを実施したりしました。それにより、学生受け入れ体制がない団体もあることや、学生が求めるボランティアとは違うなど、情報提供において考えるべき課題も見つかりました。

その後、訪問で得た情報や先生方からの情報をもとに、手探りの中ではありましたが青志館1階にて学生への情報提供を始めていくことに繋がりました。



2004 年の団体訪問の様子

● ボランティアコーディネート研修

■ 2011 年度法学部卒業 内田 真梨 (旧姓: 竹本)

学生スタッフには、センターにボランティアを探しに訪れた学生の想いを受けとめながら、学生とボランティア活動を繋ぐ重要な役割があります。これには知識や経験が必要な技術であることから、外部講師をお招きして、レクチャーと模擬コーディネート形式による研修を2010年度に行いました。

研修を通じて、相手の意向やニーズを引き出すための聞き方、言葉だけではないボディランゲージや表情など、相手に伝わるコミュニケーションの重要性を学ぶとともに、自身のコーディネーションの改善点にも気づくことができました。これらの気づきや学びを通じ、さらなる技術向上に向け、学生スタッフ一人ひとりのモチベーションが高まるなど、その後の活動に活かせる貴重な経験となったと思います。



ボランティアコーディネート研修

● 深草学生スタッフ広報誌『ボラゴン』

■ 2012 年度法学部卒業 池上 慎平

学生スタッフ在籍中、センターを知ってもらおう広報班で広報誌『ボラゴン』の作成に携わっていました。当時、大学で初めてボランティア活動に参加した際に、自身だけでなく関わった人の人生にも互いに影響し合い、人と人との関わりが社会を少しでも良くしていくということをボランティアから学びました。知っていることと知らないことには大きな差があると思います。自身もたまたま知ったセンターのチラシから、自身が想いもしなかった経験をすることで世界が広がりました。本当に小さく基本的なことかもしれませんが、その第一歩を『ボラゴン』が創り出していくという想いを込めて、当時のメンバーと侃々諤々かんかんかくかくの議論をして作成し、学生スタッフ全員で沢山の学生に届けていました。



深草広報誌『ボラゴン』

● 瀬田学生スタッフ広報誌『Volunteer News』

■ 2014 年度社会学部卒業 若松 隼平

私が学生スタッフになったのは、入学後すぐに食堂前でもらった広報誌がきっかけでした。以前からボランティアに興味はありましたが、なかなか行動に移せずにいたとき、広報誌を見て純粋に楽しそう、一度話でも聞いてみようかなと思いました。

いざ学生スタッフになってからは、毎号の掲載内容が被らないように学生スタッフの活動内容やボランティア体験談などあらゆる工夫をしました。学内で手配りをして手にとって中を見てくれる人は少数だったかもしれませんが、しかしその僅かな中から、広報誌がきっかけで興味を持ち、センターに来室した人がいた時の喜びは格別なものでした。広報誌には誰かの一步を後押しできる力があると、私は今でも思っています。



瀬田広報誌『Volunteer News』

『ボランティアリーダー育成事業』として、初期は学生スタッフの育成を目的に、NPO・NGOの方からの活動事例を交えたお話や、ワークショップを用いたスキルアップ系の講座などを実施してきました。その後、より全学的に開かれたセンターを目指して入門編『ボランティア入門講座』と応用編『ボランティアリーダー養成講座』に分けて実施し、2014年度からは新たに『ボランティアコーディネーション力3級検定』を取り入れています。

これら課外の取り組み以外にも、正課においては依頼のあった教員の授業（基礎演習など）でセンターの紹介を始めるようになった他、2013年度からは教養教育科目特別講義『ボランティア・NPO入門』をセンター長が担当し、学内の様々な学部教員によるチェーンレクチャー形式で実施しています。

2003

学生スタッフを対象に、『ボランティアリーダー育成事業』を開始。その一環で外部講師のボランティアに関する講座を実施。

2004

同事業の講座を『ボランティアリーダー養成講座』（課外）としてスタート。2008年に『ボランティアリーダー養成講座』と改名して継続。

2005
2006
2007

2008

ボランティアリーダー養成講座の入門コースとして、座学とボランティア体験を組み合わせた『ボランティア入門講座』（課外）が全学対象でスタート。両キャンパス合わせて毎年80名前後の申し込みがあり、前期のセンター看板事業となる。

2009



入門講座 講義の様子 (2008年度)



高齢者施設でのボランティア体験 (2011年度)

2010

2011

基礎演習やボランティア関連科目において、センターの取り組み紹介やボランティアについての講義依頼を受け始める。

2012

2013

教養教育科目特別講義『ボランティア・NPO入門』（正課）がスタート

2014

日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)との共催で、『ボランティアコーディネーション力3級検定』（課外）がスタート

2015

2016

2017

2018

2019



ボランティアコーディネーション力検定 (2014年度)



ボランティアリーダー養成講座
『ファシリテーション研修』(2008年度)

関係団体の声は次ページ

2020年度短期大学部1年生 伊野 涼雅

「とりあえずボランティアをやってみたい」という純粋な興味・関心と、「もっと自己研鑽したい」という大学入学時の思いを抱きつつ、『ボランティア入門講座』に参加しました。オンラインでボランティアの基礎的な事柄を学んだ後の私のボランティア体験は、『京都風緑』という団体の竹林整備活動でした。

竹を切って運ぶという単調な作業ですが、朝から夕方まで一日中身体を動かし、本当に大変でした。しかし、疲労だけが得られるものではありません。この活動がまちづくりも含めた「将来世代の農業」を築くという役目を担っていることを知り、作業後にはやりがいや達成感を得ることができました。

結果として、講義部分でボランティアの基本と考え方を学ぶと同時に、体験でその魅力と意義を肌で感じることができ、非常に有意義な経験ができました。



ボランティア入門講座『ボランティア体験』(2020年度)

2020

新型コロナウイルスの影響により、正課の『ボランティア・NPO入門』、課外では『ボランティア入門講座』の座学部分と『ボランティアリーダー養成講座』をオンラインで実施。入門講座の『ボランティア体験』は、なるべく密を避けるように少人数や屋外の活動を多く取り入れたり、新たにオンラインの活動や医療用ガウン作りなども取り入れ、感染防止対策を講じながら活動した。

ボランティア体験受入団体の声

「ボランティア入門講座」は、ボランティアの基礎的な考え方について学ぶ講義と地域でのボランティア体験を組み合わせた講座です。2020年度は講義をオンラインで行い、ボランティア体験は感染防止対策を講じながら実施しました。今まで協力いただいた地域団体から、以下の声をいただいています。

● 京都市深草児童館

ボランティア・NPO活動センター設立20周年おめでとうございます。京都市深草児童館では『ボランティア体験』の学生受け入れの他に、ボランティア・NPO活動センターで活動する学生スタッフの皆さんが企画・準備する『サマーフェスティバル』という8月の夏休みイベントでも連携しています。ボランティア体験やサマーフェスティバルで子どもと触れ合う楽しさに興味を持った学生さんが、学習補助や遊びの相手としてボランティア活動をしてくれるなど、日々子ども達と関わりを持ってきています。これからもセンターと児童館で連携しながら普段接する機会が少ない小学生と大学生の交流の機会を作っていきたいと考えます。



深草児童館でのボランティア体験(2010年度)

● 認定 NPO 法人アクセス

■ 事務局長 野田 沙良

海外ボランティアは遠い世界の活動のように思う方もいるかもしれませんが、日本でできることも多くあります。私たちは、フィリピンで「子どもに教育、女性に仕事」を届ける国際協力NGOです。「自分で働いて子どもを学校に行かせたい」と願うお母さんや、仕事が見つからない若者たちに働くチャンスを提供しようと、フェアトレードのメッセージカードを生産・販売しています。『ボランティア体験』では、フィリピンから届いた商品の袋詰め作業などを担っていただきました。最初は緊張していた学生さんたちも、丁寧に手作りされた商品に触れながら会話を重ねる中で、少しずつ笑顔になっていきました。日本にいながら、フィリピンの人々の暮らしに少し触れていただけたのではないかと思います。



アクセス事務所でのボランティア体験(2019年度)

● 社会福祉法人 美輪湖の家 大津 障害福祉サービス事業所 瑞穂

設立20周年、おめでとうございます。当施設が毎年6月に開催している『みずほ祭』に、からあげやカフェコーナー、ヨーヨー釣りや輪投げ等模擬店での販売・接客、駐輪場案内係、会場の片づけ等のボランティアスタッフとしてご参加いただきありがとうございます。来客のピーク時や暑い中でも、元気ハツラツと活躍して下さる学生さん達に、利用者・職員一同感謝しております。他のボランティアスタッフやお客さんからも「学生さん達のおかげでスムーズに販売が出来た」「ゲームコーナーがすごく盛り上がり楽しかった」「または是非来年も参加してほしい」等の声があがっています。毎年多くの方で賑わうみずほ祭は、皆様のご協力のおかげで成り立っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



みずほまつりでのボランティア体験(2016年度)

● 森の風音

■ 代表 金子 龍太郎(龍谷大学 社会学部現代福祉学科 教授)

私たちの活動場所は、瀬田キャンパスに隣接する「びわこ文化公園」ですので、センターがボランティア体験を毎年開催して下さることによって、大学と公園とのつながりができてきました。

2020年度の活動は、公園の森林部分で、間伐して積み重ねていた材木をノコギリで切断して運搬するという重労働でした。私たちの会員は、全員が60代以上の高齢者ですので、重い材木を運ぶ作業が十分できないままでした。今回のボランティア体験により林内が片付き、会員一同喜んでいました。また、来園者の皆さんにもきれいになった林内を見ていただけるようになりました。

加えて、学生の力だけでなく、センター職員が同伴して下さるお陰で、学生の作業効率が上がりました。学生の若い力と職員のサポートに感謝いたします。



びわこ文化公園でのボランティア体験(2020年度)

学生が夏季や春季の長期休暇を利用して治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、現地 NPO・NGO などとの交流を通じて課題解決の取り組みなどを学びます。本プログラムでは参加費の一部をセンターが補助するなど、学生が参加しやすい環境を整えつつ、安全で学びの多いものを提供することに努めています。その他にも、本プログラム以外の様々なスタディツアーを知る機会となる合同説明会や、スタディツアーを企画する NPO・NGO や教職員向けのセミナーなどを、関係団体と共催してきました。これらのあゆみと、実施プログラムの様子、本プログラムの関係者や参加した卒業生や現役学生の声をご紹介します。

2003

NGO のスタディツアーから選定し、学生スタッフ研修の一環である海外フィールドワークとして開始。のちに『海外体験学習プログラム』と名称変更し、2019 年度まで毎年欠かさず継続。

2004

2005

2006

参加者を全学対象とする。

2007

学内の教員が引率する「学内企画」をスタート。NGO のスタディツアーから選定するものは「学外企画」と位置づける。

2008

2009

2010

学内で『海外体験学習プログラム報告会』を開始。

関西 NGO 協議会、(株)マイチケット、当センターの三者共催で、スタディツアー合同説明会を開始。のちに『NGO スタディツアー合同説明会』と名称変更して、2019 年度まで継続。

2011

2012

2013

関西 NGO 協議会、(株)マイチケット、当センターの三者共催で、『セーフトラベルセミナー』を開始し、2019 年度まで継続。

2014

2015

2016

2017

2018

2019

学内企画 1 ツアー、学外企画 2 ツアーを予定していたが、新型コロナウイルスの影響により学外企画 1 ツアーのみ実施。

2020

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、海外を訪問するスタディツアーに代わって、NGO と現地のカウンターパートとつないで現状を知る『オンラインスタディツアー』を実施。



2003 年度インドプログラム



2011 年度報告会の様子



2011 年度合同説明会に参加した学生スタッフ

関係団体の声

■ NPO 法人 関西 NGO 協議会 事務局長 高橋 美和子

センター設立20周年、誠にありがとうございます。設立当初、地域の課題だけではなく、海を越えたその先にある世界での貧困、ジェンダー、人権、災害等の問題にも目を向けられ、先駆的なお考えの元、スタディツアー合同説明会、セーフトラベルセミナーの事業を立ち上げ、今まで一緒でできたことは国際協力 NGO にとっても大きな喜びです。

また、全国に先駆けて他セクターとの連携を進められ、社会の課題を自分に引き付けて考え、学び、行動に移していく場を積極的に創られてきたことは、非営利セクターで活躍する人材の輩出につながり、大きな貢献であることは言うまでもありません。ますますの活動の充実を期待しております。



2020 年度オンラインスタディツアーの様子

本学教員が企画・引率する学内プログラム

(注) 所属・役職などは当時のものを示す。



2010年度タンザニア『貧困から脱出する道を探る』(引率:経済学部 大林 稔教授)



2013年度フィリピン『フィリピンで学ぶピープル・パワー』(引率:社会学部 笠井賢紀講師)



2017年度インド『教育 NGO の活動事例を通じて、インドの経済成長と社会発展について学ぶ9日間』(引率:経済学部 島根良枝准教授)

企画引率教員・団体

政策学部教授 北川 秀樹 (NPO 法人 環境保全ネットワーク京都代表)

ボランティア・NPO 活動センターが設立されてから 20 周年の節目を迎えられたということでまことにおめでとうございます。

私は本学に着任したのは 2002 年ですが、早くからセンター委員に就任していたこともあり、『海外体験学習プログラム』の企画募集に応募し、2007 年度、2008 年度と連続で中国陝西省に学生を引率しました。陝西省は京都府と友好提携を結んでおり、省都の西安市は唐の都の長安が置かれた歴史・文化都市です。1990 年代から 2000 年代は、中国西北部を中心に森林の過伐や過放牧により植被が失われ、水土流失、砂漠化が進行した時期でした。NPO 法人の代表を務め、西安市近郊で植樹協力をしてきた関係で植樹体験を企画しました。現地では小学校訪問・交流、大学生との交流、意見交換と人との交流に重点を置きました。短期間ではありましたが現地の文化、食、生活習慣、考え方に触れ、参加学生はマスコミ報道等で描いていたものとは異なるリアルな中国を肌で感じ、視野を広げられたのではないかと思います。友好的、開放的な中国の若者と交流できたことは特に大きな成果でした。しかし、2010 年頃から日中関係が政治的に冷え込んだこともあり、中国へのプログラムは差し控えました。

2016 年度に台湾南部の台南、高雄へのプログラムを企画し、2018、2019 年度と前述の NPO 法人の企画として連続して学生を引率しました。台湾は親日的で、食や文化が魅力的というのが一般的な評価ですが、清朝や日本の台湾統治、戦後国民党政権の戒厳令、民主化への転換と歴史的に大変複雑な過程を歩んできており、事前学習ではこの点の学びに力を入れました。現地では、阿里山の森林、野鳥観察などの自然とのふれあい、歴史博物館や八田與一建設の烏山頭ダム視察、山岳地帯原住民部落の訪問など旅行社ツアーでは訪問できない手作りの日程調整に努めました。また、現地の大学生との交流を通じて、語学力、思考力の高さに本学学生が触れられたことは大きな刺激になったと思います。今年 2 月末のプログラムは新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた時期であり、随行する NPO メンバーの中にもキャンセルする人もおり実施が危ぶまれましたが、現地の受け入れ側の配慮もあり無事行程をこなすことができたことを喜んでます。

台湾の大学の方からも指摘がありましたが、学生の体験を支援する大変素晴らしいプログラムだと思います。今後ともセンターのこのプログラムとして継続されることを祈念しています。最後になりましたが、中国での案内でお世話になった呉衛さん(2016 年病気により逝去)、国立成功大学の王毓正先生に心より感謝を申し上げますとともに、上手さんをはじめとしたセンタースタッフの方にお礼を申し上げます。

経済学部教授 松島 泰勝

私は、2008 年 9 月に初めて『海外体験学習プログラム』の引率を始め、パラオを訪問した。在パラオ日本国大使館(私の以前の職場)、JICA パラオ事務所、パラオ政府外務省、パラオ政府観光局等で意見交換を行い、事前学習で学んだことをもとにして、学生が質問を英語で行った。その後、パラオのロックアイランドのエコツアーに参加し、その自然の美しさを体感した後、パラオ国際サンゴ礁センターにおいて、サンゴ礁を初めとする海洋生物の生態的な特徴を学んだ。次に、空き缶リサイクル工場、ゴミ処理場を見学し、島嶼社会における環境問題に対する取り組みについて聞き取り調査した。そして、パラオを代表する PPR (パ



2008 年度中国プログラム



2017 年度台湾プログラム



2010 年度パラオ・グアムプログラム

第3章 主なセンター事業のあゆみ●海外体験学習プログラム

ラオ・パシフィック・リゾート) というホテルでの環境対策を調査した。同ホテルでは、飲み水を周辺の森からまかない、汚水も自らで処理しており、徹底した環境政策を行っていた。

2011年2月にはパラオとグアムで同プログラムを行った。グアム大学の学生と意見交換し、グアム商工会議所で同島の経済政策について聞き取り調査をした。その後、在ハガツィヤ日本国総領事館(私の以前の職場)でインタビューをした後、老人ホームで御老人との交流ボランティア、さらにはビーチクリーンアップボランティアを行い、このボランティアに対してグアム観光局から感謝状を頂いた。パラオでは、日本人学校で子供たちと交流をした後、クニオ・ナカムラ元パラオ大統領にインタビューをした。そして、パラオ短期大学の学生と文化交流をした。

2013年8月にグアムとパラオへのプログラムを実施した。グアム先住民族の古代集落跡であるパガット地区は、当初、米軍実弾訓練場建設予定地であったが、地元民の反対運動による計画は撤回された。ベバクア・グアム大学教員の案内で、同地を皆で歩いた。その後、グアム大学でグアムの自立・独立について意見交換を行った。その後、グアムの脱植民地化委員会のアルバレス事務局長にインタビューをし、同局長の自宅においてパーベキューをご馳走になった。

2015年2月のパラオでのプログラムでは、太平洋戦争の激戦地であったベリリュウ島で平和学習をした。同島のオレンジビーチでビーチクリーンアップボランティアを行った後、ナカムラ元大統領と面談・交流をした。パラオ短期大学では、龍大生たちが「よさこいソーラン節」踊りを披露し、龍大職員から寄贈された日本の着物をパラオ人学生にプレゼントした。

『海外体験学習プログラム』において、学生はグアムとパラオの課題と可能性について調べ、発見し、実践することができたと考える。



2014年度パラオプログラム

●参加学生・卒業生の声

■2017年度国際文化学部卒業 余根田 敦(2015年度参加:パラオ)

私は2015年の海外プログラムでパラオを訪れました。本プログラムの参加動機は、パラオが日本と深い歴史的関わりを持っていると知った為です。耳にする事が少なかったパラオとの間に、文化的類似点(言葉や人名)を現地で発見した瞬間は忘れられません。

手つかずの自然を観光資源とするパラオですが、自然保護と産業発展のジレンマを抱えており、小さな国特有の課題を学びました。また、第二次世界大戦で激戦地となった島では、当時の遺構に触れる事で平和の尊さを実感しました。プログラム終了後も、参加メンバーと勉強会やパラオを広める企画を開催した事はいい思い出です。

短い大学生活の中で、体験し、考えてみる時間は限られます。知らない自分の可能性に出逢える機会をぜひ掴んで下さい。



2015年度パラオプログラム

■2020年度農学部4年生 瀬戸山 瑠衣(2018年度参加:台湾)

台湾のプログラムで学んだことの中で印象的なのは、日本統治時代に日本が台湾に与えた影響についてです。台湾の鉄道や港などのインフラを発達させ、多大な影響を与えたことから、台湾の街並みの中にも日本の商品を見かけたり、日本語を話せる人を見かけたりと、現在でも親日であることを実感しました。また、ツアーに同行していた学生の学ぼうとする意識の高さや、NPOの方々の豊富な知識に刺激を受け、自分のスキルアップのためのモチベーションとなりました。

台湾へ行って何かについて完璧に学んだとは思っておらず、これからの学びのきっかけになったと考えています。この貴重な経験を生かして学びを深めていきたいです。



2018年度台湾プログラム

さまざまな NGO と連携した学外プログラム



2006 年度インド『開発・教育・子ども～経済・社会格差を超える NGO のアプローチ～』
(NPO 法人アジアボランティアセンター)



2009 年度カンボジア『平和と国際協力を学ぶ』
(NPO 法人テラ・ルネッサンス)



2011 年度フィリピン『貧困の中で生きる人々と出会い、向き合う旅』(NPO 法人アクセス)



2011 年度ネパール『世界の屋根ヒマラヤの国環境を守るバイオガスプラント支援活動』
(社団法人アジア協会アジア友の会)



2014 年度スリランカ『仏跡と茶園の旅』
(NPO 法人 JIPPO)



2018 年度インドネシア『ボルネオ島エコツアー 森の中でのホームステイ』
(ウータン 森と生活を考える会)

■ツナミクラフト代表 東山 高志

マングローブや漁師体験で自然と触れ合い、子どもたちと戯れ、ろうけつ染めなど手仕事に集中する。学生たちはとてもいい顔をしている。ツナミクラフトでは 2011 年度から 5 回、学生たちと 2004 年のスマトラ島沖地震のタイの津波被災地を訪問した。彼らは体験を通して変わっていった。

東日本大震災直後に東北地方から京都に出てきた学生は、同級生を被災地に置いてのうのと京都で暮らしていることに引け目を持っていたが、タイの被災者たちの生きざまを見て前向きに生きると決めた。別の学生は、いままで食べられなかったものが食べられるようになった。別プログラムで石巻市雄勝地区に行った学生は、日本とタイとの復興の違いに愕然とした。学生たちの変化は私の想像を超えた。体験を通して学べる機会を今後とも継続してもらいたい。



2019 年度タイプログラム

●参加学生の声

■ 2020 年度政策学部 3 年生 福島 麻斗 (2019 年度参加: タイ)

2004 年のインド洋大津波によって大きな被害を受けたタイは、被災後、迅速に復興がすすんできている。海の近くに津波の避難所を作り、6 か国語で津波の襲来を知らせる警報器の設置をするなど、タイ国民だけでなく外国人も津波から命を守る防災が考えられていた。

今回訪れたタレーノーク村は津波で人口の 3 分の 1 の人々が命を落とすなどの甚大な被害を受けたが、その後村や学校を海から離れた場所や高台へ移転し、地域づくりをすすめている。そこからは村人たちが主体となって津波被害に向き合うという強い意志を感じた。しかし 15 年たった今でも津波による課題が残っているのも事実である。津波犠牲者の墓地には亡くなった人たちの遺体が 300 体ほど冷凍保存された状態のままになっているそうだ。DNA 鑑定を行った結果、違法労働でタイに入国した人だと判明すればその家族が裁かれるという事情からどうすることもできないという現状がある。

15 年たった今でも災害の爪痕が悲しい形で残っているという、つらい現実が胸が塞がった。

第3章 主なセンター事業のあゆみ●国内体験学習プログラム

海外に比べて費用面でも参加しやすい国内において、地域の様々な課題に目を向け視野を広げることを目的に実施しています。こちらも当初は学生スタッフ向けにボランティアリーダー育成事業の一環で位置づけられてきましたが、より多くの学生に学びの機会を提供するため、現在は全学対象にしています。本学教員の企画・引率や学外企画のツアーなどからさまざまなプログラムを選定してきましたが、ここ数年は学生の興味関心が高い福島や、身近な地域のまちづくりについて学ぶ滋賀のツアーを実施しています。

2002 学生スタッフの研修の一環で「国内合宿」を実施。

2003 夏に「国内研修」、春に「海外フィールドワーク」（海外体験学習プログラムの前身）を学生スタッフ研修の一環としてスタート。国内では沖縄や屋久島を中心に両キャンパスで毎年交互に訪れ、平和・環境問題などを中心に学ぶ。（～2007年度）

2004

2005

2006

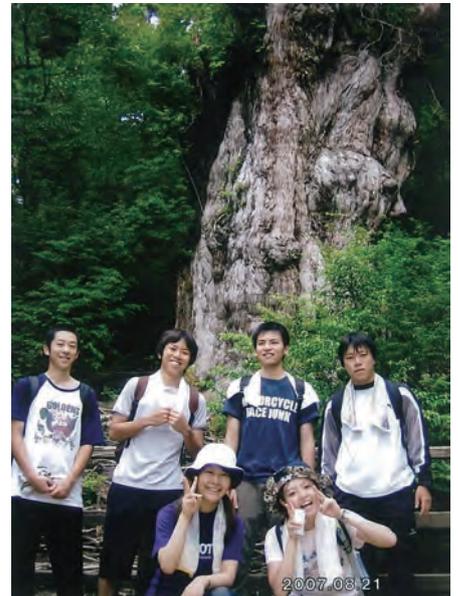
2007



2008年度岐阜研修（深草）



2006年度沖縄研修（瀬田）



2007年度屋久島研修（深草）

2008 それまでの沖縄・屋久島から、岐阜（まちづくり）や広島（平和・福祉・環境）、兵庫（災害）など、学生スタッフの関心に応じて行先やテーマも多様化。（～2009年度）

2009

2010 学生スタッフの国内研修を、学内教員が企画・引率する『国内ボランティア体験プログラム』として設置し直し、参加対象を全学に広げて実施。



2009年度兵庫研修（瀬田）

2011

2012 名称を『国内体験学習プログラム』と変更し、学内教員の企画・引率で本格的にスタート。

2013 教員引率企画の他、NPOなどのプログラムを取り入れる「学外企画」も導入。

2014

2015 社会学部筒井教授の企画・引率する『福島スタディツアー』を、センターのボランティアコーディネーターも同行して開始。（2019年度まで毎年訪問）

2016

2017 センターのボランティアコーディネーターが企画・引率する『滋賀スタディツアー』を開始。2017-2018年度は高島市、2019年度は近江八幡市と甲賀市を訪問。

2018

2019

2020 福島スタディツアーで訪問した団体とオンラインで繋ぐ『つながる福島ワークショップ』、および滋賀スタディツアーは日帰りで『近江八幡の左義長祭 ～コロナ禍において伝統文化の継承について考える～』を実施。



2010年度『国内ボランティア体験プログラム（滋賀）』（引率：法学部 谷垣岳人講師）の様子

プログラムの様子・
参加学生の声は次ページ



2020年度日帰りで実施した近江八幡プログラムの様子

今まで実施した国内体験学習プログラムの中から、訪問先での学生の様子と、ここ数年継続して訪問していた福島と滋賀のスタディツアーに参加した学生スタッフの声ををご紹介します。



2012 年度沖縄『平和と多文化共生について学ぶ』
(引率：経済学部 松島泰勝教授)



2013 年度鳥取県智頭町『過疎の山村再生と、魅力的なまちづくりを学ぶ』
(引率：政策学部 清水万由子講師)



2015 年度丹後『丹後に会おう』
(プログラム元:NPO 法人京都デザインスクール他)



2014 年度富山県五箇山
『合掌の里グリーンツーリズム体験』
(プログラム元：認定 NPO 法人 JUON NETWORK 他)



2016 年度福井
『ふくいエコ・グリーンツーリズム体験』
(プログラム元：NPO 法人森林楽校森んこ 他)

福島スタディツアー参加学生の声

■ 2020 年度文学部 2 年生 早川 歩伽 (2019 年度参加)

私がこのツアーに参加したのは、被災地の今を自分自身の目で見て、現地の人々の生の声を聞きたいと考えたからです。初めて訪れた福島県では、9年たった今でも震災の爪痕が色濃く残っていました。津波の被害を受けた地域を目にした時はどこまでも広い田畑が広がる光景に言葉を失いました。福島県は地震、津波の被害だけでなく原発による影響も受け、まだ今も帰還困難区域があります。様々な場所で目にした汚染土を入れた土のう袋はその数に恐怖すら感じました。今回私が目にした被災地は至る所で様々な工事が行われており、復興に向かって進んでいると感じられましたが、その一方でまだまだ沢山の課題があります。このツアーでは沢山の被災者の方から貴重なお話をお聞きし、自分の無知さを痛感しました。このツアーを通して、私がこれからできることは聞いたこと、見たこと、学んだことを自分の周囲の人々に伝えるということであると考えています。



2018 年度福島スタディツアー
(引率：社会学部 筒井のり子教授)
農園の取り組みについてお話を聴いている様子

高島スタディツアー参加学生の声

■ 2019 年度農学部卒業 橋本 昌尚 (2017 年度参加)

私はこの体験を通して、自分の固定観念や地域に対するイメージが変わったと実感しています。特に、地域住民が自ら活動することの大切さについてです。

参加する前は、地域の活性化や課題解決は行政が行うものだという考えを持っていました。しかし訪れた滋賀県高島市では、地域住民や移住者の方々が、高島の魅力を伝える活動や地域の課題解決を行政とともに取り組んでいることを知り、その考えが変わりました。

地域をより良くしたいと考え、行動しているのは行政だけでなく、生活している住民も協働しているのだと実感することができたプログラムでした。



2017 年度滋賀県高島市スタディツアー
(引率：國實紗登美コーディネーター)
琵琶湖での漁業体験の様子

第3章 主なセンター事業のあゆみ ● 災害復興支援活動

多くの災害が発生した 2004 年以來、大規模災害の度に学生や関係団体・部署と協議しながら、募金活動や復興支援活動に取り組んできました。2011 年の東日本大震災以降は、龍谷大学が復興支援に関わるプロジェクトチーム (PJ) の事務局として、その後の支援活動や他の災害が発生するたびに PJ で協議しながら進めています。また、各地の災害ボランティアセンターが募集する復興支援活動への協力や、学内者向けに災害ボランティアに必要なグッズの貸し出しなども行っています。

2004

北陸豪雨被災者支援 緊急タオルアクション
台風 23 号災害ボランティア
新潟県中越地震募金活動・災害ボランティア
インド洋大津波 (スマトラ沖地震) 募金活動



北陸豪雨緊急タオルアクション (2004 年度)

2005
2006

2007

新潟県中越沖地震復興支援にかかる各種取組
[募金活動、災害ボランティア]



中国四川省大地震募金活動 (2008 年度)



台風 23 号災害ボランティア (2004 年度)

2008

ミャンマーサイクロン募金活動
中国四川省大地震募金活動

2009
2010

2011

東日本大震災復興支援にかかる各種取組
[募金活動 (被災地支援/活動学生への支援)、東北物産品販売復興支援ボランティア 5 回、復興支援フォーラム]

東日本大震災復興支援の取り組み
・参加学生の声は次ページ

2012

宇治市豪雨災害ボランティアへ協力
東日本大震災復興支援にかかる各種取組
[復興支援ボランティア 2 回、復興支援フォーラム]



ネパール地震募金活動 (2015 年度)

2013

台風 18 号災害ボランティアへ協力
東日本大震災復興支援にかかる各種取組
[復興支援ボランティア 3 回、復興支援フォーラム]

2014

東日本大震災復興支援にかかる各種取組
[復興支援ボランティア 3 回、震災を語り継ぐモニュメントの設置]

2015

ネパール地震募金活動
東日本大震災復興支援ボランティア 2 回

2016

熊本地震にかかる各種取組
[募金活動、復興支援ボランティア 2 回]
東日本大震災復興支援ボランティア 1 回



熊本地震ボランティア (2016 年度)

2017

東日本大震災復興支援ボランティア 2 回

2018

平成 30 年 7 月豪雨にかかる各種取組
[募金活動、復興支援ボランティア 1 回]
東日本大震災復興支援ボランティア 2 回



岡山県真備町での豪雨災害ボランティア (2018 年度)

2019

東日本大震災復興支援ボランティア 2 回

2020

東日本大震災復興支援フォーラム 発災から 10 年
～あらためて震災を振り返り、その経験を「知恵」とする～
をオンライン (Zoom) で開催

東日本大震災復興支援ボランティアと学内での取り組み

※詳しくは、『龍谷大学 東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（2011年～2020年）』をご覧ください。



卒業式での募金活動（2011年3月）



第1回復興支援ボランティア（2011年6月）



学内で東北物産品販売（2011年12月）



雄勝の地場産業の硯石スレートを磨く作業
（2012年9月）



仮設商店街『おがつ店こ屋街』イベント協力
（2014年11月）



大川小学校で当時のお話を伺う（2015年10月）



雄勝湾灯籠流し（2016年8月）



雄勝小学校・中学校併設校の大運動会
（2017年9月）



雄勝ローズファクトリーガーデンの整備
（2018年9月）

復興支援ボランティア参加学生の声

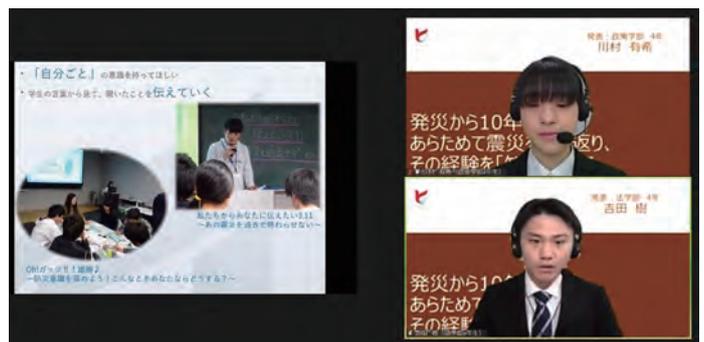
2020年度政策学部4年生 川村 有希

私は、2017年度から3回雄勝を訪れました。毎年訪れた理由は、「雄勝に来るのを1度で終わらせてほしくない」「復興とは何か」という、私にとって忘れられない、考えさせられる2つの言葉に出会ったからです。雄勝の状況や1年ごとに変わっていく風景を見てきて、この言葉を仰った方の想いや背景が思い浮かぶからこそ、私の中で「雄勝」という存在が大きくなっていったのだと思います。

また、私たちに震災当時のことをお話いただくタイミングや、私たち自身の聴く姿勢によって、話の内容をより深く感じられるということにも気づきました。私にとって雄勝は新たな発見がある場所であり、毎年訪れ続ける事の大切さを教えてくれた場所です。



雄勝小学校児童が避難した裏山での防災教育
（2019年8月）



東日本大震災復興支援フォーラムをオンライン（Zoom）で開催（2021年2月）

第3章 主なセンター事業のあゆみ ●学内でのボランティア啓発

ボランティアの裾野を広げることを目的に、学内において社会課題に気づけるようなイベントや出張ボランティア相談会、各種啓発展示などを学生スタッフが中心となって数多く実施してきました。両キャンパスの取り組みのほんの一部ではありますが、関わった卒業生スタッフや関係者の声をここで紹介します。

市民活動団体の合同説明会やセンター利用促進の取り組み



ボランティア・市民活動相談会 (2002 年度)



出張ボラセン in 大宮 (2011 年度)



ボランティア募集団体合同説明会
～あなたもレッツ!ボラデビュー～ (2014 年度)



サークル情報交換会拡大版!つながり～サークル
同士の輪～ (2016 年度)



アタックボラセン (2017 年度)



収集ボランティア (2018 年度)

● Let's ボランティア

■ 2014 年度社会学部卒業 政丸 由香 (旧姓: 藤村)

『Let's ボランティア』は、私がボラセンを知ってもらうために力を入れていた活動の一つです。チラシを配らずにテーブルに置いたり、手持ちアンケートを導入したり、積極的に新しい方法に挑戦しました。アンケートではボランティアへのハードルを下げるような楽しい質問もプラスすると注目してもらえ、私たち自身のモチベーションアップにも繋がりました。友達から「ボラセンってよく外にブース出してるよやんな?」と言われた時は、一歩前に進めたようでとても嬉しかったのを覚えています。仲間と様々なアイデアを出し合ったあの時間は、今でもかけがえのないものです。これからも学生スタッフには、ボラセンを通してたくさんの人にボランティアの輪を広め、仲間と企画を創り上げることで充実した濃い時間を過ごしてもらえんことを願っています。

2008～2019年度まで瀬田キャンパスでボランティア促進のため毎年実施している学生スタッフ企画。



2015 年度の様子

● リユース傘貸し出しプロジェクト

■ 2011 年度法学部卒業 横関 つかさ

活動当時は、本プロジェクトを「センターの認知度向上の機会」という発想でしか捉えていませんでした。しかし、今改めてふりかえてみると、傘の貸出時の対応は紋切り型の事務的な対応ではなく、「この傘かわいいですね」や、「見た目はちょっと古いけどこっちの方が頑丈ですよ」など、借りる傘を選ぶ学生とのちょっとしたやりとりがありました。些細なことですが、この積み重ねがボランティアコーディネーションの場面で相手との自然なやりとりや会話の幅を広げるトレーニングの場にもなっていたように思います。今活動している学生スタッフにも、本プロジェクトをそういう視点から捉え、今後の活動に活かしてもらえれば嬉しいです。

学生部から譲り受けた学内の忘れ物傘を突然の雨の時に貸し出し、借りに来た人にセンター事業などを広報し活用促進をはかる。2006年度に深草で始まり、2017年度から瀬田でも開始。



2009 年度 傘貸し出しの様子

さまざまな社会課題をテーマにイベントを実施



Big Issue 講演会～ホームレスと若者～
(2007 年度)



STAR (Save The Animal from Ryukoku)
小さな命のモノガタリ
—知らない表情がここにある— (2016 年度)



子ども食堂を広げよう (2018 年度)

● 出会は priceless！ 補助犬から考えるみんなのまちづくり (2004 年度実施)

■ 2006 年度社会学部卒業 那須 麻利子

補助犬シンポジウムを開催するにあたり、我々も補助犬ユーザーとの事前打ち合わせを通して、補助犬について一から学ばせていただきました。障がいの異なるユーザーそれぞれに寄り添う補助犬は、目となり耳となり、手足となってユーザーの当たり前前の生活を支え、ユーザーが一人でクリアできない部分を補う欠かせない存在であることを知りました。一方、決して万能ではなく、補助犬だけに頼る生活の難しさも感じ、やはりハード、ソフト両面のバリアフリーの整備が必要だと感じました。当事者にしか分からない事もたくさんあります。このシンポジウムは、経験談からその方の置かれた状況を想像し、気づき、課題を考える、良いきっかけになったように思います。

身体障害者補助犬法が施行されてから間もなく 20 年になりますが、補助犬への理解はまだまだ十分ではないように感じます。実際に見聞きする機会が定期的に持たれ、補助犬への理解が深まることを願っています。



シンポジウムの様子

● 生きるぼくら～ボランティアから共生を見つめる～ (2017 年度実施)

■ 2018 年度法学部卒業 日野 萌絵子

「自分とは関係ない」と思いがちな障がいについて、身近に感じてもらうための企画を考え、本学学生へ向けて『ボランティアサークル プラネット』メンバーの皆さんや保護者の方、サポートする方などからお話をいただきました。障がいのため電車の中で座らず動き回っている様子を見たとき、その特性を知っていると知らないのでは受け取り方が違う。偏見の目で見るとは、落ち着いたことがあったのかな」など、理解しようとする。そのようにして理解者を増やしていくと、皆が生きやすい社会になるのだと改めて感じました。参加者には「まず理解することが大切」と伝えると同時に、「家族はしんどそう」などのマイナスなイメージを少しでも変える良いきっかけになったと思っています。



メンバーの親御さんからお話を聴いている様子

■ ボランティアサークル プラネット 代表 堀田 ともみ

障がいがあっても充実した余暇を過ごして欲しい!いろいろな事を経験して素敵な思い出を作って欲しい!プラネットは、障がいのあるメンバーの余暇支援サークルとして活動を続け、13 年目を迎えました。貴センターを通じて、これまで数多くの学生ボランティアに参加頂き、活動を支えて貰っています。『生きるぼくら』では、障がいを持つ我が子を育てる中で思い悩んだ日々、障がいを受け入れ共に歩むこと、サークル活動の必要性などをお話する機会を頂きました。障がいのある人と学生さんの間には、目には見えずともとても高い壁があります。学生スタッフがそれに気付いて、何とかしてその壁を取り除こうとしてくれた事にとっても感動し、感謝の気持ちで一杯になった事を覚えています。これからも末永く、メンバーとの思い出作りにご協力頂けると嬉しいです。

国際分野のイベントや講演会・ワークショップ



NGO フェスタ in 関西 (2005 年度)



国際協力コンソーシアム
～関西の NGO をつなぐ～ (2007 年度)



もし世界が 100 人の村だったら (2008 年度)



フェアトレード講演会 (2008 年度)



滋賀県多文化共生ボランティア説明会
(2009 年度)



世界丸見え! あなたとつながる貧困問題
(2010 年度)

● ^{みらい} 明日の子どもたちに笑顔を～世界を変えるための一歩を一緒に踏み出しませんか?～ (2009 年度実施)

■ 2011 年度経済学部卒業 藤澤 良介

『僕は 13 歳 職業、兵士。』アフリカで子どもたちが兵士として戦場に立たされている現実があることを伝える 1 冊の本との出会いがきっかけとなり、勉強会から講演会へと一連の企画が動き出しました。これから社会を担う学生に子ども兵の現実を知ってもらうことが、後々世界を変えていくんだという想いを込めた、学生スタッフ活動の集大成でした。振り返ってみると良くも悪くも学生らしいまっすぐで熱く、未熟なことも多かった企画でしたが… 学生時代の全力をぶつけ、企画を形にしていく過程で、関わった学生スタッフには多くの変化と成長がありました。この企画に携わった同世代の学生が今、それぞれのフィールドで活躍することで、何か少しずつでも世界が変わっていれば嬉しく思います。



NPO 法人テラ・ルネッサンスへ託した
講演会参加者メッセージ

災害復興や防災・減災を考える展示とワークショップ



グローバルなワークでワクワク!～震災から多
文化共生を Thinking ～ (2011 年度)



Oh! ガッツ! 雄勝♪～雄勝の今を伝えたい～
(2014 年度)



私たちがあなたに伝えたい 3.11 ～あの震災を
過去で終わらせない～ (2018 年度)

※これらの他にも、龍谷祭の中で数々の展示やワークショップを実施しています。

龍谷祭での展示と模擬店

● 深草龍谷祭

■ 2014 年度文学部卒業 峰松 優丞

ボラセン 20 周年おめでとうございます。私が卒業してから 6 年が経とうとしていて、今回の寄稿のため久しぶりに昔の報告書を開きましたが、本当に懐かしいです。特に 2 年生の時の龍谷祭はとても印象的で、初めて同級生たちと中心に企画したものでした。ミーティングを進めても、経験の浅い私たちは全くアイデアが思い浮かばない…。ぼんやりと「面白いことがやりたいなあ」こんな感じのことを考えていました。それで出来たのが「迷路の展示」でした。教室全体を迷路にしてそこに活動報告を散りばめるというもので、当日はとにかく子どもたちがたくさん来て走り回っていた思い出があります。

毎年龍谷祭の展示は大変ですが、仲間たちと悩んだり夜遅くまで準備したりと、今になって思えば私にとって「青春」を感じる企画でした。



2012 年度 深草龍谷祭展示
『私×ボランティア～ボランティアランドへようこそ～』



2010 年度展示『アフターショック
～災害ボランティア・私たちにできること～』



2013 年度の模擬店収益は東北へ寄付



2019 年度展示
『学びを発掘!～ボラセンミュージアム～』

● 瀬田龍谷祭

■ 2013 年度国際文化学部卒業 菱本 柚香

龍谷祭で企画をしたいと思った 1 年生の時、私自身がボラセンや学生スタッフの活動をもっと知りたいというところから始まりました。自分たちが知ること、他の学生にボランティアの魅力を伝える、という学生スタッフの役割の手助けになるといいなあと思ったからです。その年の瀬田龍谷祭は台風で中止となりましたが、作った展示物は 10 周年事業で活かすことができました。

また、その後発生した東日本大震災について、「震災を風化させない」という思いもずっと持っていました。継続的に支援することに繋がればと思い、2 年生では震災ボランティアの報告や交流する場、東北のご当地グルメの出店を考えたのを思い出しました。龍谷祭を経験して、自分 1 人では難しいことも他の学生スタッフと一緒に知恵やアイデアを出し合うことで形にできるのだと実感出来たことは、私の中での大きな財産になっています。



2011 年度 瀬田龍谷祭での模擬店収益は、展示会場に設置した募金箱で集まった額と合わせて東北へ寄付



2008 年度展示
『龍谷で出会うもうひとつのアート展』



2012 年度展示
『Do you know ボラセン? in 瀬田龍谷祭』



2017 年度展示『零から始めるボランティア
～下から見るか、横から見るか?～』

第3章 主なセンター事業のあゆみ ● 近隣地域での活動 (深草キャンパス)

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にも繋がる活動に取り組んできました。特に、ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生たちへ向け、学生スタッフが中心となって地域と繋がる活動のきっかけとなるようなボランティア企画を提供しています。設立以来、たくさんの学生スタッフ企画が実施されたうち、深草キャンパスの取り組みの一部と、関わった卒業生スタッフの声をここで紹介します。

● 伏見区野宿者支援プロジェクト

■ 2009 年度法学部卒業 藤原 西児

NPO 法人 JIPPO の取り組みにボラセンが協力する形で始まった『伏見区野宿者支援プロジェクト』に、2008 年末から 2009 年末頃まで参加しました。リーマンショック後の不景気で、野宿生活者の方が伏見区の東高瀬川・西高瀬川・山科川の河川敷に増えていました。このプロジェクトの発起人であり、ボラセン初代センター長で当時 JIPPO 代表だった中村尚司先生や、深草ボラセンのコーディネーター竹田純子さんが野宿生活者の方々に日々の生活や困りごとを聞かれた後、食料や銭湯のチケットを渡すのが私の役割でした。

その中で、野宿生活者の F さんは中村先生のサポートもあり、生活保護を受給することができました。その後、私がインドの旅行社へ就職が決まり、F さんが移り住んだ新居でみなさんと鍋を囲んでお祝いしていただいたことは今も心に残っています。

2008年度：NPO法人JIPPO実施の河川巡回協力を学生スタッフとCDで冬に開始
2009年度～：
通年の取組みとして随時学内募集
2010～2015年度：河川巡回の他、居宅訪問や関連イベントなどへも参加



河川巡回活動 (2009 年度)



野宿者支援勉強会 (2009 年度)



支援物資の準備 (2011 年度)



支援団体ネットワークの野宿者支援もっちり大会(2014 年度)

● 深草児童館との関わり

■ 2017 年度法学部卒業 新川 貴大

私が学生スタッフになって初めて企画メンバーとして関わったのが、『サマーフェスティバル』でした。深草児童館の子どもたちに、学生スタッフ手作りの遊びで夏休みの楽しい思い出を作ってもらおうというものです。遊びの内容を考えたり、準備をするのに何度もミーティングを重ね本当に大変でしたが、子どもたちがとびぎりの笑顔で遊んでいる姿を見たときは本当に嬉しかったです。卒業後も後輩たちが続けてくれており、とても嬉しく思っています。この企画は初めてボランティアに参加する人にとっても参加しやすいものだと思うので、これからも学生スタッフの企画が龍大生にボランティアに関心を持ってもらう存在になればいいと思います。

2009年度：『Young☆Star』
2010年度：『ボランティア体験』
2013年度：『防災劇と防災グッズ作り』
2014～2019年度：『サマーフェスティバル』
2020年度：『ボランティア体験』



サマーフェスティバル (2014 年度)



Young ☆ Star (2009 年度)



防災劇と防災グッズ作り (2013 年度)



サマーフェスティバルで使う竹水鉄砲の準備 (2018 年度)

●『深草ふれあいプラザ』ボランティア

■ 2014 年度政策学部卒業 小松 茂樹

私に関わった時の『深草ふれあいプラザ』では、伏見区役所深草支所と協働で、地域の方々の防災意識を高めることを目的とした防災展示を実施しました。

出展に向けて伏見区役所担当者や企画メンバーと何度も何度も打合せを行った期間は、私自身初めての企画責任者ということもあって様々な苦労がありました。非常に充実していました。

何よりも嬉しかったのは、イベント当日に防災展示の人形劇を見に来てくれた子どもたちが、とても楽しんでくれていたことです。

自分でも地域の役に立てるという実感が得られた初めての瞬間でした。この経験がその後のボラセンでの活動だけでなく、社会人となった今でも生きています。

■京都市伏見区深草支所 地域推進室まちづくり担当

『深草ふれあいプラザ』は、日々地域で活動されている自治連合会などの各種団体の方々が主体となって開催しているお祭りです。子どもからお年寄りまで誰もが参加でき、毎年約 15,000 人もの方々が来場者があります。このような大規模なお祭りをより活気あるものにし、円滑に運営していくためには若者の力が不可欠です。お祭りを通じて地域間の絆が深まるだけでなく、高齢者や大学生等の世代間交流は相互理解や文化の継承など地域の活性化にもつながります。龍谷大学のボランティアの皆様には、地域の方々との交流を通じて、まちづくりの在り方を学んでいただくとともに、地域活動に積極的に関わっていききたいと思えるきっかけづくりにしていただけると幸いです。

2011年度～：防災啓発ブース出展
2014年度～2019年度：センター紹介ブース、子ども向け遊びのブース、ステージ進行補助、模擬店、その他ブースのお手伝い



防災展示ブースでの人形劇 (2012 年度)



龍大ボラセンブース内部の準備 (2011 年度)



ゆるキャラと子どもたちの交流ステージを運営 (2014 年度)



看板を持って行列の目安に (2016 年度)



ごみ分別のブース (2019 年度)

●南宇治中学校部活支援ボランティア

■ 2010 年度法学部卒業 清水 麻未

当時、中学校でのボランティア活動というと、学習支援は多数あれど部活動支援は珍しかったので、「勉強を教えるのは不安だけど、経験のある部活動なら」と思ったのがこのボランティア企画に関わるきっかけでした。参加学生の中にはずっとスポーツを続けている人もいたので、しっかり技術面を教えていて、その指導を受けている中学生の姿が印象的でした。私の場合、技術を教えるというより、普段関わりが少ない中学生と話したりすることが楽しかったです。

他の先生とも保護者とも違う大学生のボランティアは、多感な中学生にとって時に話しやすい存在であったり、気軽に接することの出来る存在になり得るのかなと思いました。企画メンバーとしてもミーティングで内容を考えたり、様々な広報を行なったことは良い経験となりました。

2005年度：後期に2回実施
2006～2008年度：
前期・後期に各1回実施



野球部員と一緒に撮影 (2008 年度)



軟式テニスの技術指導 (2007 年度)

● 『南区民ふれあいまつり』 子ども向けブースの出展

■ 2016 年度法学部卒業 松本 奈子 (旧姓: 岩本)

『南区民ふれあいまつり』は、京都の東寺で毎年秋に開催されているお祭りです。そこで子ども向けの遊びのブースを出す学生スタッフ企画のメンバーとして、2015-2016年に活動しました。どんな子でも楽しめ、歴史ある東寺に合うブースにしようと企画メンバーで沢山話し合いました。2015年は弓矢の的当てゲームと、小さい子でも楽しめるよう好きな色でミサンガを編むブース、翌年はボールの的当てゲームと、好きなパーツを組み合わせてお面を作るブースに。学内でボランティア募集も行い、関心を寄せてくれた龍大生が申し込んでくれました。

お祭り当日は予想以上に沢山の子も達が遊びに来てくれ、一生懸命作り上げたブースで楽しそうに遊んでいる姿を見て、とても嬉しかった事を今でも覚えています。お祭りのボランティア企画に関わられた貴重な経験と、ゼロから仲間とブースを作り上げた達成感や喜びは私の宝物です。

2015～2019年度まで実施



龍大ブースの受付カウンター (2016 年度)



景品に折り紙の手裏剣を準備 (2015 年度)



手作りの的当てブース (2015 年度)



紙皿を使った工作ブース (2018 年度)

● 『ふかくさ 100 円商店街』 との関わり

■ 2014 年度経済学部卒業 後迫 治基

私が企画責任者として最も尽力したことは、地域ボランティアの面白さを伝えるきっかけをつくることにありました。日々の活動を通じ、私は龍大生と地域の隔りについて勿体なさともどかしさを感じていました。実際に体験してみない事には知り得ないこと、感じる事、伝わらないこと。それらをこの企画を通じ、学生に感じてもらいたかったのです。

このボランティア企画が数年続いたのは、ひとえに協力して下さった関係者の皆様方、後に続いてくれたボラセンスタッフのおかげであると強く感じます。既に7年の歳月が流れていますが、現在もこの商店街イベントは行われていると聞き及び、大変嬉しく感じています。機会がありましたら、是非深草商店街に足を運んでみて下さい。魅力盛りだくさんなお店と人が歓迎してくれますよ!

2011年度:『ボランティア入門講座』のボランティア体験先に
2011～2013年度:学生スタッフ企画として学内でボランティア募集して参加
2014年度:『プチふかくさ100円商店街』に学生スタッフ企画で参加



新聞紙スリッパ作りブース (2013 年度)



『ボランティア入門講座』ボランティア体験 (2011 年度)



ロン君とくまモンを紹介 (2012 年度)



ぬり絵ブース (2014 年度)

瀬田キャンパスにおいても、センター開設当初から続く最長ボランティア企画をはじめ、大津市内や滋賀県内で活動する体験企画を学生スタッフが提供してきました。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。ここでは、瀬田キャンパスの取り組みの一部と、関わった現役・卒業生スタッフの声をここで紹介します。

●丸屋町商店街との関わり

■2011年度社会学部卒業 伊藤 ゆかり(旧姓:笠間)

私は2009年度の『ナカマチ商店街夜市 in 丸屋町』で、学生スタッフと一緒に活動するボランティアを学内募集する企画のリーダーになりました。夜市に私たち龍大生が参加することによって地域貢献がしたい、そして他の学生が地域とつながるきっかけづくりをしたいという想いから、この企画に携わりました。

当日は大盛況!商店街の方からは、「若者の力は頼りになる」といった声が聞かれ、参加した学生からは、「地域の様々な世代の方と交流できた」という声が聞かれました。

私はこの企画を通して、人と人とのつながりの大切さを学ぶことができました。人と人が直接関わる機会が減少している世の中ですが、地域社会を守るためには人の力が必要だと改めて感じました。

みんなで意見を出し合い協力し、ひとつの企画を成功させた経験は、社会人になった今でも活かされていると感じています。

2004年度～：学生スタッフが『夜市』ボランティアをスタート

2006年度：秋の商店街イベントにも協力

2007～2012年度：

学内でのボランティア募集や、サークルにも呼びかけて夜市に参加

2013～2014年度：夜市の他、『大津100円商店街 in 丸屋町』にも参加



かき氷のブース(2010年度)



学内のよさこいサークルも協力(2013年度)



大津100円商店街 in 丸屋町(2014年度)

●大津市内の各種イベントでのボランティア

■2018年度理工学部卒業 仲上 昂希

私たちは、龍大生にボランティアへの興味・関心・理解を広め、やりがいを感じてもらうきっかけづくりとして、『こどものまちおおつ』というイベントへ協力参加するボランティア企画を立案しました。参加学生には「子どもたちと交流する」という活動の形を知ってもらえただけでなく、関わっておられた地域団体のみなさんとの交流を通して、「地域貢献できること」や「つながりを広げていけること」を知ってもらえたと感じました。また、企画メンバー自身も大学生ならではのアイデアをボランティアに活かせることや、主催者の方々とお話しする中で、ボランティアに対する考えをより深めることができたと思っています。

2015～2016年度：

『こどものまちおおつ』『子どもミュージアム in 石山商店街』に参加

2016年度：上記2イベントに加えて『大津ジャズフェスティバル』にも参加



子どもミュージアム in 石山商店街(2015年度)



こどものまちおおつ(2015年度)



大津ジャズフェスティバル(2016年度)

● 『防災・減災そなえパーク』へのブース出展

■ 2020年度農学部3年生 渡中 新太郎

1年生の通学時に大阪北部地震に遭遇し、駅にいて一人で何もすることができませんでした。その経験から、災害が起こった際にできることを周りの人達にも知ってもらいたいと思い、『防災・減災そなえパーク』にブース出展する企画長となりました。

このイベントへのボラセンの参加は、「瀬田のまちを知り、繋がりを深める」という趣旨の『コミュニティ企画』として継続してきましたが、これを機に「防災減災を考えること」を第一目的として進めることにしました。企画長として会議で企画提案を行いました。その練習をしなかったために提案は大失敗となり、私の根拠のない自信は崩壊しました。このことで事前の準備が大切だと学べたり、企画メンバーからも「もっと頼って」と言われたり、みんなに支えられているということにも気づきました。

2019年度のそなえパークは、コロナウイルスで中止になってしまい、私は人生で初めて悔し涙を流しました。ですが、それだけ本気で挑むことができたボランティア企画だったのだと思います。

2014年度～：『コミュニティ企画』の一環でブース出展などをスタート
2018年度：企画名や目的を変更し、本イベントへの参画に特化



防災バッグづくりのブース (2016年度)



復興支援活動や防災に関する展示 (2014年度)



学内でのボランティア募集活動 (2018年度)



災害時の簡易グッズを作る体験ブース (2018年度)

● 障がい者スポーツに関する企画

■ 2020年度理工学部4年生 中川 和謙

『ボランティア入門講座』でスペシャルオリンピックス (以下、スペオリ) の大会運営補助に参加したのが、初ボランティアでした。障がい者と関わるのも初めてで不安が大きかったですが、試合を見ていると競技が本当に上手で驚いたり、障がい者の方から話しかけてくださり、仲良くすることができました。私はこの活動を通して自分自身が障がい者との間に勝手に壁を作っていたことに気づき、障がいへの意識が少し変わりました。

そしてこの経験をきっかけに、他の学生にも障がい者と共にスポーツを楽しむ、障がいに対するイメージを変えてほしいと思うようになり、スペオリの企画メンバーになりました。企画を進めるにあたって一緒に話をする中で、私達が当たり前でできることが障がい者にとってはそうではないと気づき、相手の立場に立つことの大切さを実感しました。

2004年度：
『みんなでつくろう!!～スペシャルオリンピックストーチャラン滋賀INおおつ』に参加
2016年度：
『Enjoy! スポーツボランティア』
2017～2019年度：
『スペシャルオリンピックスを知ろう!』



みんなでつくろう!!～スペシャルオリンピックストーチャラン滋賀INおおつ (2004年度)



Enjoy! スポーツボランティア (2016年度)



スペシャルオリンピックスを知ろう! (2018年度)

●『くさつ子どもフェスタ』ボランティア

■2014年度国際文化学部卒業 歌藤 智弥

『くさつ子どもフェスタ』は、大人や子ども、地域の多くの方々から来ています。学生スタッフとして実行委員会の場にも出させて頂き、地域を作る方々の力強さを実感しました。大人も子どもも真剣に遊ぶ。草津のまちがいつの間にか好きになる。そんな子どもフェスタに魅了され、気づけば毎年参加していました。

ボランティアとして、『たび丸くん』というご当地キャラの着ぐるみに入りました。元気な子ども達に囲まれて、もみくちやにされました。

ボラセンの学生スタッフで考えた遊びのブースを作って、子ども達と遊びました。楽しんでくれている様子を見て、一安心。

地域の方に「おつかれさま」と声を掛けて頂いたり、仲良くなった子どもたちと「また来年ね!」と話したり。少しだけ地域の一員になったような気持ちになれるボランティアでした。

2006年度～：学生スタッフが活動
2009年度～2015年度：学内でのボランティア募集や、サークルにも呼びかけて参加



スリッパを使った遊びのブース(2011年度)

●『大津祭』ボランティア

■2019年度社会学部卒業 玉田 凌河

長く引き継いできた『大津祭ボランティア』の企画。大津の大学に通うのに大津祭を知らないのは勿体ない。そんな想いで関わり始め、以後3年に渡って活動を続けました。

祭を見る側から担い手側に回る、それだけで景色はガラリと変わります。観衆が混み合う道を堂々と歩き、囃子と掛け声が段々とヒートアップしていく。気づけば地域の方と一緒に声を出して息が合ってくる。大津祭ボランティア企画の参加者にリピーターが多いのは、祭の担い手としての一体感と高揚感に惹かれるからなのだと思います。

地域の方と同じ空間、同じ立場で活動することが、このボランティアの魅力の一つではないでしょうか。今後も龍谷大学生が地域とつながり魅力に気づくようなボランティア企画が続いて欲しいなと思います。

2004年度～：学生スタッフが活動
2008年度～：学内でボランティア募集
2011年度～：学内募集時のお囃子演奏や学生交流会館エキジビションで展示しながら広報
2020年度：社会情勢により大津祭中止。来年の募集に繋がる広報に取り組む



曳山ボランティア(2015年度)

■特定非営利活動法人 大津祭曳山連盟 理事長 元田 栄三

ボランティア・NPO活動センターが設立20周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。貴センターが20年もの間、様々な活動を通じ、学生スタッフの育成に尽力されてこられたことは、誠に意義深く敬意を表したいと思います。大津祭を通じて大津町衆とのふれあいや、歴史文化を体験いただけたことは、伝統を受継ぐ私たちにとって大変心強いものでございます。また、学内でPRを兼ねた祭囃子を実演したときには、学生の方々が気軽にお囃子体験に参加いただいたこと、私にとっても大変貴重な体験でした。今後も、私たち地域と一つになって共に活動できれば、この上ない喜びでございます。貴センターの益々のご発展を心よりご祈念申し上げ、お祝いのメッセージといたします。誠にありがとうございます。



観客警護ボランティア(2019年度)



宵宮ボランティア(2009年度)



学内広報時にお囃子演奏(2013年度)



学生交流会館での展示作業(2018年度)

これまで紹介した日常的なボランティアコーディネートや SNS などでの情報提供、ボランティア活動のきっかけとなる様々な企画など、学生スタッフが取り組んでいることは多岐に渡っています。そのためには、社会課題に対する意識を持ち、組織運営力、コーディネート力などの幅広い知識や経験が必要となってきます。学生スタッフは年間3回程度の合宿を通して、チーム作りや課題解決、次年度の取り組みなどを話し合ってきました。その合宿作りに関わった卒業生・現役学生スタッフの声と、両キャンパス代表の学生スタッフ活動に対する想いを紹介します。

● オリエンテーション合宿

■ 2015 年度政策学部卒業 星野 智子

100人規模が参加するオリエンテーション合宿の企画メンバーとして活動できたことは、私の大学生活の中でも貴重な経験でした。年度初めに実施するこの合宿は、経験値を持った先輩スタッフ、まだ知識の少ない新スタッフの両方にとって有意義である必要があり、ワークの内容を考えるのにとっても苦労しました。皆が趣旨目的を理解し、同じ方向を向いた状態で2日間を過ごせるようにするにはどうすれば良いかをただただ模索し続けていたように思います。様々な視点に立って、多角的に物事を考えることの難しさと、メンバーの知恵を振り絞ってワークを組み立てていく楽しさ、そこに夢中で取り組んでくれる参加スタッフの姿勢を見た時の達成感は今でも忘れられません。



2009 年度



2013 年度



2016 年度



2018 年度

● 夏合宿・春合宿

■ 2020 年度農学部3年生 大屋 晴太郎

私は1年生の時に夏合宿と春合宿を行い、あることを感じていました。それは、合宿を行っても日頃の活動に活かしきれていないということです。そこで、2年生では日々の活動において重要な「班・係」をテーマに、夏合宿を行いました。合宿では、新たな班構成案をつくることを目標に、班係の仕事内容を見直し、より円滑に活動するにはどうすればよいかを考えました。当日は学生スタッフの活発な議論により、意見をまとめるのに非常に苦労しました。結果的には全員が納得する形で新たな班構成案を作ることができました。合宿が終わった後も、この案を基に班係について考え、最終的には新しい班構成を作り上げることができました。これまででない形でしたが、学生スタッフのみならず、ボラセン全体で成長できた合宿になりました。



2019 年度瀬田夏合宿の様子



2011 年度瀬田春合宿の様子



2014 年度深草春合宿の様子



2017 年度深草夏合宿の様子

●深草キャンパス学生スタッフ 2020 年度代表

■ 2020 年度法学部 3 年生 世田 文貴

私にとってこのセンターの存在は一体どのようなものであろうか。学生スタッフとなって3年の歳月が流れようとしている今において、容易にその答えは考え付きません。

では、私とセンターとの関わりは、特別なものではなかったのだろうか。その答えは、「否」です。

それでもなお、最初の問いの答えが出てこないのは、このセンターの存在が私にとってあまりにも大きいからです。

私は、当初からボランティアに特別な興味や関心があったわけではありませんでした。大学生としてやりたいことを考えておらず、ただ居場所を求めていただけの私が、何故学生スタッフになったのか。それは、「偶然に」です。キャンパス内で、「新入生歓迎!」のパネルを持ったえんじ色のパーカー姿の人たちをたまたま見かけ、その時に感じた僅かな好奇心から、私は彼らの後を追っていききました。

その日を境に、私の見る世界は大きく変化しました。私は地域の行事に参加し、幅広い世代の人々と交流を持つことで、人の温かさや関わることの大切さを知りました。また、ボランティアを通じて、障がいを抱えている人や震災による心の傷を負っている人と接し、彼らの言葉や気持ちに触れました。さらに、龍谷祭に出展する企画責任者を務め、ボランティアの魅力をどう発信すべきかについて仲間と共に思考し、仲間がいる心強さと喜びに気付きました。そして私は代表となり、今日まで歩みを続けてきました。

学生スタッフとなった日が遠く感じる程、今日までの日々には大切な経験や出会いがたくさん詰まっています。もし「偶然に」がなければ…。今となっては想像もつきません。このセンターで学んだことや挑戦したことは、私の生涯においてかけがえのないものであると自信を持って言えます。考えなしにフラフラと彷徨っていた私が自らの可能性に気づき、それを発揮できる舞台となったこのセンターは、間違いなく私の「真の居場所」です。

過去 20 年の間にも、私と同じように思う学生スタッフはいただろうか。言うまでもなく、このセンターは多くの学生スタッフにとって必要不可欠な存在であったでしょう。

私にとってこのセンターは…。以上がその答えです。私たちの大切な居場所であるこのセンターが、この先 10 年、20 年と長く、遠い未来まで続いていくことを願っています。



●瀬田キャンパス学生スタッフ 2020 年度代表

■ 2020 年度社会学部 3 年生 東 里音

私にとってボラセンは、様々な経験を通して自分を成長させられる場所です。私がそう感じている理由を、少し紹介したいと思います。

まず、私がボラセンで活動を始めて、「企画」というものが何なのか、企画書とは何なのか分からなかった頃、先輩が根気よく教えて下さり、少しずつ経験を踏ませて頂きました。そうした体験を通して、自然と理解を深め、出来ることを増やし、後輩への引き継ぎ方を学んだように思います。ただ「こうするんだよ」とやり方を押し付けるのではなく、自分なりに伝えていけるような力をつけることができました。

次に、ミーティングや話し合いを通して、同じ物事でも、人によって見えている視点は違うこと、そうした様々な視点からの意見があることで物事の内容に深みが出ることを、体験を通して学びました。自分とは違う意見を聞くことで考え方の幅が広がり、見えるものが多くなったように思います。複数人での話し合いを面倒くさがることなく、楽しめるようになりました。

また、代表として前に立ち全体をまとめる経験もさせて頂きました。私が代表になって一番力がついたと感じる点は、コミュニケーション力です。学生スタッフ間の連携を取り、ちょっとした問題を早い段階で解決するため自ら行動することが増えたり、他大学との交流の機会でも積極的に関わる経験を重ねたりしたことが、力になったと思っています。実際に話してみることで、その人を知り、どうすればより様々なタイプの人意見を出しやすくなるのかなど、具体的に考えるようになりました。

さらに、ボラセンに集まる人は個性豊かで、そうした人達との交流はとても自分の刺激になり、新たな知識を得ることが出来ます。加えて、様々な人がファシリテーターをするミーティングに参加することで、多様なやり方を知り、自分なりの進め方を見つけることができました。

様々な経験は、それだけ自分の力になると私は思っています。そうした機会を多く得られる場所で、自分の成長を感じられるのが私にとってのボラセンです。これからは、後輩を後ろから支えつつ、自分もまだまだ経験を積んでいきたいと思っています。



第4章

元学生スタッフ／学生スタッフ「ボランティア」および、
「大学ボランティアセンター」に関する意識調査報告書

はじめに

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター（以下、本学センター）は、2001年に創設され、今年で20周年を迎えます。ここまでセンターを支えてくださった関係機関・団体、そして学内の教職員の皆さまに深く感謝申し上げます。

日本の大学・短大は現在1118校（文科省、令和2年度調査）ありますが、そのうち単独部署としてボランティアセンターが設置されているのは169カ所（2019年NPO法人ユースビジョン調べ）と、1割強にすぎません。大学によってセンターの設置形態や運営方法は様々ですが、本学センターの場合、多くの学生スタッフがセンター運営に参画してくれているのが特徴です。現在は、深草と瀬田の2センター合わせて約100名の学生スタッフが活動しています。広報活動や一般学生への相談対応（ボランティア紹介）に様々な工夫を凝らし、さらに、自分たちの関心・問題意識、あるいは地域からのニーズに応じて活動を企画・開発しています。このように、本学センターは、教員、職員（ボランティアコーディネーターと事務職員）、学生スタッフの3者の協働によって成り立っています。

そこで、センターが20周年を迎えるのを機に、過去に学生スタッフとして活動してくれた方（卒業生）と現役学生スタッフを対象に、意識調査を実施しました。ご協力くださった方々、ありがとうございました。また、本調査の設計段階から分析に至るまで、本学社会学部の工藤保則教授に丁寧にご指導いただきました。加えて、同学部の猪瀬優理准教授にも様々なアドバイスをいただきました。ここに深くお礼申し上げます。

本調査結果が、今後の学生のボランティア活動支援の一助になれば幸いです。

2021年1月

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター長
筒井 のり子

章目次

はじめに	55
1. 調査の概要と回答者の属性	56
2. 調査結果概要	56
3. 在籍期間を3つのグループに分けたことからの考察	59
4. 学生スタッフ活動における役職経験の有無からの考察	64
5. まとめ	68
資料（調査票・集計結果）	70

1. 調査の概要と回答者の属性

本調査は、大学内にボランティアセンターがあることの意義や学生時代のボランティア活動が進路に与える影響等を明らかにし、今後のボランティア・NPO活動センター運営に役立てると共に、大学ボランティアセンターの運営に関わる人たちにも役立てることを目的に実施した。

卒業生に対して、2020年1月8日(水)～1月29日(水)にかけて郵便で237通送付し、一部、本人の意向でメールにて2通送付した。結果113人より回答が得られた。在学生には、2020年2月3日(月)から3月13日(金)にかけて、センター来室時に配布しその場で記入する形で実施した。学生スタッフ131人のうち、68人より回答が得られた。卒業生と在学生を合わせると今回の調査回答者数は181人となる。

回答者の属性についてみると、性別は男性94人(51.9%)、女性86人(47.5%)、その他1人(0.6%)と、男性がわずかに多くなっている。また、出身・所属学部は社会学部が57人(31.5%)、法学部が33人(18.2%)、経済学部が20人(11.0%)と続く。卒業生の職業(業種)については、製造業やサービス業などの会社員が53人(46.9%)、団体職員が21人(18.6%)、公務員が14名(12.4%)と続いている。

図表1 回答者の属性(性別)

	度数	パーセント
男性	94	51.9
女性	86	47.5
その他	1	0.6
合計	181	100.0

図表2 回答者の属性(学部)

	度数	パーセント
文学	18	9.9
経済	20	11.0
経営	3	1.7
法学	33	18.2
理工	10	5.5
社会	57	31.5
国際/国際文化	14	7.7
政策	15	8.3
農学	8	4.4
短大	3	1.7
合計	181	100.0

図表3 回答者の属性(卒業生の職業)

	度数	パーセント
会社員	53	46.9
自営業	5	4.4
公務員	14	12.4
教員	5	4.4
団体職員	21	18.6
その他	7	6.2
無職	8	7.1
合計	113	100.0

2. 調査結果概要

(1) 充実度と学生スタッフ活動への興味関心割合

「あなたの大学生生活(学生生活全般で考えてください)の充実度を教えてください」「あなたの学生スタッフとしての生活(限定して)の充実度を教えてください」という2つの設問において、どちらも「充実していた」「どちらかと言えば充実していた」を合わせると90%を超えている。「あなたの学生生活における興味・関心を割合に例えると、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占める割合は何パーセントくらいですか」という設問において、0～100%で自由に記述してもらった。5%から100%と大きな開きがあるものの、平均値は57.1%となっており、学生生活における興味・関心の半分以上を学生スタッフ活動が占めていたことになる。

図表4 大学生生活(学生生活全般)の充実度

	度数	パーセント
充実していた	86	47.5
どちらかと言えば充実していた	83	45.9
どちらかと言えば充実していなかった	10	5.5
充実していなかった	2	1.1
合計	181	100.0

図表5 学生スタッフ生活の充実度

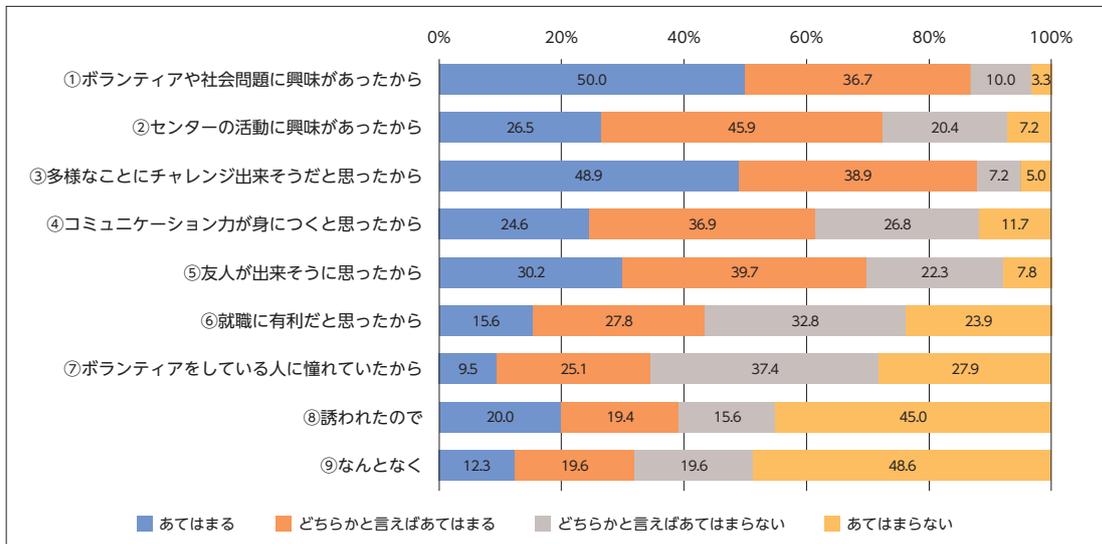
	度数	パーセント
充実していた	86	47.5
どちらかと言えば充実していた	82	45.3
どちらかと言えば充実していなかった	10	5.5
充実していなかった	3	1.7
合計	181	100.0

(2) 学生スタッフになった理由

図表6は、学生スタッフになった理由の9項目についての度数分布をグラフで表したものである。「学生スタッフになった理由は何ですか」という設問においては、「ボランティアや社会問題に興味があったから」「多様なことにチャレンジ出来そうだったから」という項目について、85%以上が「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答している。

また、「誘われたので」「なんとなく」に同様の回答をしているのは、40%以下となっている。つまり、何らかの期待を持って学生スタッフになっていることがわかる。「就職に有利だと思ったから」という項目については、73人(43.4%)が「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答している。

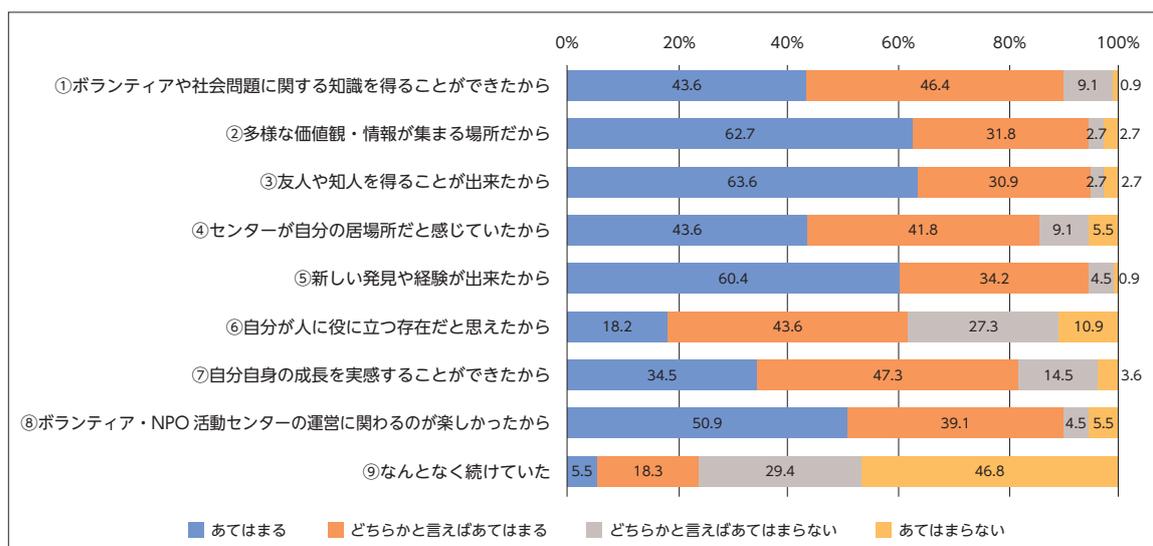
図表6 学生スタッフになった理由(n=181)



(3) 学生スタッフを継続した理由

図表7は、学生スタッフを継続した理由の9項目についての度数分布をグラフで表したものである。1年以上学生スタッフを続けた卒業生に対して行った「(学生スタッフを) 続けていた理由は何ですか」という設問において、「多様な価値観・情報が集まる場所だから」「友人や知人を得ることができたから」「新しい発見や経験ができたから」といった項目には、90%以上が「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答している。「なんとなく続けていた」に「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答したのは合わせて26人(23.8%)となり、最も低くなっている。なんとなくではなく、継続する理由を持って活動を継続していた学生スタッフが多い。

図表7 学生スタッフを継続した理由(n=110)

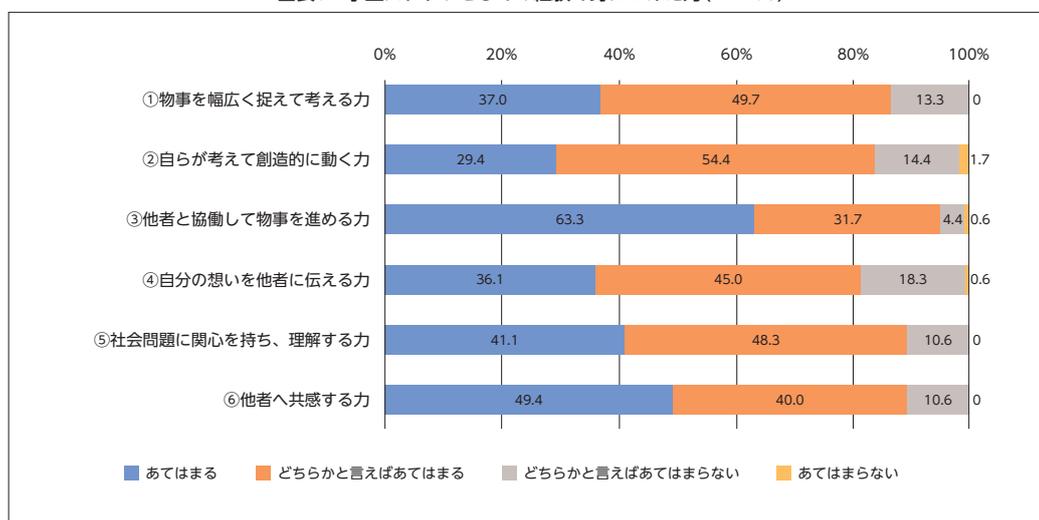


(4) 学生スタッフ経験から身につけた力

図表8は、学生スタッフ経験から身につけた力の6項目についての度数分布をグラフで表したものである。「学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力はなんですか」という設問において、「物事を幅広く捉えて考え

る力」「自らが考えて創造的に動く力」「他者と協働して物事を進める力」「自分の想いを他者に伝える力」「社会問題に関心を持ち、理解する力」「他者へ共感する力」の6項目の力について、自身が身につけたと思うかどうかを4段階で尋ねた。いずれの項目も80%以上が「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」と回答している。特に、「他者と協働して物事を進める力」については、114人(63.3%)が「あてはまる」と回答しており、「どちらかと言えばあてはまる」と合わせると171人(95.0%)が学生スタッフ経験を通して身につけたと思っている。

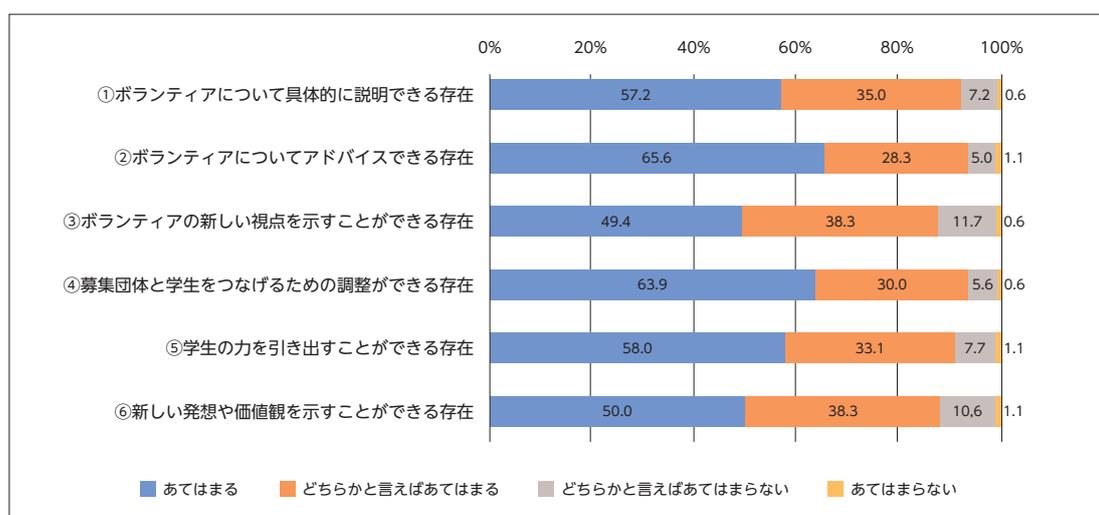
図表8 学生スタッフとしての経験で身につけた力(n=180)



(5) ボランティアコーディネーター(センター職員)の存在

図表9は、学生スタッフにとってのコーディネーターの存在の6項目についての度数分布をグラフで表したものである。「ボランティアコーディネーター(センター職員)はどんな存在でしたか」という設問において、「ボランティアについて具体的に説明できる存在」「ボランティアについてアドバイスできる存在」「ボランティアの新しい視点を示すことができる存在」「募集团体と学生をつなげるための調整ができる存在」「学生の力を引き出すことができる存在」「新しい発想や価値観を示すことができる存在」の6つの項目について4段階で尋ねた。どの項目もおおよそ50%以上が「あてはまる」と回答し、「どちらかと言えばあてはまる」を合わせると85%以上となる。

図表9 学生スタッフにとってのボランティアコーディネーターの存在(n=180)



(6) ボランティアセンターが大学内にある意義

「ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思えますか」という設問において、特に重要だと思えるものを5項

目から1つ選んでもらった。「学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること」が100人(55.2%)、次いで「学生が成長できる機会を提供すること」が40人(22.1%)、「学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること」が27人(14.9%)と続く。ボランティア参加のきっかけを提供することがセンターの主な存在意義として捉えられており、次に、学生の学びや成長の場としても捉えられていることがわかる。

図表10 ボランティアセンターが大学内にある意義

	度数	パーセント
①学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること	27	14.9
②ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること	7	3.9
③学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること	100	55.2
④学生が成長できる機会を提供すること	40	22.1
⑤学生の学内における居場所の1つとなること	7	3.9
合計	181	100.0

(7) 学生時代のボランティア活動

「学生スタッフ以外(学生スタッフ企画やセンター事業を除く)でもボランティア活動を行っていましたか」の設問において、「定期的に参加」は52人(28.9%)、「単発的な活動に参加」では95人(52.8%)となり、147人(81.7%)が何らかのボランティア活動を行っていることがわかる。参加しているボランティア活動の半数以上は、単発的な活動となっている。

図表11 学生時代のボランティア活動

	度数	パーセント	有効パーセント
定期的に参加	52	28.7	28.9
単発的な活動に参加	95	52.5	52.8
全くしていない	33	18.2	18.3
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

(8) 卒業後のボランティア活動について

卒業生のみ、卒業後のボランティア活動への参加状況について質問した。卒業生のうちの76人(67.3%)が、「興味はあるが活動していない」と回答している。しかし、31人(27.4%)が何らかの形でボランティア活動への参加をしており、「興味がなく活動していない」が6人(5.3%)と最も少なかった。活動分野については、障がい児・者、まちづくり、子ども・青少年関連が多くなっている。「ボランティア活動への参加の妨げとなることはありますか(複数回答可)」という設問では、「日々の忙しさ」を96人(85.0%)が選択している。

図表12 卒業後のボランティア活動参加状況

	度数	パーセント
継続的に活動している	8	7.1
時々、活動している	23	20.3
興味はあるが活動していない	76	67.3
興味がなく活動していない	6	5.3
合計	113	100.0

図表13 ボランティア活動への参加の妨げとなる要因(複数回答)

	度数
①ボランティア活動に関する情報の不足	28
②参加する際の経費(交通費等)の負担	14
③日々の忙しさ	96
④心のゆとりがない	40
⑤一緒に参加する仲間の不在	21
⑥身近なところで活動するところがない	16
⑦その他	5
合計	220

3. 在籍時期を3つのグループに分けたことからの考察

ここでは、2002年～2011年度卒(以下卒業生A:29人)、2012年～2018年度卒(以下卒業生B:84人)と在学生(以下在校生:68人)という3つのグループに分けて検討した。

卒業生を2つのグループに分けた根拠は2つある。まず、2011年3月に発生した東日本大震災である。これは、社

会的にとってもインパクトが大きく、2012年以降はその影響を強く受けている可能性がある。次に、職員の配置体制の変化である。各キャンパスのコーディネーターの配置は1名体制であったが、2008年度からそれぞれ2名の配置体制となった。しかし、職員の入れ替わりや不在期間などがあり、実質的には2009年度から配置が安定した。その安定した2009年度に入学し、配置体制の変化による影響を強く受けている可能性があるのが2012年度の卒業生以降となる。よって、この二つの根拠となる出来事の前後で卒業生を2つに分けることとした。センターに在籍していた時期による意識の差についてみていく。

(1) 大学生生活の充実度と学生スタッフとしての生活の充実度

大学生生活の充実度について「あなたの大学生生活（学生生活全般で考えてください）の充実度を教えてください」「あなたの学生スタッフとしての生活（限定して）の充実度を教えてください」という2つの設問をした。どちらの設問も「充実していた」「どちらかと言えば充実していた」を合わせると卒業生A・卒業生B・在学生共に85%を超えている。ただし、その内訳をみていくと、卒業生はどちらも「充実していた」が50%を超えるのに対し、在学生は「どちらかと言えば充実している」が50%を超える。これは、卒業生は学生生活が完了しているのに対し、在学生は学生生活が進行中であることが影響していると考えられる。

図表14 大学生生活(学生生活全般)の充実度

		充実していた	どちらかと言えば充実していた	どちらかと言えば充実していなかった	充実していなかった	合計
卒業生 A	度数	16	13	0	0	29
	(2002-2011 卒) %	55.2%	44.8%	0.0%	0.0%	100.0%
卒業生 B	度数	44	36	2	2	84
	(2012-2018 卒) %	52.4%	42.9%	2.4%	2.4%	100.0%
在学生	度数	26	34	8	0	68
	%	38.2%	50.0%	11.8%	0.0%	100.0%
合計	度数	86	83	10	2	181
	%	47.5%	45.9%	5.5%	1.1%	100.0%

p < .05

図表15 学生スタッフ生活の充実度

		充実していた	どちらかと言えば充実していた	どちらかと言えば充実していなかった	充実していなかった	合計
卒業生 A	度数	16	10	3	0	29
	(2002-2011 卒) %	55.2%	34.5%	10.3%	0.0%	100.0%
卒業生 B	度数	45	35	3	1	84
	(2012-2018 卒) %	53.6%	41.7%	2.6%	1.2%	100.0%
在学生	度数	25	37	4	2	68
	%	36.8%	54.4%	5.9%	2.9%	100.0%
合計	度数	86	82	10	3	181
	%	47.5%	45.3%	5.5%	1.7%	100.0%

p < .05

(2) 学生スタッフになった理由

「学生スタッフになった理由は何ですか」という設問において、卒業生Aは、「ボランティアや社会問題に興味があったから」「センターの活動に興味があったから」等、行動の基準が外向的な理由に「あてはまる」との回答が多くなっている。卒業生B・在学生は、「コミュニケーション力が身につくと思ったから」「友人が出来そうに思ったから」「就職に有利だと思ったから」等、行動の基準が内向的な理由に「あてはまる」と回答する傾向がみられた。

「ボランティアや社会問題に興味があったから」は、卒業生Aは23人(79.3%)と高い比率であるのに対し、卒業生Bは36人(43.4%)、在学生は31人(45.6%)となっている。卒業生Bと在学生は、「どちらかと言えばあてはまる」の回答が多くなっており、有意差があるとまではいえないが、ボランティアや社会問題への興味関心の度合いに強弱が表れている。

「就職に有利だと思ったから」をみると、「あてはまる」と回答しているのは、卒業生A:2人(6.9%)、卒業生B:14人(16.9%)、在学生:12人(17.6%)となっている。「どちらかと言えばあてはまる」も合わせると在学生は37人(54.4%)

と50%を越える。逆に、「あてはまらない」と回答しているのは、卒業生Aが13人(44.8%)と突出しており、卒業生Bは20人(24.1%)、在學生は10人(14.7%)となっている。

図表16 学生スタッフになった理由:ボランティアや社会問題に興味があったから

		あてはまる	どちらかと言えばあてはまる	どちらかと言えばあてはまらない	あてはまらない	合計
卒業生 A	度数	23	5	1	0	29
(2002-2011 卒)	%	79.3%	17.2%	3.4%	0.0%	100.0%
卒業生 B	度数	36	34	10	3	83
(2012-2018 卒)	%	43.4%	41.0%	12.0%	3.6%	100.0%
在學生	度数	31	27	7	3	68
	%	45.6%	39.7%	10.3%	4.4%	100.0%
合計	度数	90	66	18	6	180
	%	50.0%	36.7%	10.0%	3.3%	100.0%

p < .05

図表17 学生スタッフになった理由:就職に有利だと思ったから

		あてはまる	どちらかと言えばあてはまる	どちらかと言えばあてはまらない	あてはまらない	合計
卒業生 A	度数	2	5	9	13	29
(2002-2011 卒)	%	6.9%	17.2%	31.0%	44.8%	100.0%
卒業生 B	度数	14	20	29	20	83
(2012-2018 卒)	%	16.9%	24.1%	34.9%	24.1%	100.0%
在學生	度数	12	25	21	10	68
	%	17.6%	36.8%	30.9%	14.7%	100.0%
合計	度数	28	50	59	43	180
	%	15.6%	27.8%	32.8%	23.9%	100.0%

p < .05

(3) 進路選択への影響

「学生スタッフであること(をしていたこと)は、あなたの進路選択に影響を与えますか(与えましたか)」という設問において、「影響がある(あった)」「どちらかと言えば影響がある(あった)」を合わせると、卒業生A:19人(65.5%)、卒業生B:57人(69.5%)、在學生:54人(79.4%)であった。

図表18 学生スタッフ経験の進路選択への影響

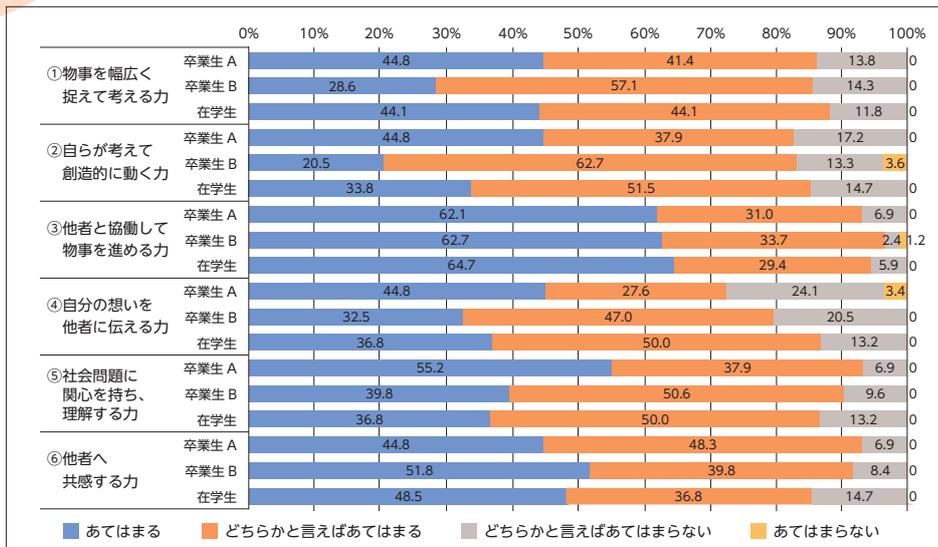
		影響があった	どちらかと言えば影響があった	どちらかと言えば影響がなかった	影響はなかった	合計
卒業生 A	度数	11	8	5	5	29
(2002-2011 卒)	%	37.9%	27.6%	17.2%	17.2%	100.0%
卒業生 B	度数	25	32	16	9	82
(2012-2018 卒)	%	30.5%	39.0%	19.5%	11.0%	100.0%
在學生	度数	18	36	12	2	68
	%	26.5%	52.9%	17.6%	2.9%	100.0%
合計	度数	54	76	33	16	179
	%	30.2%	42.5%	18.4%	8.9%	100.0%

p < .05

(4) 学生スタッフとしての経験を通して身につけた力

図表19は、学生スタッフとしての経験を通して身につけたと思える力の6項目についてのクロス集計結果をグラフで表したものである。「学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力は何ですか」という設問において、「物事を幅広く捉えて考える力」「自らが考えて創造的に動く力」「他者と協働して物事を進める力」「自分の想いを他者に伝える力」「社会問題に関心を持ち、理解する力」「他者へ共感する力」の6項目について自身が身につけたと思うかどうかを4段階で尋ねた。6項目全てにおいて、卒業生A・卒業生B・在學生のどれもが、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」を合わせると、概ね80%を超える。その中でも「他者と協働して物事を進める力」については、卒業生A・卒業生B・在學生共に90%を越えている。学生スタッフとしての活動では常に、他者と協働して活動を進めていくことが求められるため、身につけたと実感しやすいのだと考えられる。

図表19 学生スタッフとしての経験で身につけた力(n=181)



(5) ボランティアコーディネーターの存在

「あなたにとって、ボランティアコーディネーターはどのような存在でしたか（ですか）」という設問においては、「ボランティアについて具体的に説明できる存在」「ボランティアについてアドバイスできる存在」「ボランティアの新しい視点を示すことができる存在」「募集团体と学生をつなげるための調整ができる存在」「学生の力を引き出すことができる存在」「新しい発想や価値観を示すことができる存在」の6つの項目について4段階で尋ねた。全ての項目において、卒業生A・卒業生B・在学生共に「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」を合わせると概ね80%を超えている。

「募集团体と学生をつなげるための調整ができる存在」は、卒業生Aが22人(75.9%)と最も高い割合で「あてはまる」と回答している。それ以外の5項目については、在学生が最も高い割合で「あてはまる」と回答している。特に、「ボランティアの新しい視点を示すことができる存在」は、卒業生A:10人(34.5%)、卒業生B:38人(45.8%)、在学生:41人(60.3%)、「新しい発想や価値観を示すことができる存在」は、卒業生A:11人(37.9%)、卒業生B:39人(47.0%)、在学生:40人(58.8%)が「あてはまる」と回答している。これらは、カイ2乗検定の結果からも有意な差がみられる。一方、調整することはコーディネーターとしての最も基本的な役割であり、センター設立初期の頃に学生スタッフとして

図表20 ボランティアコーディネーターの存在:ボランティアの新しい視点を示すことができる存在

	あてはまる	どちらかと言えばあてはまる	どちらかと言えばあてはまらない	あてはまらない	合計
卒業生 A 度数	10	13	5	1	29
(2002-2011 卒) %	34.5%	44.8%	17.2%	3.4%	100.0%
卒業生 B 度数	38	32	13	0	83
(2012-2018 卒) %	45.8%	38.6%	15.7%	0.0%	100.0%
在学生 度数	41	24	3	0	68
%	60.3%	35.3%	4.4%	0.0%	100.0%
合計 度数	89	69	21	1	180
%	49.4%	38.3%	11.7%	0.6%	100.0%

p < .05

図表21 ボランティアコーディネーターの存在:新しい発想や価値観を示すことができる存在

	あてはまる	どちらかと言えばあてはまる	どちらかと言えばあてはまらない	あてはまらない	合計
卒業生 A 度数	11	13	4	1	29
(2002-2011 卒) %	37.9%	44.8%	13.8%	3.4%	100.0%
卒業生 B 度数	39	29	14	1	83
(2012-2018 卒) %	47.0%	34.9%	16.9%	1.2%	100.0%
在学生 度数	40	27	1	0	68
%	58.8%	39.7%	1.5%	0.0%	100.0%
合計 度数	90	69	19	2	180
%	50.0%	38.3%	10.6%	1.1%	100.0%

p < .05

過ぎた卒業生 A には、調整の役割が印象に残っていることがわかる。

(6) ボランティアセンターが大学内にある意義

「ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思いますか」という設問においては、「学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること」が卒業生 A: 16人 (55.2%)、卒業生 B: 48人 (57.1%)、在学生: 36人 (52.9%) と卒業生 A・卒業生 B・在学生共通して50%を超えている。

図表22 ボランティアセンターが大学内にある意義

		学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること	ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること	学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること	学生が成長できる機会を提供すること	学生の学内における居場所の1つとなること	合計
卒業生 A	度数	4	2	16	6	1	29
(2002-2011 卒)	%	13.8%	6.9%	55.2%	20.7%	3.4%	100.0%
卒業生 B	度数	12	1	48	21	2	84
(2012-2018 卒)	%	14.3%	1.2%	57.1%	25.0%	2.4%	100.0%
在学生	度数	11	4	36	13	4	68
	%	16.2%	5.9%	52.9%	19.1%	5.9%	100.0%
合計	度数	27	7	100	40	7	181
	%	14.9%	3.9%	55.2%	22.1%	3.9%	100.0%

(7) 学生スタッフ活動以外でのボランティア活動

「学生スタッフ以外（学生スタッフ企画やセンター事業を除く）でもボランティア活動を行っていますか（行っていましたが）」の設問において、「定期的に参加」は卒業生 A:16人 (55.2%)、卒業生 B:24人 (28.9%)、在学生:12人 (17.6%) となり、卒業生 Aのみ、50%を超えている。「単発的な活動に参加」は卒業生 A:11人 (37.9%)、卒業生 B:42人 (50.6%)、在学生:42人 (61.8%) となり、卒業生 Bと在学生は、単発的な活動への参加が多くなっている。「定期的に参加」「単発的な活動に参加」を合わせると卒業生 Aは90%以上、卒業生 B・在学生も80%近くが学生スタッフ以外でもボランティア活動を行っていることがわかる。

図表23 学生スタッフ活動以外でのボランティア活動参加状況

		定期的に参加	単発的な活動に参加	全く参加していない	合計
卒業生 A	度数	16	11	2	29
(2002-2011 卒)	%	55.2%	37.9%	6.9%	100.0%
卒業生 B	度数	24	42	17	83
(2012-2018 卒)	%	28.9%	50.6%	20.5%	100.0%
在学生	度数	12	42	14	68
	%	17.6%	61.8%	20.6%	100.0%
合計	度数	52	95	33	180
	%	28.9%	52.8%	18.3%	100.0%

p < .05

(8) 卒業後のボランティア活動

「卒業後もボランティア活動に参加していますか」という設問において最も多かった回答は、「興味はあるが活動していない」で、卒業生 A:17人 (58.6%)、卒業生 B:59人 (70.2%) であった。一方、「継続的に活動している」「時々、活動している」を合わせると卒業生 A:10人 (34.4%)、卒業生 B:21人 (25.0%) と、ボランティア活動をしている卒業生は、一定数存在する。

図表24 卒業後のボランティア活動参加状況

		継続的に活動している	時々、活動している	興味はあるが活動していない	興味がなく活動していない	合計
卒業生 A	度数	3	7	17	2	29
(2002-2011 卒)	%	10.3%	24.1%	58.6%	6.9%	100.0%
卒業生 B	度数	5	16	59	4	84
(2012-2018 卒)	%	6.0%	19.0%	70.2%	4.8%	100.0%
合計	度数	6	23	76	6	113
	%	7.1%	20.4%	67.3%	5.3%	100.0%

2012年度卒業以降の学生スタッフは東日本大震災による影響を大きく受けていると考えていたが、今回の調査・分析ではその影響は特別みられず、学生スタッフの在籍時期による大きな意識の差はみられなかった。特に、学生スタッフ経験を通して身につけたと思う力は、この20年間を通して大きく変化していないということがわかった。

一方、「あなたにとって、ボランティアコーディネーターはどのような存在でしたか（ですか）」という設問において職員の配置体制による影響があることが分かった。特に卒業生Aや卒業生Bよりも、在学生在がほとんどの項目で「あてはまる」と回答している割合が高いことを先に述べた。新しい視点や価値観を示すといった点においては、在学生在が卒業生よりもコーディネーターの役割として認識している割合が高かった。これは、コーディネーターが学生スタッフに対して、学生スタッフとは異なる視点も伝え、アドバイスを行っていることが、在学生在に響いているからであり、コーディネーターの配置が充実したことによる結果だといえる。

4. 学生スタッフ活動における役職経験の有無からの考察

学生スタッフの役職とは、代表、副代表、学年代表、班長、企画長が主なものとなる。代表と副代表は、学生スタッフの代表としてセンター委員会にオブザーバー参加するとともに、学生スタッフの様々な意見の取りまとめ、コーディネーターと学生スタッフの架け橋としての役割を担っている。学年代表はその学年の代表として先輩やコーディネーターとのやり取りや学年の意見の取りまとめを担う。班長や企画長は、担当する各会議の進行や、会議における企画提案や報告などの役割を担うことが多い。学生スタッフの取り組みは、学生スタッフ間で協力して実施するものの、コーディネーターとの情報共有や相談はその役割から、役職のある学生スタッフと行うことが必然的に多くなる。つまり、役職のある学生スタッフは、職員や学生スタッフとより多くのコミュニケーションを取ることとなり、その過程においてより深く進行中の取り組みについての意義や進捗などを考える機会が多くなっている。こうしたことから、役職経験の有無による意識の差についてみていく。

(1) 進路選択への影響

「学生スタッフであること（をしていたこと）は、あなたの進路選択に影響を与えますか（与えましたか）」という設問において、役職経験者の40人（42.1%）が「影響がある（あった）」、37人（38.9%）が「どちらかと言えば影響がある（あった）」と回答しており、その合計は77人（81.0%）となった。一方、役職未経験者が「影響がある（あった）」と回答したのは13人（15.9%）、「どちらかと言えば影響がある（あった）」を合わせても51人（62.2%）にとどまる。進路選択への影響について、役職経験の有無による差は、カイ2乗検定の結果から有意であることがわかる。役職経験は、学生スタッフにとって進路に対して与える影響がより大きいということがいえる。

図表25 学生スタッフ経験の進路選択への影響

		影響があった	どちらかと言えば 影響があった	どちらかと言えば 影響がなかった	影響はなかった	合計
役職経験あり	度数	40	37	14	4	95
	%	42.1%	38.9%	14.7%	4.2%	100.0%
役職経験なし	度数	13	38	19	12	82
	%	15.9%	46.3%	23.2%	14.6%	100.0%
合計	度数	53	75	33	16	177
	%	29.9%	42.4%	18.6%	9.0%	100.0%

p < .05

(2) 大学生生活の充実度と学生スタッフとしての生活の充実度

「あなたの大学生生活（学生生活全般で考えてください）の充実度を教えてください」という設問において、役職経験の有無による大きな差はみられない。一方、「あなたの学生スタッフとしての生活（限定して）の充実度を教えてください」という設問においては、役職経験者は「充実していた」「どちらかと言えば充実していた」の合計が97人（100%）、役職未経験者はその合計が69人（84.2%）という結果であった。その中でも、「充実していた」という回答のみをみると、役職経験者は56人（57.7%）、役職未経験者は30人（36.6%）という結果である。

図表26 大学生生活(学生生活全般)の充実度

		充実していた	どちらかと言えば 充実していた	どちらかと言えば 充実していなかった	充実していなかった	合計
役職経験あり	度数	47	46	3	1	97
	%	48.5%	47.4%	3.1%	1.0%	100.0%
役職経験なし	度数	38	37	6	1	82
	%	46.3%	45.1%	7.3%	1.2%	100.0%
合計	度数	85	83	9	2	179
	%	47.5%	46.4%	5.0%	1.1%	100.0%

p < .05

図表27 学生スタッフ生活の充実度

		充実していた	どちらかと言えば 充実していた	どちらかと言えば 充実していなかった	充実していなかった	合計
役職経験あり	度数	56	41	0	0	97
	%	57.7%	42.3%	0.0%	0.0%	100.0%
役職経験なし	度数	30	39	10	3	82
	%	36.6%	47.6%	12.2%	3.7%	100.0%
合計	度数	86	80	10	3	179
	%	48.0%	44.7%	5.6%	1.7%	100.0%

p < .05

また、「あなたの学生生活の中で、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占めた割合は何%くらいでしたか」という設問において、0～100%で回答を求めた結果、役職経験がある学生スタッフの平均値は66.9%、最頻値は80.0%であったのに対し、役職経験がない学生スタッフの平均値は約45.5%、最頻値は30.0%と、大きな差がみられた。

つまり役職経験者ほど、センターでの活動に多くの時間を割き、学生スタッフ生活が充実しているということであり、活動時間の長さ、役職経験、充実度については関係があるといえる。

図表28 学生生活において学生スタッフ活動が占める割合(平均値・中央値・最頻値)

	役職経験あり	役職経験なし
度数	97	82
平均値	66.9	45.5
中央値	70.0	50.0
最頻値	80.0	30.0
合計	6491.0	3727.5

(3) 学生スタッフになった理由

「学生スタッフになった理由は何ですか」という設問において、役職経験の有無による差はあまりみられない。その中で、カイ2乗検定の結果、有意な差があったのは、「ボランティアや社会問題に興味があったから」の1項目である。「ボランティアや社会問題に興味があったから」については、役職経験者は57人(59.4%)、役職未経験者は32人(39.0%)が「あてはまる」と回答しており、その両者に20%以上の差がある。

図表29 学生スタッフになった理由:ボランティアや社会問題に興味があったから

		あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない	合計
役職経験あり	度数	57	27	11	1	96
	%	59.4%	28.1%	11.5%	1.0%	100.0%
役職経験なし	度数	32	38	7	5	82
	%	39.0%	46.3%	8.5%	6.1%	100.0%
合計	度数	89	65	18	6	178
	%	50.0%	36.5%	10.1%	3.4%	100.0%

p < .05

(4) 学生スタッフとしての経験を通して身につけた力

「学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力は何ですか」という設問において、「物事を幅広く捉えて考える力」「自らが考えて創造的に動く力」「他者と協働して物事を進める力」「自分の想いを他者に伝える力」「社

会問題に関心を持ち、理解する力」「他者へ共感する力」の6項目について自身が身につけたと思うかどうかを4段階で尋ねた。どの項目も「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」の合計が75%を上回っている。役職経験者はすべての項目において、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」の合計の割合が役職未経験者より高くなる。

特に大きな差がみられるのは、「物事を幅広く捉えて考える力」と「社会問題に関心を持ち、理解する力」の2項目である。「物事を幅広く捉えて考える力」は、役職経験者は「あてはまる」が43人(44.3%)、役職未経験者は23人(28.0%)となっている。また、「社会問題に関心を持ち、理解する力」は、役職経験者は48人(50.0%)、役職未経験者は25人(30.5%)であった。一方、「他者と協働して物事を進める力」については、役職経験の有無による差がほとんどなく、全項目の中でもっとも「あてはまる」と回答している割合が高い。学生スタッフは、学生スタッフ同士での協働はもちろんのこと、大学の教職員や一般学生、そして地域の方とも連携して活動しており、その結果が表れている。

図表30 学生スタッフとしての経験で身につけた力:物事を幅広く捉えて考える力

		あてはまる	どちらかと言えばあてはまる	どちらかと言えばあてはまらない	あてはまらない	合計
役職経験あり	度数	43	47	7	0	97
	%	44.3%	48.5%	7.2%	0.0%	100.0%
役職経験なし	度数	23	42	17	0	82
	%	28.0%	51.2%	20.7%	0.0%	100.0%
合計	度数	66	89	24	0	179
	%	36.9%	49.7%	13.4%	0.0%	100.0%

p < .05

図表31 学生スタッフとしての経験で身につけた力:社会問題に関心を持ち、理解する力

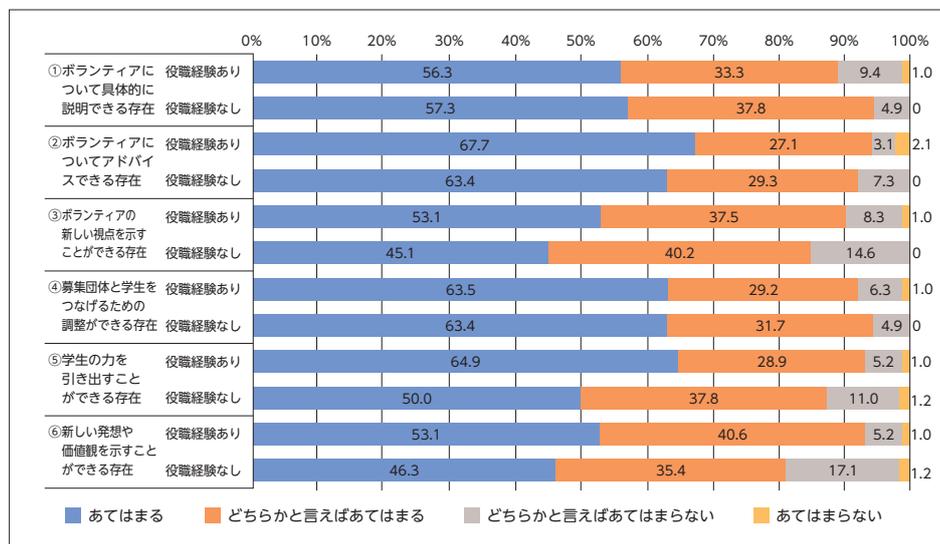
		あてはまる	どちらかと言えばあてはまる	どちらかと言えばあてはまらない	あてはまらない	合計
役職経験あり	度数	48	42	6	0	96
	%	50.0%	43.8%	6.3%	0.0%	100.0%
役職経験なし	度数	25	44	13	0	82
	%	30.5%	53.7%	15.9%	0.0%	100.0%
合計	度数	73	86	19	0	178
	%	41.0%	48.3%	10.7%	0.0%	100.0%

p < .05

(5) ボランティアコーディネーターの存在

図表32は、「あなたにとって、ボランティアコーディネーターはどのような存在でしたか(ですか)」の設問の各項目のクロス集計結果をグラフにしたものである。「あなたにとって、ボランティアコーディネーターはどのような存在でしたか(ですか)」という設問においては、「ボランティアについて具体的に説明できる存在」「ボランティアについてアドバイスできる存在」「ボランティアの新しい視点を示すことができる存在」「募集団体と学生をつなげるための調整ができる存在」「学生の力を引き出すことができる存在」「新しい発想や価値観を示すことができる存在」

図表32 学生スタッフにとってのコーディネーターの存在(n=179)



「学生の力を引き出すことができる存在」「新しい発想や価値観を示すことができる存在」の6つの項目について4段階で尋ねた。どの項目も「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」の合計が80%を超え、役職経験の有無による大きな差はみられない。

(6) ボランティアセンターが大学内にある意義

「ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思いますか」という設問に関しては、役職経験の有無による大きな違いはみられず、「学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること」という回答が役職経験者は47人(48.5%)、役職未経験者は51人(62.2%)と最も多い。ボランティア・NPO活動センターは、教職員と学生スタッフが協働で運営し、本学のボランティア活動を推進する場である。学生スタッフがその役割を認識しているといえる。

図表33 ボランティアセンターが大学内にある意義

		学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること	ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること	学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること	学生が成長できる機会を提供すること	学生の学内における居場所の1つとなること	合計
役職経験あり	度数	16	6	47	24	4	97
	%	16.5%	6.2%	48.5%	24.7%	4.1%	100.0%
役職経験なし	度数	11	1	51	16	3	82
	%	13.4%	1.2%	62.2%	19.5%	3.7%	100.0%
合計	度数	27	7	98	40	7	179
	%	15.1%	3.9%	54.7%	22.3%	3.9%	100.0%

(7) 学生スタッフ活動以外でのボランティア活動

「学生スタッフ以外(学生スタッフ企画やセンター事業を除く)でもボランティア活動を行っていますか(行っていましたが)」という設問について、「定期的に参加」「単発的な活動に参加」を合わせると役職経験者は87人(89.7%)に対し、役職未経験者は58人(71.6%)であった。役職経験者の方が、より積極的にボランティア活動に参加していることがわかる。

図表34 学生スタッフ活動以外でのボランティア活動参加状況

		定期的に参加	単発的な活動に参加	全く参加していない	合計
役職経験あり	度数	33	54	10	97
	%	34.0%	55.7%	10.3%	100.0%
役職経験なし	度数	19	39	23	81
	%	23.5%	48.1%	28.4%	100.0%
合計	度数	52	93	33	178
	%	29.2%	52.2%	18.5%	100.0%

p < .05

立候補や推薦など、役職に就くきっかけは人により異なる。また、役職を担うのは、最大で4年間の学生スタッフ活動の中でも、1年あるかどうかという短い期間である。その中で、役職経験者は、役職未経験者より学生スタッフの経験により身につけた力について、高い割合で「あてはまる」と回答していた。これは、役職経験そのものが、彼らの成長を促しているといえる。また、「就職に有利だと思ったから」という理由で学生スタッフになったと回答している学生は、役職経験の有無にかかわらず40%程度にとどまっている。一方、「学生スタッフをしていたことは、あなたの進路選択に影響を与えましたか」という設問の回答は、「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」を合わせると役職経験者は77人(81.0%)、役職未経験者は51人(62.2%)となる。はじめから就職を意識していたのではなく、学生スタッフとしての活動、さらには役職を経験したことが自身の成長につながり、進路選択にも影響しているといえる。

5. まとめ

今回、龍谷大学ボランティア・NPO活動センター設立20周年を迎えるにあたり、初めて、卒業生と在学生在を対象に、ボランティアおよび大学ボランティアセンターに関する意識調査を実施した。単純集計に加え、在籍時期を3つのグループ(卒業生A・卒業生B・在在学生)にわけて行ったクロス集計と、学生スタッフとしての役職経験の有無によるクロス集計を行い、その意識の差についてみてきた。

調査前は、在籍時期で比較すれば大きな意識の差がみられると予測していたが、比較の結果、大きな意識の差はみられず、共通する部分が多いということがわかった。しかし、「学生スタッフになった理由は何ですか」と「あなたの大学生活(学生生活全般で考えてください)の充実度を教えてください」という2つの設問で、卒業生と在在学生にはっきりとした差が出たことは特徴的であった。

「学生スタッフになった理由は何ですか」という設問では、卒業生Aは、「ボランティアや社会問題に興味があったから」等の外向的関心に関する項目に「あてはまる」と回答する割合が高いのに対し、卒業生Bと在在学生では「あてはまる」が50%を下回り、「どちらかと言えばあてはまる」と回答する割合が増える。また、卒業生B、在学生の順で「就職に有利だと思ったから」等の内向的関心に「あてはまる」と回答する人が増える傾向にあった。逆に、「就職に有利だと思ったから」については、卒業生Aは「あてはまらない」が40%を超えていることから、価値観の相違がみられる。

「あなたの大学生活(学生生活全般で考えてください)の充実度を教えてください」という設問では、卒業生A・B共に「充実していた」と言い切る人が50%を超えるのに対し、在學生は「どちらかと言えば充実している」が50%を超える。これは、卒業し、学生生活を終了している立場と在學生で現在学生生活を送っている環境による差ではないかと考えられる。

一方、役職経験の有無を比較してわかったことは、役職経験者は、役職未経験者よりも、ほとんどの設問において肯定的に捉えた回答が多いことである。「あなたの学生スタッフとしての生活(限定して)の充実度を教えてください」という設問において、役職経験者は56人(57.7%)、役職未経験者は30人(36.6%)が「あてはまる」と回答した。「あなたの大学生活の中で、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占めた割合は何%くらいでしたか」という設問において、0～100%で回答を求めた結果、役職経験者の平均値は66.9%、最頻値は80.0%であったのに対し、役職未経験者の平均値は約45.4%、最頻値は30.0%であった。役職経験をするということは、メンバーを統括し、会議での進行や発言などより多くの経験をすることである。必然的に活動時間も長く、充実度も増すことにつながっていると考えられる。加えて、役職経験者はその役割上、コーディネーターとコミュニケーションをとる機会が多くなる。その経験が、役職経験者の学生スタッフ生活をより充実したものにしている要因の一つだと考えられる。また、役職経験者がより積極的にボランティア活動に参加していることも大きな特徴である。役職経験は、学生をエンパワメントし、何事に対しても積極性を生み出すのだと考えられる。

次に、他の調査と比較してみたい。2017年に日本財団学生ボランティアセンター(Gakuvo)が実施した「全国学生1万人～ボランティアに関する意識調査～」注1)の結果をみると、調査前1年間でボランティア活動に参加したと回答したのは、27.1%であった。時期が少しずれるが、本調査での「在學生」のボランティア活動の参加率は「定期的に参加」「単発的な活動に参加」を合わせると79.4%である。学生全体への調査と比較すると、学生スタッフのボランティア活動の参加率は高いことがわかる。

また、本調査における卒業後のボランティア活動への参加率は27.4%であった。学生時代のボランティア活動への参加率と比較するとかなり低い割合となる。この結果についてもう少し掘り下げて考察するために、内閣府が2019年に実施した「市民の社会貢献に関する実態調査」注2)で2018年1月～12月の1年間のボランティア活動経験の有無を調査した結果と比較してみた。調査結果によると、ボランティア経験有と回答したのは、20代が17.0%、30代が11.8%であった。同世代のボランティア参加率と比べると、元学生スタッフの卒業後のボランティア活動への参加率は高いといえる。一般的に、20～30代は就職、結婚、出産などのライフイベントが重なる時期であり、ボランティア活動に参加する時間をとることが難しい年代である。そういった状況を考慮しながらこの結果をみると、学生時代のボランティア経験や学生スタッフとしての活動が卒業後の行動に影響を与えているといえる。ボランティアに時間を割くことが難し

い状況の中において、活動は出来ていないが7割近くの卒業生がボランティアに関心を示し、実際に3割近い卒業生が活動に取り組んでいることは大きな特徴である。

今回の調査の結果から、学生スタッフとしての経験が、学生の成長や価値観、進路選択に影響を与えていることが分かった。コーディネーターとして日々、学生スタッフの活動に伴走しながら感覚的に感じていた、「学生スタッフとしての活動が学生自身に与える影響」を視覚的に検証出来たことは、非常に面白い経験であった。仲間やコーディネーターをはじめとした大学職員、教員、そして地域の方々等多くの人と関わって活動することが、その支えとなっているように感じた。また、このアンケートの調査票を作成する過程で、自分自身のコーディネーターとしての立ち位置や仕事に対する姿勢などを客観的に捉えることが出来たのも大きな成果であったと思う。この経験をこれからのセンター運営に活かし、大学にボランティアセンターがある意義を追求していきたい。

参考資料

注1) 「全国学生1万人～ボランティアに関する意識調査～」 <http://gakuvo.jp/about/newsrelease/> (2020/12/25 情報)

調査主体：日本財団学生ボランティアセンター

注2) 「令和元年度市民の社会貢献に関する実態調査報告書」

https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/r-1_houkokusyo.pdf (2020/12/25 情報)

調査主体：内閣府

資料

元学生スタッフ「ボランティア」および、「大学ボランティアセンター」に関する意識調査

元学生スタッフの「ボランティア」および、「大学ボランティアセンター」に関する意識調査へのご協力をお願い（依頼）

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターは、2021 年で創立 20 周年を迎えます。

そこで、ボランティアセンター黎明期から近年に至るまで、学生スタッフとして活動された皆さんに、「ボランティア」および「大学ボランティアセンター」に対する意識調査を実施させていただくことになりました。

このアンケートでは「大学内にボランティアセンターがあることの意義」や「学生時代のボランティア活動が進路に与える影響」等を明らかにし、今後のボランティア・NPO 活動センター運営に役立てると共に、大学ボランティアセンターの運営に関わる人たちにも役立てるものにして考えています。このアンケート結果を分析し、まとめたものを 20 周年記念事業で発表すると共に、HP 等でも簡易にまとめたものを公開する予定です。

つきましては次のページのアンケートへの回答をお願いします。

お忙しいとは存じますが、本調査の趣旨をご理解いただき、下記の要領でお答えくださいますようお願い申し上げます。

龍谷大学 ボランティア・NPO 活動センター
センター長 筒井のり子

1. 回答は、同封しましたアンケートに直接記入し、返信用封筒で返送してください。
2. 回答は、返信用封筒に入れ、2020 年 1 月 29 日（水）までにご返送ください。
3. アンケートは、一部記入部分もありますが、ほとんどが選択式です。
4. ご回答いただいた情報および個人情報、本調査の目的以外には使用しません。
5. このアンケート調査に関して不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

住所 〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67
龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター
電話 075-645-2047
E-mail ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

質問項目のいずれかに○を付ける、もしくは、記入してお答えください。

1. あなたのことをお聞きします。(あてはまる番号1つに○、もしくは記入してください)

(1) 性別 ①男性 ②女性 ③その他

(2) 年齢 【 】歳

(3) 現在の居住地域(都道府県) 【 】

(4) 卒業年度 【 】年度卒業 ※西暦でお願いします。

(5) 何学部何学科を卒業しましたか。1)~10)は学部、【 】内は学科名。(①~⑳の中であてはまる学科名の番号1つに○)

- 1) 文学部 【①真宗学科 ②仏教学科 ③哲学科 ④臨床心理学科 ⑤史学科
⑥歴史学科 ⑦日本語日本文学科 ⑧英語英米文学科】
- 2) 経済学部 【⑨現代経済学科 ⑩国際経済学科】
- 3) 経営学部 【⑪経営学科】
- 4) 法学部 【⑫法律学科 ⑬政治学科】
- 5) 理工学部 【⑭数理情報学科 ⑮電子情報学科 ⑯機械システム工学科 ⑰物質化学科
⑱情報メディア学科 ⑲環境ソリューション工学科】
- 6) 社会学部 【⑳社会学科 ㉑コミュニティマネジメント学科 ㉒地域福祉学科
㉓臨床福祉学科 ㉔現代福祉学科】
- 7) 政策学部 【㉕政策学科】
- 8) 国際文化学部 【㉖国際文化学科】
- 9) 国際学部 【㉗国際文化学科 ㉘グローバルスタディーズ学科】
- 10) 農学部 【㉙植物生命科学科 ㉚資源生物科学科 ㉛食品栄養学科 ㉜食料農業システム学科】
- 11) 短期大学部 【㉝社会福祉学科 ㉞子ども教育学科】

(6) 現在の職業 1)~7)は業種。【 】内は職業名。(①~㉑の中であてはまる職業名の番号1つに○)

- 1) 会社員 【①建設業 ②製造業 ③情報通信業 ④卸売・小売業
⑤金融・保険業 ⑥不動産業 ⑦サービス業 ⑧その他】
- 2) 自営業・家族従業者 【⑨自営業・家族従業者(農業・漁業を含む)】
- 3) 公務員 【⑩国家公務員 ⑪一般行政職 ⑫技術系公務員 ⑬警察官
⑭消防士 ⑮自衛官 ⑯その他】
- 4) 教員 【⑰小学校 ⑱中学校 ⑲高等学校 ⑳特別支援学校 ㉑その他】
- 5) 団体職員 【㉒特別行政法人 ㉓社会福祉法人 ㉔公益財団法人
㉕公益社団法人 ㉖一般財団法人 ㉗一般社団法人
㉘学校法人 ㉙NPO法人 ㉚その他】
- 6) その他 【具体的に: 】
- 7) 無職 【㉛無職(主婦・主夫、求職者、退職者含む)】

2. 学生スタッフをしていたことは、あなたの進路選択に影響を与えましたか。(あてはまる番号1つに○)

- ①影響があった ②どちらかと言えば影響があった ③どちらかと言えば影響がなかった ④影響はなかった

3. 学生スタッフの経験についてお聞きします。

(1) 学生スタッフとして、どれくらいの期間在籍しましたか？（あてはまる番号1つに○）
 ①1年未満 ②1年～2年未満 ③2年～3年未満 ④3年～4年未満 ⑤4年以上
 ※1年～4年まで在籍した人は、⑤に○になります。

(2) 学生スタッフとして、何か役職を担っていましたか（あてはまるもの全てに○）
 ①代表 ②副代表 ③班長 ④その他【具体的に：
 ⑤担っていない

(3) あなたの大学生生活（学生生活全般で考えてください）の充実度を教えてください。（あてはまる番号1つに○）
 ①充実していた ②どちらかと言えば充実していた
 ③どちらかと言えば充実していなかった ④充実していなかった

(4) あなたの学生スタッフとしての生活（限定して）の充実度を教えてください。（あてはまる番号1つに○）
 ①充実していた ②どちらかと言えば充実していた
 ③どちらかと言えば充実していなかった ④充実していなかった

(5) あなたの学生生活における興味・関心を振り返った時、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占める割合は何パーセントくらいでしたか。
 _____ % ※0～100%で考えてください。

4. 学生スタッフになった理由は何ですか。（あてはまる番号1つに○）

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①ボランティアや社会問題に興味があったから	1	2	3	4
②センターの活動に興味があったから	1	2	3	4
③多様なことにチャレンジ出来そうだったから	1	2	3	4
④コミュニケーション力が身につくと思ったから	1	2	3	4
⑤友人が出来そうに思ったから	1	2	3	4
⑥就職に有利だと思ったから	1	2	3	4
⑦ボランティアをしている人に憧れていたから	1	2	3	4
⑧誘われたので	1	2	3	4
⑨なんとなく	1	2	3	4

5. 次の質問は、(1) (2)のいずれか該当する方を答えてください。

(1) 学生スタッフを1年以上続けた方にお聞きします。続けていた理由は何ですか。(あてはまる番号1つに○)

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①ボランティアや社会問題に関する知識を得ることができたから	1	2	3	4
②多様な価値観・情報が集まる場所だから	1	2	3	4
③友人や知人を得ることが出来たから	1	2	3	4
④センターが自分の居場所だと感じていたから	1	2	3	4
⑤新しい発見や経験が出来たから	1	2	3	4
⑥自分が人に役に立つ存在だと思えたから	1	2	3	4
⑦自分自身の成長を実感することができたから	1	2	3	4
⑧ボランティア・NPO活動センターの運営に関わるのが楽しかったから	1	2	3	4
⑨なんとなく続けていた	1	2	3	4

(2) 学生スタッフを1年未満で辞めた方にお聞きします。続けなかったのはなぜですか。(あてはまる番号1つに○)

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①思っていた活動と違っていたから	1	2	3	4
②ボランティアに関する知識が身につかなかったから	1	2	3	4
③ほかの活動が忙しくなったから	1	2	3	4
④人間関係がうまくいかなかったから	1	2	3	4
⑤授業との両立が難しくなったから	1	2	3	4
⑥自分自身の成長につながっていないと思えなかったから	1	2	3	4
⑦他にやりたいことができたから	1	2	3	4

6. 学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力は何ですか（あてはまる番号1つに○）

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①物事を幅広く捉えて考える力	1	2	3	4
②自らが考えて創造的に動く力	1	2	3	4
③他者と協働して物事を進める力	1	2	3	4
④自分の想いを他者に伝える力	1	2	3	4
⑤社会問題に関心を持ち、理解する力	1	2	3	4
⑥他者へ共感する力	1	2	3	4

7. あなたにとって、ボランティアコーディネーター（センター職員）はどんな存在でしたか。（あてはまる番号1つに○）

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①ボランティアについて具体的に説明できる存在	1	2	3	4
②ボランティアについてアドバイスできる存在	1	2	3	4
③ボランティアの新しい視点を示すことができる存在	1	2	3	4
④募集团体と学生をつなげるための調整ができる存在	1	2	3	4
⑤学生の力を引き出すことができる存在	1	2	3	4
⑥新しい発想や価値観を示すことができる存在	1	2	3	4

8. ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思えますか。（特に重要な意義だと思うこと1つに○）

- ①学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること
- ②ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること
- ③学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること
- ④学生が成長できる機会を提供すること
- ⑤学生の学内における居場所の1つとなること

9. 学生時代、学生スタッフ以外（学生スタッフ企画やセンター事業を除く）でもボランティア活動を行っていましたか。（あてはまる番号1つに○）

- ①定期的に参加
- ②単発的な活動に参加
- ③全くしていない

学生スタッフの『ボランティア』および、 『大学ボランティアセンター』に関する意識調査

「学生スタッフの『ボランティア』および、『大学ボランティアセンター』に関する意識調査」へのご協力をお願い（依頼）

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センターは、2021 年で創立 20 周年を迎えます。

そこで、ボランティアセンター黎明期から現在に至るまで、学生スタッフとして活動された（されている）皆さんに、「ボランティア」および「大学ボランティアセンター」に対する意識調査を実施させていただくことになりました。

このアンケートでは「大学内にボランティアセンターがあることの意義」や「学生時代のボランティア活動が進路に与える影響」等を明らかにし、今後のボランティア・NPO 活動センター運営に役立てると共に、大学ボランティアセンターの運営に関わる人たちにも役立てるものになりたいと考えています。このアンケート結果を分析し、まとめたものを 20 周年記念事業【2021年2月7日（日）に深草キャンパス成就館にて実施予定】で発表すると共に、HP 等でも簡易にまとめたものを公開する予定です。

次ページからのアンケートへの回答をお願いします。

本調査の趣旨をご理解いただき、下記の要領でお答えくださいますようお願い申し上げます。

龍谷大学 ボランティア・NPO 活動センター
センター長 筒井のり子

1. 回答は、アンケート回収ボックスに入れてください。
2. アンケートは、一部記入部分もありますが、ほとんどが選択式です。
3. このアンケート調査に関して不明な点がありましたら、各センターのコーディネーターまでお問い合わせください。

質問項目のいずれかに○を付ける、もしくは、記入してお答えください。

1. あなたのことをお聞きします。(あてはまる番号1つに○、もしくは記入してください)

(1) 性別 ①男性 ②女性 ③その他

(2) 年齢 【 】歳

(3) 現在の居住地(都道府県) 【 】

(4) 入学年度 【 】年度卒業 ※西暦でお願いします。

(5) 何学部何学科を在籍ですか。1)~10)は学部、【 】内は学科名。(①~⑳の中であてはまる学科名の番号1つに○)

- 1) 文学部 【①真宗学科 ②仏教学科 ③哲学科 ④臨床心理学科 ⑤史学科
⑥歴史学科 ⑦日本語日本文学科 ⑧英語英米文学科】
- 2) 経済学部 【⑨現代経済学科 ⑩国際経済学科】
- 3) 経営学部 【⑪経営学科】
- 4) 法学部 【⑫法律学科 ⑬政治学科】
- 5) 理工学部 【⑭数理情報学科 ⑮電子情報学科 ⑯機械システム工学科 ⑰物質化学科
⑱情報メディア学科 ⑲環境ソリューション工学科】
- 6) 社会学部 【⑳社会学科 ㉑コミュニティマネジメント学科 ㉒地域福祉学科
㉓臨床福祉学科 ㉔現代福祉学科】
- 7) 政策学部 【㉕政策学科】
- 8) 国際文化学部 【㉖国際文化学科】
- 9) 国際学部 【㉗国際文化学科 ㉘グローバルスタディーズ学科】
- 10) 農学部 【㉙植物生命科学科 ㉚資源生物科学科 ㉛食品栄養学科 ㉜食料農業システム学科】
- 11) 短期大学部 【㉝社会福祉学科 ㉞子ども教育学科】

2. 学生スタッフであることは、あなたの進路選択に影響を与えますか。(あてはまる番号1つに○)

①影響がある ②どちらかと言えば影響がある ③どちらかと言えば影響がない ④影響はない

3. 学生スタッフの経験についてお聞きします。

(1) 学生スタッフとして、どれくらいの期間在籍していますか？(あてはまる番号1つに○)

①1年未満 ②1年~2年未満 ③2年~3年未満 ④3年~4年未満 ⑤4年以上

※1年~4年まで在籍した人は、⑤に○になります。

(2) 学生スタッフとして、何か役職を担っていますか(もしくはいましたか)(あてはまるもの全てに○)

①代表 ②副代表 ③班長 ④その他【具体的に: 】

⑤担っていない

(3) あなたの大学生生活（学生生活全般で考えてください）の充実度を教えてください。（あてはまる番号1つに○）

- ①充実している ②どちらかと言えば充実している
 ③どちらかと言えば充実していない ④充実していない

(4) あなたの学生スタッフとしての生活（限定して）の充実度を教えてください。（あてはまる番号1つに○）

- ①充実している ②どちらかと言えば充実している
 ③どちらかと言えば充実していない ④充実していない

(5) あなたの学生生活における興味・関心を割合に例えると、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占める割合は何パーセントくらいですか。

_____ % ※0～100%で考えてください。

4. 学生スタッフになった理由は何ですか。（あてはまる番号1つに○）

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①ボランティアや社会問題に興味があったから	1	2	3	4
②センターの活動に興味があったから	1	2	3	4
③多様なことにチャレンジ出来そうだったから	1	2	3	4
④コミュニケーション力が身につくと思ったから	1	2	3	4
⑤友人が出来そうに思ったから	1	2	3	4
⑥就職に有利だと思ったから	1	2	3	4
⑦ボランティアをしている人に憧れていたから	1	2	3	4
⑧誘われたので	1	2	3	4
⑨なんとなく	1	2	3	4

5. 学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力は何ですか（あてはまる番号1つに○）

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①物事を幅広く捉えて考える力	1	2	3	4
②自らが考えて創造的に動く力	1	2	3	4
③他者と協働して物事を進める力	1	2	3	4
④自分の想いを他者に伝える力	1	2	3	4
⑤社会問題に関心を持ち、理解する力	1	2	3	4
⑥他者へ共感する力	1	2	3	4

6. あなたにとって、ボランティアコーディネーター（センター職員）はどんな存在ですか。（あてはまる番号1つに○）

	あてはまる	どちらかと言えば あてはまる	どちらかと言えば あてはまらない	あてはまらない
①ボランティアについて具体的に説明できる存在	1	2	3	4
②ボランティアについてアドバイスできる存在	1	2	3	4
③ボランティアの新しい視点を示すことができる存在	1	2	3	4
④募集团体と学生をつなげるための調整ができる存在	1	2	3	4
⑤学生の力を引き出すことができる存在	1	2	3	4
⑥新しい発想や価値観を示すことができる存在	1	2	3	4

7. ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思えますか。（特に重要な意義だと思う番号1つに○）

- ①学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること
- ②ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること
- ③学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること
- ④学生が成長できる機会を提供すること
- ⑤学生の学内における居場所の1つとなること

8. 学生スタッフ以外（学生スタッフ企画やセンター事業を除く）でもボランティア活動を行っていますか。

（あてはまる番号1つに○）

- ①定期的に参加
- ②単発的な活動に参加
- ③全くしていない

資料・卒業年度によるクロス集計表

学生スタッフをしていたことは、あなたの進路選択に影響を与えましたか。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
影響があった	11 37.9%	25 30.5%	18 26.5%	54 30.2%
どちらかと言えば 影響があった	8 27.6%	32 39.0%	36 52.9%	76 42.5%
どちらかと言えば 影響がなかった	5 17.2%	16 19.5%	12 17.6%	33 18.4%
影響はなかった	5 17.2%	9 11.0%	2 2.9%	16 8.9%
合計	29 100.0%	82 100.0%	68 100.0%	179 100.0%

学生スタッフとして、役職を担っていましたか。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
役職経験あり	15 51.7%	45 54.2%	37 55.2%	97 54.2%
役職経験なし	14 48.3%	38 45.8%	30 44.8%	82 45.8%
合計	29 100.0%	83 100.0%	67 100.0%	179 100.0%

あなたの大学生活(学生生活全般で考えてください)の充実度を教えてください。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
充実していた	16 55.2%	44 52.4%	26 38.2%	86 47.5%
どちらかと言えば 充実していた	13 44.8%	36 42.9%	34 50.0%	83 45.9%
どちらかと言えば 充実していなかった	0 0.0%	2 2.4%	8 11.8%	10 5.5%
充実していなかった	0 0.0%	2 2.4%	0 0.0%	2 1.1%
合計	29 100.0%	84 100.0%	68 100.0%	181 100.0%

あなたの学生スタッフとしての生活(限定して)の充実度を教えてください。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
充実していた	16 55.2%	45 53.6%	25 36.8%	86 47.5%
どちらかと言えば 充実していた	10 34.5%	35 41.7%	37 54.4%	82 45.3%
どちらかと言えば 充実していなかった	3 10.3%	3 3.6%	4 5.9%	10 5.5%
充実していなかった	0 0.0%	1 1.2%	2 2.9%	3 1.7%
合計	29 100.0%	84 100.0%	68 100.0%	181 100.0%

あなたの大学生活における興味・関心を振り返った時、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占める割合は何パーセントくらいでしたか。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
0～9%	1 3.4%	0 0.0%	2 2.9%	3 1.7%
10～19%	1 3.4%	1 1.2%	5 7.4%	7 3.9%
20～29%	5 17.2%	3 3.6%	2 2.9%	10 5.5%
30～39%	3 10.3%	9 10.7%	6 8.8%	18 9.9%
40～49%	3 10.3%	6 7.1%	8 11.8%	17 9.4%
50～59%	3 10.3%	11 13.1%	12 17.6%	26 14.4%

60～69%	5 17.2%	10 11.9%	13 19.1%	28 15.5%
70～79%	4 13.8%	13 15.5%	11 16.2%	28 15.5%
80～89%	2 6.9%	16 19.0%	6 8.8%	24 13.3%
90～99%	1 3.4%	11 13.1%	3 4.4%	15 8.3%
100%	1 3.4%	4 4.8%	0 0.0%	5 2.8%
合計	29 100.0%	84 100.0%	68 100.0%	181 100.0%

学生スタッフになった理由は何ですか。

●ボランティアや社会問題に興味があったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	23 79.3%	36 43.4%	31 45.6%	90 50.0%
どちらかと言えば あてはまる	5 17.2%	34 41.0%	27 39.7%	66 36.7%
どちらかと言えば あてはまらない	1 3.4%	10 12.0%	7 10.3%	18 10.0%
あてはまらない	0 0.0%	3 3.6%	3 4.4%	6 3.3%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●センターの活動に興味があったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	10 34.5%	24 28.6%	14 20.6%	48 26.5%
どちらかと言えば あてはまる	14 48.3%	33 39.3%	36 52.9%	83 45.9%
どちらかと言えば あてはまらない	5 17.2%	19 22.6%	13 19.1%	37 20.4%
あてはまらない	0 0.0%	8 9.5%	5 7.4%	13 7.2%
合計	29 100.0%	84 100.0%	68 100.0%	181 100.0%

●多様なことにチャレンジ出来そうと思ったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	17 58.6%	37 44.6%	34 50.0%	88 48.9%
どちらかと言えば あてはまる	9 31.0%	34 41.0%	27 39.7%	70 38.9%
どちらかと言えば あてはまらない	3 10.3%	6 7.2%	4 5.9%	13 7.2%
あてはまらない	0 0.0%	6 7.2%	3 4.4%	9 5.0%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●コミュニケーション力が身につくと思ったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	5 17.2%	20 24.4%	19 27.9%	44 24.6%
どちらかと言えば あてはまる	8 27.6%	29 35.4%	29 42.6%	66 36.9%
どちらかと言えば あてはまらない	10 34.5%	23 28.0%	15 22.1%	48 26.8%
あてはまらない	6 20.7%	10 12.2%	5 7.4%	21 11.7%
合計	29 100.0%	82 100.0%	68 100.0%	179 100.0%

第4章 元学生スタッフ/学生スタッフ「ボランティア」および、「大学ボランティアセンター」に関する意識調査報告書

(上段:度数 下段:%)

●友人が出来そうに思ったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合 計
あてはまる	6 21.4%	24 28.9%	24 35.3%	54 30.2%
どちらかと言えば あてはまる	9 32.1%	34 41.0%	28 41.2%	71 39.7%
どちらかと言えば あてはまらない	9 32.1%	20 24.1%	11 16.2%	40 22.3%
あてはまらない	4 14.3%	5 6.0%	5 7.4%	14 7.8%
合 計	28 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	179 100.0%

●就職に有利だと思ったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合 計
あてはまる	2 6.9%	14 16.9%	12 17.6%	28 15.6%
どちらかと言えば あてはまる	5 17.2%	20 24.1%	25 36.8%	50 27.8%
どちらかと言えば あてはまらない	9 31.0%	29 34.9%	21 30.9%	59 32.8%
あてはまらない	13 44.8%	20 24.1%	10 14.7%	43 23.9%
合 計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●ボランティアをしている人に憧れていたから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合 計
あてはまる	1 3.6%	8 9.6%	8 11.8%	17 9.5%
どちらかと言えば あてはまる	7 25.0%	19 22.9%	19 27.9%	45 25.1%
どちらかと言えば あてはまらない	10 35.7%	33 39.8%	24 35.3%	67 37.4%
あてはまらない	10 35.7%	23 27.7%	17 25.0%	50 27.9%
合 計	28 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	179 100.0%

●誘われたので

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合 計
あてはまる	9 31.0%	16 19.3%	11 16.2%	36 20.0%
どちらかと言えば あてはまる	4 13.8%	17 20.5%	14 20.6%	35 19.4%
どちらかと言えば あてはまらない	2 6.9%	14 16.9%	12 17.6%	28 15.6%
あてはまらない	14 48.3%	36 43.4%	31 45.6%	81 45.0%
合 計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●なんとなく

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合 計
あてはまる	2 7.1%	9 10.8%	11 16.2%	22 12.3%
どちらかと言えば あてはまる	5 17.9%	14 16.9%	16 23.5%	35 19.6%
どちらかと言えば あてはまらない	4 14.3%	17 20.5%	14 20.6%	35 19.6%
あてはまらない	17 60.7%	43 51.8%	27 39.7%	87 48.6%
合 計	28 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	179 100.0%

学生スタッフを1年以上続けた方にお聞きします。続けていた理由は何ですか。

●ボランティアや社会問題に関する知識を得ることができたから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合 計
あてはまる	17 60.7%	31 37.8%	48 43.6%
どちらかと言えば あてはまる	9 32.1%	42 51.2%	51 46.4%
どちらかと言えば あてはまらない	1 3.6%	9 11.0%	10 9.1%
あてはまらない	1 3.6%	0 0.0%	1 0.9%
合 計	28 100.0%	82 100.0%	110 100.0%

●多様な価値観・情報が集まる場所だから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合 計
あてはまる	20 71.4%	49 59.8%	69 62.7%
どちらかと言えば あてはまる	6 21.4%	29 35.4%	35 31.8%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	3 3.7%	3 2.7%
あてはまらない	2 7.1%	1 1.2%	3 2.7%
合 計	28 100.0%	82 100.0%	110 100.0%

●友人や知人を得ることが出来たから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合 計
あてはまる	16 57.1%	54 65.9%	70 63.6%
どちらかと言えば あてはまる	9 32.1%	25 30.5%	34 30.9%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	3 3.7%	3 2.7%
あてはまらない	3 10.7%	0 0.0%	3 2.7%
合 計	28 100.0%	82 100.0%	110 100.0%

●センターが自分の居場所だと感じていたから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合 計
あてはまる	12 42.9%	36 43.9%	48 43.6%
どちらかと言えば あてはまる	11 39.3%	35 42.7%	46 41.8%
どちらかと言えば あてはまらない	4 14.3%	6 7.3%	10 9.1%
あてはまらない	1 3.6%	5 6.1%	6 5.5%
合 計	28 100.0%	82 100.0%	110 100.0%

●新しい発見や経験が出来たから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合 計
あてはまる	19 67.9%	48 57.8%	67 60.4%
どちらかと言えば あてはまる	8 28.6%	30 36.1%	38 34.2%
どちらかと言えば あてはまらない	1 3.6%	4 4.8%	5 4.5%
あてはまらない	0 0.0%	1 1.2%	1 0.9%
合 計	28 100.0%	83 100.0%	111 100.0%

●自分が人に役に立つ存在だと思えたから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合計
あてはまる	7 25.0%	13 15.9%	20 18.2%
どちらかと言えば あてはまる	11 39.3%	37 45.1%	48 43.6%
どちらかと言えば あてはまらない	5 17.9%	25 30.5%	30 27.3%
あてはまらない	5 17.9%	7 8.5%	12 10.9%
合計	28 100.0%	82 100.0%	110 100.0%

●自分自身の成長を実感することが出来たから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合計
あてはまる	13 46.4%	25 30.5%	38 34.5%
どちらかと言えば あてはまる	6 21.4%	46 56.1%	52 47.3%
どちらかと言えば あてはまらない	5 17.9%	11 13.4%	16 14.5%
あてはまらない	4 14.3%	0 0.0%	4 3.6%
合計	28 100.0%	82 100.0%	110 100.0%

●ボランティア・NPO 活動センターの運営に関わるのが楽しかったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合計
あてはまる	14 50.0%	42 51.2%	56 50.9%
どちらかと言えば あてはまる	9 32.1%	34 41.5%	43 39.1%
どちらかと言えば あてはまらない	1 3.6%	4 4.9%	5 4.5%
あてはまらない	4 14.3%	2 2.4%	6 5.5%
合計	28 100.0%	82 100.0%	110 100.0%

●なんとなく続いていた

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合計
あてはまる	0 0.0%	6 7.3%	6 5.5%
どちらかと言えば あてはまる	7 25.9%	13 15.9%	20 18.3%
どちらかと言えば あてはまらない	5 18.5%	27 32.9%	32 29.4%
あてはまらない	15 55.6%	36 43.9%	51 46.8%
合計	27 100.0%	82 100.0%	109 100.0%

学生スタッフを1年未満で辞めた方にお聞きします。続かなかったのはなぜですか。

●思っていた活動と違っていただけ

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%

●ボランティアに関する知識が身につかなかったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%

●ほかの活動／が忙しくなったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%

●人間関係がうまくいかなかったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%

●授業との両立が難しくなったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%

●自分自身の成長につながっていると思えなかったから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%

●他にやりたいことができたから

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	0 0.0%	1 100.0%

学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力は何ですか。

●物事を幅広く捉えて考える力

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	13 44.8%	24 28.6%	30 44.1%	67 37.0%
どちらかと言えば あてはまる	12 41.4%	48 57.1%	30 44.1%	90 49.7%
どちらかと言えば あてはまらない	4 13.8%	12 14.3%	8 11.8%	24 13.3%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	29 100.0%	84 100.0%	68 100.0%	181 100.0%

●自らが考えて創造的に動く力

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	13 44.8%	17 20.5%	23 33.8%	53 29.4%
どちらかと言えば あてはまる	11 37.9%	52 62.7%	35 51.5%	98 54.4%
どちらかと言えば あてはまらない	5 17.2%	11 13.3%	10 14.7%	26 14.4%
あてはまらない	0 0.0%	3 3.6%	0 0.0%	3 1.7%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●他者と協働して物事を進める力

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	18 62.1%	52 62.7%	44 64.7%	114 63.3%
どちらかと言えば あてはまる	9 31.0%	28 33.7%	20 29.4%	57 31.7%
どちらかと言えば あてはまらない	2 6.9%	2 2.4%	4 5.9%	8 4.4%
あてはまらない	0 0.0%	1 1.2%	0 0.0%	1 0.6%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●自分の想いを他者へ伝える力

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	13 44.8%	27 32.5%	25 36.8%	65 36.1%
どちらかと言えば あてはまる	8 27.6%	39 47.0%	34 50.0%	81 45.0%
どちらかと言えば あてはまらない	7 24.1%	17 20.5%	9 13.2%	33 18.3%
あてはまらない	1 3.4%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●社会問題に関心を持ち、理解する力

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	16 55.2%	33 39.8%	25 36.8%	74 41.1%
どちらかと言えば あてはまる	11 37.9%	42 50.6%	34 50.0%	87 48.3%
どちらかと言えば あてはまらない	2 6.9%	8 9.6%	9 13.2%	19 10.6%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●他者へ共感する力

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	13 44.8%	43 51.8%	33 48.5%	89 49.4%
どちらかと言えば あてはまる	14 48.3%	33 39.8%	25 36.8%	72 40.0%
どちらかと言えば あてはまらない	2 6.9%	7 8.4%	10 14.7%	19 10.6%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

あなたにとって、ボランティアコーディネーター(センター職員)はどんな存在でしたか。

●ボランティアについて具体的に説明できる存在

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	13 44.8%	46 55.4%	44 64.7%	103 57.2%
どちらかと言えば あてはまる	11 37.9%	29 34.9%	23 33.8%	63 35.0%
どちらかと言えば あてはまらない	4 13.8%	8 9.6%	1 1.5%	13 7.2%
あてはまらない	1 3.4%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●ボランティアについてアドバイスできる存在

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	16 55.2%	54 65.1%	48 70.6%	118 65.6%
どちらかと言えば あてはまる	11 37.9%	24 28.9%	16 23.5%	51 28.3%
どちらかと言えば あてはまらない	1 3.4%	5 6.0%	3 4.4%	9 5.0%
あてはまらない	1 3.4%	0 0.0%	1 1.5%	2 1.1%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

●ボランティアの新しい視点を示すことができる存在

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	10 34.5%	38 45.8%	41 60.3%	89 49.4%
どちらかと言えば あてはまる	13 44.8%	32 38.6%	24 35.3%	69 38.3%
どちらかと言えば あてはまらない	5 17.2%	13 15.7%	3 4.4%	21 11.7%
あてはまらない	1 3.4%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

● 募集团体と学生をつなげるための調整ができる存在

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	22 75.9%	48 57.8%	45 66.2%	115 63.9%
どちらかと言えばあてはまる	5 17.2%	28 33.7%	21 30.9%	54 30.0%
どちらかと言えばあてはまらない	1 3.4%	7 8.4%	2 2.9%	10 5.6%
あてはまらない	1 3.4%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

● 学生の力を引き出すことができる存在

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	17 58.6%	47 56.0%	41 60.3%	105 58.0%
どちらかと言えばあてはまる	11 37.9%	26 31.0%	23 33.8%	60 33.1%
どちらかと言えばあてはまらない	0 0.0%	10 11.9%	4 5.9%	14 7.7%
あてはまらない	1 3.4%	1 1.2%	0 0.0%	2 1.1%
合計	29 100.0%	84 100.0%	68 100.0%	181 100.0%

● 新しい発想や価値観を示すことができる存在

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
あてはまる	11 37.9%	39 47.0%	40 58.8%	90 50.0%
どちらかと言えばあてはまる	13 44.8%	29 34.9%	27 39.7%	69 38.3%
どちらかと言えばあてはまらない	4 13.8%	14 16.9%	1 1.5%	19 10.6%
あてはまらない	1 3.4%	1 1.2%	0 0.0%	2 1.1%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思いますか。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること	4 13.8%	12 14.3%	11 16.2%	27 14.9%
ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること	2 6.9%	1 1.2%	4 5.9%	7 3.9%
学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること	16 55.2%	48 57.1%	36 52.9%	100 55.2%
学生が成長できる機会を提供すること	6 20.7%	21 25.0%	13 19.1%	40 22.1%
学生の学内における居場所の1つとなること	1 3.4%	2 2.4%	4 5.9%	7 3.9%
合計	29 100.0%	84 100.0%	68 100.0%	181 100.0%

学生時代、学生スタッフ以外(学生スタッフ企画やセンター事業を除く)でもボランティア活動を行いましたか。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	在学生	合計
定期的に参加	16 55.2%	24 28.9%	12 17.6%	52 28.9%
単発的な活動に参加	11 37.9%	42 50.6%	42 61.8%	95 52.8%
全く参加していない	2 6.9%	17 20.5%	14 20.6%	33 18.3%
合計	29 100.0%	83 100.0%	68 100.0%	180 100.0%

卒業後もボランティア活動に参加していますか。

	2002-2011 卒	2012-2018 卒	合計
継続的に活動している 在学中から続けている活動	1 3.4%	1 1.2%	2 1.8%
継続的に活動している 卒業後、新たに参加した活動	2 6.9%	1 1.2%	3 2.7%
継続的に活動している 在学中から続けている活動も 卒業後、新たに参加した活動も	0 0.0%	3 3.6%	3 2.7%
時々、活動している 在学中から続けている活動	2 6.9%	5 6.0%	7 6.2%
時々活動している 卒業後、新たに参加した活動	5 17.2%	9 10.7%	14 12.4%
時々活動している 在学中から続けている活動も 卒業後、新たに参加した活動も	0 0.0%	2 2.4%	2 1.8%
興味はあるが活動していない	17 58.6%	59 70.2%	76 67.3%
興味がなく活動していない	2 6.9%	4 4.8%	6 5.3%
合計	29 100.0%	84 100.0%	113 100.0%

資料・役職経験によるクロス集計表

学生スタッフをしていたことは、あなたの進路選択に影響を与えましたか。

	役職経験あり	役職経験なし	合計
影響があった	40 42.1%	13 15.9%	53 29.9%
どちらかと言えば影響があった	37 38.9%	38 46.3%	75 42.4%
どちらかと言えば影響がなかった	14 14.7%	19 23.2%	33 18.6%
影響はなかった	4 4.2%	12 14.6%	16 9.0%
合計	95 100.0%	82 100.0%	177 100.0%

あなたの大学生生活(学生生活全般で考えてください)の充実度を教えてください。

	役職経験あり	役職経験なし	合計
充実していた	47 48.5%	38 46.3%	85 47.5%
どちらかと言えば充実していた	46 47.4%	37 45.1%	83 46.4%
どちらかと言えば充実していなかった	3 3.1%	6 7.3%	9 5.0%
充実していなかった	1 1.0%	1 1.2%	2 1.1%
合計	97 100.0%	82 100.0%	179 100.0%

あなたの学生スタッフとしての生活(限定して)の充実度を教えてください。

	役職経験あり	役職経験なし	合計
充実していた	56 57.7%	30 36.6%	86 48.0%
どちらかと言えば充実していた	41 42.3%	39 47.6%	80 44.7%
どちらかと言えば充実していなかった	0 0.0%	10 12.2%	10 5.6%
充実していなかった	0 0.0%	3 3.7%	3 1.7%
合計	97 100.0%	82 100.0%	179 100.0%

あなたの大学生生活における興味・関心を振り返った時、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占める割合は何パーセントくらいでしたか。

	役職経験あり	役職経験なし	合計
0～9%	0 0.0%	3 3.7%	3 1.7%
10～19%	0 0.0%	7 8.5%	7 3.9%
20～29%	2 2.1%	8 9.8%	10 5.6%
30～39%	4 4.1%	14 17.1%	18 10.1%
40～49%	10 10.3%	6 7.3%	16 8.9%
50～59%	14 14.4%	12 14.6%	26 14.5%
60～69%	13 13.4%	15 18.3%	28 15.6%
70～79%	17 17.5%	10 12.2%	27 15.1%
80～89%	18 18.6%	6 7.3%	24 13.4%
90～99%	14 14.4%	1 1.2%	15 8.4%
100%	5 5.2%	0 0.0%	5 2.8%
合計	97 100.0%	82 100.0%	179 100.0%

学生スタッフになった理由は何ですか。

●ボランティアや社会問題に興味があったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	57 59.4%	32 39.0%	89 50.0%
どちらかと言えばあてはまる	27 28.1%	38 46.3%	65 36.5%
どちらかと言えばあてはまらない	11 11.5%	7 8.5%	18 10.1%
あてはまらない	1 1.0%	5 6.1%	6 3.4%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●センターの活動に興味があったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	24 24.7%	24 29.3%	48 26.8%
どちらかと言えばあてはまる	50 51.5%	31 37.8%	81 45.3%
どちらかと言えばあてはまらない	18 18.6%	19 23.2%	37 20.7%
あてはまらない	5 5.2%	8 9.8%	13 7.3%
合計	97 100.0%	82 100.0%	179 100.0%

●多様なことにチャレンジ出来そうだったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	51 53.1%	36 43.9%	87 48.9%
どちらかと言えばあてはまる	32 33.3%	37 45.1%	69 38.8%
どちらかと言えばあてはまらない	7 7.3%	6 7.3%	13 7.3%
あてはまらない	6 6.3%	3 3.7%	9 5.1%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●コミュニケーション力が身につくと思ったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	23 24.2%	19 23.2%	42 23.7%
どちらかと言えばあてはまる	34 35.8%	32 39.0%	66 37.3%
どちらかと言えばあてはまらない	23 24.2%	25 30.5%	48 27.1%
あてはまらない	15 15.8%	6 7.3%	21 11.9%
合計	95 100.0%	82 100.0%	177 100.0%

●友人が出来そうと思ったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	27 28.4%	26 31.7%	53 29.9%
どちらかと言えばあてはまる	35 36.8%	36 43.9%	71 40.1%
どちらかと言えばあてはまらない	24 25.3%	15 18.3%	39 22.0%
あてはまらない	9 9.5%	5 6.1%	14 7.9%
合計	95 100.0%	82 100.0%	177 100.0%

●就職に有利だと思ったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	14 14.6%	14 17.1%	28 15.7%
どちらかと言えばあてはまる	25 26.0%	24 29.3%	49 27.5%
どちらかと言えばあてはまらない	31 32.3%	27 32.9%	58 32.6%
あてはまらない	26 27.1%	17 20.7%	43 24.2%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●ボランティアをしている人に憧れていたから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	8 8.4%	9 11.0%	17 9.6%
どちらかと言えばあてはまる	20 21.1%	23 28.0%	43 24.3%
どちらかと言えばあてはまらない	40 42.1%	27 32.9%	67 37.9%
あてはまらない	27 28.4%	23 28.0%	50 28.2%
合計	95 100.0%	82 100.0%	177 100.0%

●誘われたので

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	15 15.6%	21 25.6%	36 20.2%
どちらかと言えばあてはまる	16 16.7%	17 20.7%	33 18.5%
どちらかと言えばあてはまらない	15 15.6%	13 15.9%	28 15.7%
あてはまらない	50 52.1%	31 37.8%	81 45.5%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●なんとなく

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	13 13.7%	9 11.0%	22 12.4%
どちらかと言えばあてはまる	13 13.7%	21 25.6%	34 19.2%
どちらかと言えばあてはまらない	16 16.8%	19 23.2%	35 19.8%
あてはまらない	53 55.8%	33 40.2%	86 48.6%
合計	95 100.0%	82 100.0%	177 100.0%

学生スタッフを1年以上続けた方にお聞きします。続けていた理由は何ですか。

●ボランティアや社会問題に関する知識を得ることができたから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	31 52.5%	17 34.0%	48 44.0%
どちらかと言えばあてはまる	25 42.4%	25 50.0%	50 45.9%
どちらかと言えばあてはまらない	2 3.4%	8 16.0%	10 9.2%
あてはまらない	1 1.7%	0 0.0%	1 0.9%
合計	59 100.0%	50 100.0%	109 100.0%

●多様な価値観・情報が集まる場所だから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	39 66.1%	29 58.0%	68 62.4%
どちらかと言えばあてはまる	16 27.1%	19 38.0%	35 32.1%
どちらかと言えばあてはまらない	1 1.7%	2 4.0%	3 2.8%
あてはまらない	3 5.1%	0 0.0%	3 2.8%
合計	59 100.0%	50 100.0%	109 100.0%

●友人や知人を得ることが出来たから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	37 62.7%	32 64.0%	69 63.3%
どちらかと言えばあてはまる	18 30.5%	16 32.0%	34 31.2%
どちらかと言えばあてはまらない	1 1.7%	2 4.0%	3 2.8%
あてはまらない	3 5.1%	0 0.0%	3 2.8%
合計	59 100.0%	50 100.0%	109 100.0%

●センターが自分の居場所だと感じていたから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	32 54.2%	15 30.0%	47 43.1%
どちらかと言えばあてはまる	24 40.7%	22 44.0%	46 42.2%
どちらかと言えばあてはまらない	1 1.7%	9 18.0%	10 9.2%
あてはまらない	2 3.4%	4 8.0%	6 5.5%
合計	59 100.0%	50 100.0%	109 100.0%

●新しい発見や経験が出来たから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	44 73.3%	22 44.0%	66 60.0%
どちらかと言えばあてはまる	15 25.0%	23 46.0%	38 34.5%
どちらかと言えばあてはまらない	0 0.0%	5 10.0%	5 4.5%
あてはまらない	1 1.7%	0 0.0%	1 0.9%
合計	60 100.0%	50 100.0%	110 100.0%

●自分が人に役に立つ存在だと思えたから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	12 20.3%	7 14.0%	19 17.4%
どちらかと言えばあてはまる	30 50.8%	18 36.0%	48 44.0%
どちらかと言えばあてはまらない	12 20.3%	18 36.0%	30 27.5%
あてはまらない	5 8.5%	7 14.0%	12 11.0%
合計	59 100.0%	50 100.0%	109 100.0%

●自分自身の成長を実感することが出来たから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	26 44.1%	11 22.0%	37 33.9%
どちらかと言えば あてはまる	26 44.1%	26 52.0%	52 47.7%
どちらかと言えば あてはまらない	4 6.8%	12 24.0%	16 14.7%
あてはまらない	3 5.1%	1 2.0%	4 3.7%
合計	59 100.0%	50 100.0%	109 100.0%

●ボランティア・NPO 活動センターの運営に関わるのが楽しかったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	36 61.0%	20 40.0%	56 51.4%
どちらかと言えば あてはまる	19 32.2%	23 46.0%	42 38.5%
どちらかと言えば あてはまらない	1 1.7%	4 8.0%	5 4.6%
あてはまらない	3 5.1%	3 6.0%	6 5.5%
合計	59 100.0%	50 100.0%	109 100.0%

●なんとなく続けていた

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	4 6.9%	2 4.0%	6 5.6%
どちらかと言えば あてはまる	5 8.6%	15 30.0%	20 18.5%
どちらかと言えば あてはまらない	19 32.8%	13 26.0%	32 29.6%
あてはまらない	30 51.7%	20 40.0%	50 46.3%
合計	58 100.0%	50 100.0%	108 100.0%

学生スタッフを1年未満で辞めた方にお聞きします。続けなかったのはなぜですか。

●思っていた活動と違っていたから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%

●ボランティアに関する知識が身につかなかったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%

●ほかの活動が忙しくなったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%

●人間関係がうまくいかなかったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%

●授業との両立が難しくなったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%

●自分自身の成長につながっていると思えなかったから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%

●他にやりたいことができたから

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%
どちらかと言えば あてはまる	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
どちらかと言えば あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	0 0.0%	1 100.0%	1 100.0%

学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力は何ですか。

●物事を幅広く捉えて考える力

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	43 44.3%	23 28.0%	66 36.9%
どちらかと言えばあてはまる	47 48.5%	42 51.2%	89 49.7%
どちらかと言えばあてはまらない	7 7.2%	17 20.7%	24 13.4%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	97 100.0%	82 100.0%	179 100.0%

●自らが考えて創造的に動く力

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	33 34.4%	19 23.2%	52 29.2%
どちらかと言えばあてはまる	53 55.2%	44 53.7%	97 54.5%
どちらかと言えばあてはまらない	9 9.4%	17 20.7%	26 14.6%
あてはまらない	1 1.0%	2 2.4%	3 1.7%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●他者と協働して物事を進める力

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	60 62.5%	53 64.6%	113 63.5%
どちらかと言えばあてはまる	32 33.3%	24 29.3%	56 31.5%
どちらかと言えばあてはまらない	4 4.2%	4 4.9%	8 4.5%
あてはまらない	0 0.0%	1 1.2%	1 0.6%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●自分の想いを他者へ伝える力

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	36 37.5%	28 34.1%	64 36.0%
どちらかと言えばあてはまる	46 47.9%	34 41.5%	80 44.9%
どちらかと言えばあてはまらない	13 13.5%	20 24.4%	33 18.5%
あてはまらない	1 1.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●社会問題に関心を持ち、理解する力

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	48 50.0%	25 30.5%	73 41.0%
どちらかと言えばあてはまる	42 43.8%	44 53.7%	86 48.3%
どちらかと言えばあてはまらない	6 6.3%	13 15.9%	19 10.7%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●他者へ共感する力

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	53 55.2%	35 42.7%	88 49.4%
どちらかと言えばあてはまる	33 34.4%	38 46.3%	71 39.9%
どちらかと言えばあてはまらない	10 10.4%	9 11.0%	19 10.7%
あてはまらない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

あなたにとって、ボランティアコーディネーター(センター職員)はどんな存在でしたか。

●ボランティアについて具体的に説明できる存在

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	54 56.3%	47 57.3%	101 56.7%
どちらかと言えばあてはまる	32 33.3%	31 37.8%	63 35.4%
どちらかと言えばあてはまらない	9 9.4%	4 4.9%	13 7.3%
あてはまらない	1 1.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●ボランティアについてアドバイスできる存在

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	65 67.7%	52 63.4%	117 65.7%
どちらかと言えばあてはまる	26 27.1%	24 29.3%	50 28.1%
どちらかと言えばあてはまらない	3 3.1%	6 7.3%	9 5.1%
あてはまらない	2 2.1%	0 0.0%	2 1.1%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●ボランティアの新しい視点を示すことができる存在

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	51 53.1%	37 45.1%	88 49.4%
どちらかと言えばあてはまる	36 37.5%	33 40.2%	69 38.8%
どちらかと言えばあてはまらない	8 8.3%	12 14.6%	20 11.2%
あてはまらない	1 1.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●募集団と学生をつなげるための調整ができる存在

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	61 63.5%	52 63.4%	113 63.5%
どちらかと言えばあてはまる	28 29.2%	26 31.7%	54 30.3%
どちらかと言えばあてはまらない	6 6.3%	4 4.9%	10 5.6%
あてはまらない	1 1.0%	0 0.0%	1 0.6%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

●学生の力を引き出すことができる存在

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	63 64.9%	41 50.0%	104 58.1%
どちらかと言えばあてはまる	28 28.9%	31 37.8%	59 33.0%
どちらかと言えばあてはまらない	5 5.2%	9 11.0%	14 7.8%
あてはまらない	1 1.0%	1 1.2%	2 1.1%
合計	97 100.0%	82 100.0%	179 100.0%

●新しい発想や価値観を示すことができる存在

	役職経験あり	役職経験なし	合計
あてはまる	51 53.1%	38 46.3%	89 50.0%
どちらかと言えばあてはまる	39 40.6%	29 35.4%	68 38.2%
どちらかと言えばあてはまらない	5 5.2%	14 17.1%	19 10.7%
あてはまらない	1 1.0%	1 1.2%	2 1.1%
合計	96 100.0%	82 100.0%	178 100.0%

ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思えますか。

	役職経験あり	役職経験なし	合計
学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること	16 16.5%	11 13.4%	27 15.1%
ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること	6 6.2%	1 1.2%	7 3.9%
学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること	47 48.5%	51 62.2%	98 54.7%
学生が成長できる機会を提供すること	24 24.7%	16 19.5%	40 22.3%
学生の学内における居場所の1つとなること	4 4.1%	3 3.7%	7 3.9%
合計	97 100.0%	82 100.0%	179 100.0%

学生時代、学生スタッフ以外(学生スタッフ企画やセンター事業を除く)でもボランティア活動を行っていましたか。

	役職経験あり	役職経験なし	合計
定期的に参加	33 34.0%	19 23.5%	52 29.2%
単発的な活動に参加	54 55.7%	39 48.1%	93 52.2%
全く参加していない	10 10.3%	23 28.4%	33 18.5%
合計	97 100.0%	81 100.0%	178 100.0%

卒業後もボランティア活動に参加していますか。

	役職経験あり	役職経験なし	合計
継続的に活動している 在学中から続けている活動	2 3.3%	0 0.0%	2 1.8%
継続的に活動している 卒業後、新たに参加した活動	2 3.3%	1 1.9%	3 2.7%
継続的に活動している 在学中から続けている活動も 卒業後、新たに参加した活動も	1 1.7%	2 3.8%	3 2.7%
時々、活動している 在学中から続けている活動	4 6.7%	3 5.8%	7 6.3%
時々活動している 卒業後、新たに参加した活動	6 10.0%	8 15.4%	14 12.5%
時々活動している 在学中から続けている活動も 卒業後、新たに参加した活動も	2 3.3%	0 0.0%	2 1.8%
興味はあるが活動していない	42 70.0%	33 63.5%	75 67.0%
興味がなく活動していない	1 1.7%	5 9.6%	6 5.4%
合計	60 100.0%	52 100.0%	112 100.0%

度数分布

性別

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 男性	94	51.9	51.9
女性	86	47.5	47.5
その他	1	0.6	0.6
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

卒業年度

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 2002	1	0.6	0.6
2004	3	1.7	1.7
2005	1	0.6	0.6
2006	2	1.1	1.1
2007	4	2.2	2.2
2008	3	1.7	1.7
2009	1	0.6	0.6
2010	6	3.3	3.3
2011	8	4.4	4.4
2012	15	8.3	8.3
2013	7	3.9	3.9
2014	6	3.3	3.3
2015	8	4.4	4.4
2016	16	8.8	8.8
2017	14	7.7	7.7
2018	18	9.9	9.9
2019	12	6.6	6.6
2020	19	10.5	10.5
2021	19	10.5	10.5
2022	18	9.9	9.9
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

学部

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 文学	18	9.9	9.9
経済	20	11.0	11.0
経営	3	1.7	1.7
法学	33	18.2	18.2
理工	10	5.5	5.5
社会	57	31.5	31.5
国際/国際文化	14	7.7	7.7
政策	15	8.3	8.3
農学	8	4.4	4.4
短大	3	1.7	1.7
合計	181	100.0	

職業

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 会社員	53	29.3	46.9
自営業	5	2.8	4.4
公務員	14	7.7	12.4
教員	5	2.8	4.4
団体職員	21	11.6	18.6
その他	7	3.9	6.2
無職	8	4.4	7.1
合計	113	62.4	100.0
欠損値 不明・無回答	68	37.6	
合計	181	100.0	

学生スタッフをしていたことは、あなたの進路選択に影響を与えましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 影響があった	54	29.8	30.2
どちらかと言えば影響があった	76	42.0	42.5
どちらかと言えば影響がなかった	33	18.2	18.4
影響はなかった	16	8.8	8.9
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

学生スタッフとして、どれくらいの期間在籍しましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 1年未満	19	10.5	10.6
1～2年未満	26	14.4	14.4
2～3年未満	28	15.5	15.6
3～4年未満	47	26.0	26.1
4年以上	60	33.1	33.3
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

学生スタッフとして、役職(代表)を担っていましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 なし	158	87.3	88.3
あり	21	11.6	11.7
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

学生スタッフとして、役職(副代表)を担っていましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 なし	152	84.0	84.9
あり	27	14.9	15.1
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

学生スタッフとして、役職(班長)を担っていましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 なし	138	76.2	77.1
あり	41	22.7	22.9
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

学生スタッフとして、役職(その他)を担っていましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 なし	150	82.9	83.8
あり	29	16.0	16.2
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

学生スタッフとして、役職(担っていない)を担っていましたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 なし	97	53.6	54.2
あり	82	45.3	45.8
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

あなたの大学生生活(大学生生活全般で考えてください)の充実度を教えてください。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 充実していた	86	47.5	47.5
どちらかと言えば充実していた	83	45.9	45.9
どちらかと言えば充実していなかった	10	5.5	5.5
充実していなかった	2	1.1	1.1
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

あなたの学生スタッフとしての生活(限定して)の充実度を教えてください。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 充実していた	86	47.5	47.5
どちらかと言えば充実していた	82	45.3	45.3
どちらかと言えば充実していなかった	10	5.5	5.5
充実していなかった	3	1.7	1.7
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

あなたの大学生生活における興味・関心を振り返った時、ボランティア・NPO活動センターでの活動が占める割合は何パーセントくらいでしたか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 0～9%	3	1.7	1.7
10～19%	7	3.9	3.9
20～29%	10	5.5	5.5
30～39%	18	9.9	9.9
40～49%	17	9.4	9.4
50～59%	26	14.4	14.4
60～69%	28	15.5	15.5
70～79%	28	15.5	15.5
80～89%	24	13.3	13.3
90～99%	15	8.3	8.3
100%	5	2.8	2.8
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

学生スタッフになった理由は何ですか。

●ボランティアや社会問題に興味があったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	90	49.7	50.0
どちらかと言えばあてはまる	66	36.5	36.7
どちらかと言えばあてはまらない	18	9.9	10.0
あてはまらない	6	3.3	3.3
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●センターの活動に興味があったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	48	26.5	26.5
どちらかと言えばあてはまる	83	45.9	45.9
どちらかと言えばあてはまらない	37	20.4	20.4
あてはまらない	13	7.2	7.2
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

●多様なことにチャレンジ出来そうと思ったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	88	48.6	48.9
どちらかと言えばあてはまる	70	38.7	38.9
どちらかと言えばあてはまらない	13	7.2	7.2
あてはまらない	9	5.0	5.0
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●コミュニケーション力が身につくと思ったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	44	24.3	24.6
どちらかと言えばあてはまる	66	36.5	36.9
どちらかと言えばあてはまらない	48	26.5	26.8
あてはまらない	21	11.6	11.7
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

●友人が出来そうと思ったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	54	29.8	30.2
どちらかと言えばあてはまる	71	39.2	39.7
どちらかと言えばあてはまらない	40	22.1	22.3
あてはまらない	14	7.7	7.8
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

●就職に有利だと思ったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	28	15.5	15.6
どちらかと言えばあてはまる	50	27.6	27.8
どちらかと言えばあてはまらない	59	32.6	32.8
あてはまらない	43	23.8	23.9
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●ボランティアをしている人に憧れていたから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	17	9.4	9.5
どちらかと言えばあてはまる	45	24.9	25.1
どちらかと言えばあてはまらない	67	37.0	37.4
あてはまらない	50	27.6	27.9
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

●誘われたので

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	36	19.9	20.0
どちらかと言えばあてはまる	35	19.3	19.4
どちらかと言えばあてはまらない	28	15.5	15.6
あてはまらない	81	44.8	45.0
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●なんとなく

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	22	12.2	12.3
どちらかと言えばあてはまる	35	19.3	19.6
どちらかと言えばあてはまらない	35	19.3	19.6
あてはまらない	87	48.1	48.6
合計	179	98.9	100.0
欠損値 不明・無回答	2	1.1	
合計	181	100.0	

学生スタッフを1年以上続けた方にお聞きます。続けていた理由は何ですか。

●ボランティアや社会問題に関する知識を得ることができたから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	48	26.5	43.6
どちらかと言えばあてはまる	51	28.2	46.4
どちらかと言えばあてはまらない	10	5.5	9.1
あてはまらない	1	0.6	0.9
合計	110	60.8	100.0
欠損値 不明・無回答	71	39.2	
合計	181	100.0	

●多様な価値観・情報が集まる場所だから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	69	38.1	62.7
どちらかと言えばあてはまる	35	19.3	31.8
どちらかと言えばあてはまらない	3	1.7	2.7
あてはまらない	3	1.7	2.7
合計	110	60.8	100.0
欠損値 不明・無回答	71	39.2	
合計	181	100.0	

●友人や知人を得ることが出来たから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	70	38.7	63.6
どちらかと言えばあてはまる	34	18.8	30.9
どちらかと言えばあてはまらない	3	1.7	2.7
あてはまらない	3	1.7	2.7
合計	110	60.8	100.0
欠損値 不明・無回答	71	39.2	
合計	181	100.0	

●センターが自分の居場所だと感じていたから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	48	26.5	43.6
どちらかと言えばあてはまる	46	25.4	41.8
どちらかと言えばあてはまらない	10	5.5	9.1
あてはまらない	6	3.3	5.5
合計	110	60.8	100.0
欠損値 不明・無回答	71	39.2	
合計	181	100.0	

●新しい発見や経験が出来たから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	67	37.0	60.4
どちらかと言えばあてはまる	38	21.0	34.2
どちらかと言えばあてはまらない	5	2.8	4.5
あてはまらない	1	0.6	0.9
合計	111	61.3	100.0
欠損値 不明・無回答	70	38.7	
合計	181	100.0	

●自分が人に役に立つ存在だと思えたから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	20	11.0	18.2
どちらかと言えばあてはまる	48	26.5	43.6
どちらかと言えばあてはまらない	30	16.6	27.3
あてはまらない	12	6.6	10.9
合計	110	60.8	100.0
欠損値 不明・無回答	71	39.2	
合計	181	100.0	

●自分自身の成長を実感することが出来たから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	38	21.0	34.5
どちらかと言えばあてはまる	52	28.7	47.3
どちらかと言えばあてはまらない	16	8.8	14.5
あてはまらない	4	2.2	3.6
合計	110	60.8	100.0
欠損値 不明・無回答	71	39.2	
合計	181	100.0	

●ボランティア・NPO 活動センターの運営に関わるのが楽しかったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	56	30.9	50.9
どちらかと言えばあてはまる	43	23.8	39.1
どちらかと言えばあてはまらない	5	2.8	4.5
あてはまらない	6	3.3	5.5
合計	110	60.8	100.0
欠損値 不明・無回答	71	39.2	
合計	181	100.0	

●なんとなく続けていた

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	6	3.3	5.5
どちらかと言えばあてはまる	20	11.0	18.3
どちらかと言えばあてはまらない	32	17.7	29.4
あてはまらない	51	28.2	46.8
合計	109	60.2	100.0
欠損値 不明・無回答	72	39.8	
合計	181	100.0	

学生スタッフを1年未満で辞めた方にお聞きします。続かなかったのはなぜですか。

●思っていた活動と違っていたから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまらない	0	0.0	0.0
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	1	0.6	100.0
欠損値 不明・無回答	180	99.4	
合計	181	100.0	

●ボランティアに関する知識が身につかなかったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまらない	0	0.0	0.0
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	1	0.6	100.0
欠損値 不明・無回答	180	99.4	
合計	181	100.0	

●ほかの活動が忙しくなったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	1	0.6	0.6
どちらかと言えばあてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまらない	0	0.0	0.0
あてはまらない	0	0.0	0.0
合計	1	0.6	100.0
欠損値 不明・無回答	180	99.4	
合計	181	100.0	

●人間関係がうまくいかなかったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまらない	0	0.0	0.0
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	1	0.6	100.0
欠損値 不明・無回答	180	99.4	
合計	181	100.0	

●授業との両立が難しくなったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまらない	0	0.0	0.0
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	1	0.6	100.0
欠損値 不明・無回答	180	99.4	
合計	181	100.0	

●自分自身の成長につながっていると思えなかったから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまらない	0	0.0	0.0
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	1	0.6	100.0
欠損値 不明・無回答	180	99.4	
合計	181	100.0	

●他にやりたいことができたから

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	1	0.6	0.6
どちらかと言えばあてはまる	0	0.0	0.0
どちらかと言えばあてはまらない	0	0.0	0.0
あてはまらない	0	0.0	0.0
合計	1	0.6	100.0
欠損値 不明・無回答	180	99.4	
合計	181	100.0	

学生スタッフとしての経験を通して、あなたが身につけたと思える力は何ですか。

●物事を幅広く捉えて考える力

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	67	37.0	37.0
どちらかと言えばあてはまる	90	49.7	49.7
どちらかと言えばあてはまらない	24	13.3	13.3
あてはまらない	0	0.0	0.0
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

●自らが考えて創造的に動く力

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	53	29.3	29.4
どちらかと言えばあてはまる	98	54.1	54.4
どちらかと言えばあてはまらない	26	14.4	14.4
あてはまらない	3	1.7	1.7
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●他者と協働して物事を進める力

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	114	63.0	63.3
どちらかと言えばあてはまる	57	31.5	31.7
どちらかと言えばあてはまらない	8	4.4	4.4
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●自分の想いを他者へ伝える力

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	65	35.9	36.1
どちらかと言えばあてはまる	81	44.8	45.0
どちらかと言えばあてはまらない	33	18.2	18.3
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●社会問題に関心を持ち、理解する力

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	74	40.9	41.1
どちらかと言えばあてはまる	87	48.1	48.3
どちらかと言えばあてはまらない	19	10.5	10.6
あてはまらない	0	0.0	0.0
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●他者へ共感する力

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	89	49.2	49.4
どちらかと言えばあてはまる	72	39.8	40.0
どちらかと言えばあてはまらない	19	10.5	10.6
あてはまらない	0	0.0	0.0
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

あなたにとって、ボランティアコーディネーター(センター職員)はどんな存在でしたか。

●ボランティアについて具体的に説明できる存在

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	103	56.9	57.2
どちらかと言えばあてはまる	63	34.8	35.0
どちらかと言えばあてはまらない	13	7.2	7.2
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●ボランティアについてアドバイスできる存在

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	118	65.2	65.6
どちらかと言えばあてはまる	51	28.2	28.3
どちらかと言えばあてはまらない	9	5.0	5.0
あてはまらない	2	1.1	1.1
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●ボランティアの新しい視点を示すことができる存在

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	89	49.2	49.4
どちらかと言えばあてはまる	69	38.1	38.3
どちらかと言えばあてはまらない	21	11.6	11.7
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●募集团体と学生をつなげるための調整ができる存在

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	115	63.5	63.9
どちらかと言えばあてはまる	54	29.8	30.0
どちらかと言えばあてはまらない	10	5.5	5.6
あてはまらない	1	0.6	0.6
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

●学生の力を引き出すことができる存在

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	105	58.0	58.0
どちらかと言えばあてはまる	60	33.1	33.1
どちらかと言えばあてはまらない	14	7.7	7.7
あてはまらない	2	1.1	1.1
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

●新しい発想や価値観を示すことができる存在

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 あてはまる	90	49.7	50.0
どちらかと言えばあてはまる	69	38.1	38.3
どちらかと言えばあてはまらない	19	10.5	10.6
あてはまらない	2	1.1	1.1
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

ボランティアセンターが大学内にある意義は何だと思えますか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 学生がボランティアについての背景や知識を学べる機会を提供すること	27	14.9	14.9
ボランティア募集情報を精査し、諸条件を調整して活動環境を整えること	7	3.9	3.9
学生が気軽にボランティア情報にアクセスし、活動に参加できる機会を提供すること	100	55.2	55.2
学生が成長できる機会を提供すること	40	22.1	22.1
学生の学内における居場所の1つとなること	7	3.9	3.9
合計	181	100.0	100.0
欠損値 不明・無回答	0	0.0	
合計	181	100.0	

学生時代、学生スタッフ以外(学生スタッフ企画やセンター事業を除く)でもボランティア活動を行っていましたか。*在学生は現在、行っていますか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 定期的に参加	52	28.7	28.9
単発的な活動に参加	95	52.5	52.8
全くしていない	33	18.2	18.3
合計	180	99.4	100.0
欠損値 不明・無回答	1	0.6	
合計	181	100.0	

卒業後もボランティア活動に参加していますか。

	度数	パーセント	有効パーセント
有効 継続的に活動している 在学中から続けている活動	2	1.1	1.8
継続的に活動している 卒業後、新たに参加した活動	3	1.7	2.7
継続的に活動している 在学中から続けている活動も卒業後、新たに参加した活動も	3	1.7	2.7
時々、活動している 在学中から続けている活動	7	3.9	6.2
時々活動している 卒業後、新たに参加した活動	14	7.7	12.4
時々活動している 在学中から続けている活動も卒業後、新たに参加した活動も	2	1.1	1.8
興味はあるが活動していない	76	42.0	67.3
興味がなく活動していない	6	3.3	5.3
合計	113	62.4	100.0
欠損値 不明・無回答	68	37.6	
合計	181	100.0	

参加しているボランティア活動の分野を教えてください。(卒業生)

分野	子ども・青少年	高齢者	障がい児者 (知的・身体 精神発達)	医療	国際協力	人権	貧困	環境	災害
度数	9	1	12	1	6	3	5	3	6
分野	防犯	文化芸術	スポーツ	動物愛護	平和	まちづくり	自治会	中間支援	その他
度数	0	0	0	1	1	10	2	0	3

ボランティア活動への妨げとなることはありますか。(卒業生)

要因	ボランティア活動に関する情報の不足	参加する際の経費(交通費等)の負担	日々の忙しさ	心のゆとりがない	一緒に参加する仲間の不在	身近なところで活動するところがない	その他
度数	28	14	96	40	21	16	5

参加しているボランティア活動の分野を教えてください。(在学生)

分野	子ども・青少年	高齢者	障がい児者 (知的・身体 精神発達)	医療	国際協力	人権	貧困	環境	災害
度数	29	3	20	0	5	0	5	25	5
分野	防犯	文化芸術	スポーツ	動物愛護	平和	まちづくり	自治会	中間支援	その他
度数	0	6	7	1	0	7	9	0	2

ボランティア活動への妨げとなることはありますか。(在学生)

要因	ボランティア活動に関する情報の不足	参加する際の経費(交通費等)の負担	日々の忙しさ	心のゆとりがない	一緒に参加する仲間の不在	身近なところで活動するところがない	その他
度数	10	17	40	15	18	8	3

龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター 20 周年記念誌

ボランティアで未来を拓く

発行日：2021 年 3 月 31 日

発行・編集：龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター

印刷：株式会社 NPC コーポレーション

【問合せ】 龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター

URL <https://www.ryukoku.ac.jp/npo/> E-MAIL ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草キャンパス 〒612-8677 京都市伏見区深草塚本町 67

電話 075-645-2047 FAX 075-645-2064

瀬田キャンパス 〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷 1 番 5

電話 077-544-7252 FAX 077-544-7261
